

かみ えん や つき やま こ ふん
上 塩 治 築 山 古 墳



2004年3月

出雲市教育委員会

かみ えん や つき やま こ ふん
上 塩 治 築 山 古 墳



2004年3月

出雲市教育委員会

序

出雲市では国・島根県の補助を受け、平成12年度・13年度の2カ年をかけて、国指定史跡上塩治築山古墳周辺地の調査を行いました。本書はこの発掘調査の報告書です。

上塩治築山古墳は立派な横穴式石室を持つことで有名な古墳であり、これまで多くの研究対象となっていましたが、墳丘の崩壊が激しいことでもあって古墳の築造当時の広がりについてはうかがい知ることが難しい状況でした。しかし、発掘調査により周壕が確認されると同時に、その中からは多くの円筒埴輪や子持壺が出土して築造当時の様子を垣間見ることができました。また、墳丘の規模や墓域の広さも推定することができたなど大きな成果がありました。

最後になりましたが、発掘調査にご協力いただきました地権者の方々をはじめ、すべての方に御礼申し上げます。

平成16年3月

出雲市教育委員会

教育長 加藤武行

例　　言

1. 本書は島根県出雲市上塩冶町に所在する上塩冶築山古墳及び築山遺跡で行った発掘調査成果を報告するものである。
2. トレンチを設置した個所は出雲市上塩冶町 262 外である。
3. 現地の発掘調査は平成 12 年度が 10 月 16 日から 12 月 15 日まで、平成 13 年度が 10 月 15 日から 12 月 14 日まで実施した。
4. 発掘調査及び本書の作成は次の組織体制で行った。

発掘調査（平成 12～13 年度）

調査主体 出雲市教育委員会

調査指導 渡邊貞幸（島根大学法文学部教授）

足立克己、池淵俊一（島根県教育委員会）

事務局 大田 茂（出雲市教育委員会文化振興課長：平成 12 年度）

板倉 優（出雲市文化企画部芸術文化振興課長：平成 13 年度）

川上 稔（同 文化財室長）

調査員 三原一将（同 副主任主事：平成 12 年度）、高橋智也（同 主事：平成 13 年度）

調査補助 佐々木紀明、小村睦子、今岡ひとみ（以上、臨時職員）

報告書作成（平成 15 年度）

編集機関 出雲市教育委員会

事務局 板倉 優（出雲市文化企画部芸術文化振興課長）

川上 稔（同 文化財室長）

坂本豊治（同 主事）

5. 本書の執筆・編集は三原、高橋が協議して行った。なお、文責は目次に記した。

6. 遺構の略称記号は基本的に次のとおりであるが、遺構によっては性格が異なる場合もある。

SB：掘立柱建物 SE：井戸 SK：土坑 P：柱穴 SD：溝状遺構 SX：その他の遺構

7. 遺物の出土量を示すために用いたコンテナは L 540 mm × W 340 mm × H 150 mm、ビニール袋は L 380 mm × W 260 mm のものである。

8. 本書で使用した方位は座標北を示す。

9. 本書で使用した測地系は日本測地系（改正前）である。

10. 発掘調査にあたっては、次の地権者にお世話になった。記して謝意を表しておきたい。

森山英樹氏、永田順一氏、小林賢司氏、今岡貞吉氏

11. 発掘調査、遺物整理については、次の方々の協力を得た。

吾郷園生子、板倉惇夫、小玉 勇、小玉順子、白築正造、上代 勇、杉原秀雄、周藤俊也、須山林吉、曾田利夫、高橋裕子、長島節子、三島輝男、三成銀一郎、森山英夫、米山清司（以上発掘調査）、荒木恵理子、飯國陽子、園山美千代、田部美幸、水田節子（以上室内整理）

12. 遺物実測については、調査員のはか次の者が行った。

伊藤めぐみ、今岡ひとみ、勝部真紀、高橋亜紀、宮崎綾（以上臨時職員）

13. 本書で掲載した空中写真を除く写真の撮影は調査員が行った。

14. 本遺跡の出土遺物、実測図、写真などは出雲市教育委員会で保管している。

目 次

序

例 言

目 次

挿図目次 表目次 写真図版目次

第1章 調査に至る経緯 (三原) 1

第2章 位置と環境 (高橋) 2

第3章 調査の結果

第1節 遺構

(1) 平成12年度発掘調査 (三原) 5

(2) 平成13年度発掘調査 (高橋) 16

第2節 出土遺物

(1) 平成12年度出土遺物 (三原) 27

(2) 平成13年度出土遺物 (高橋) 39

第3節 調査成果のまとめ (高橋) 56

第4章 考察

第1節 上塩冶築山古墳の墳丘形態と規模 (高橋) 59

第2節 上塩冶築山古墳出土の円筒埴輪について (高橋) 62

第3節 上塩冶築山古墳出土の須恵器子持壺について (三原) 67

遺物観察表

写真図版

報告書抄録

挿図目次

第2章 位置と環境	
図1 出雲平野主要遺跡分布図	3
第3章 調査の結果	
図2 トレンチ配置図(1:600)	4
図3 第1TSD03遺物出土状況図(1:40)	6
図4 第1T遺構・土層図(1:80)	7
図5 第2T遺構・土層図(1:80)	9
図6 第2TE3gr遺物出土状況図(1:40)	10
図7 第3T遺構・土層図①(1:80)	10
図8 第3T遺構・土層図②(1:80)	11
図9 第3TG2gr遺物出土状況図(1:40)	12
図10 第3TSE01実測図(1:40)	14
図11 第3TSB01実測図(1:60)	14
図12 第4T遺構・土層図(1:80)	15
図13 第5T遺構・土層図(1:80)	18
図14 第5T遺物出土状況図(1:80)	19
図15 第6T遺構・土層図(1:80)	21
図16 第6T遺物出土状況図(1:80)	22
図17 第7T遺構・土層図(1:80)	24
図18 第7T遺物出土状況図(1:80)	25
図19 第8T土層図(1:80)	26
図20 第1TSD03出土遺物①(埴輪)(1:4)	27
図21 第1TSD03出土遺物②(須恵器)(1:4)	28
図22 第1TSD03出土遺物③(須恵器)(1:6)	28
図23 第1TSD01出土遺物(土師器)(1:3)	29
図24 第2T出土遺物①(埴輪)(1:4)	30
図25 第2T出土遺物②(須恵器)(1:4)	31
図26 第3T出土遺物①(埴輪)(1:4)	32
図27 第3T出土遺物②(埴輪)(1:4)	33
図28 第3T出土遺物③(埴輪)(1:4)	34
図29 第3T出土遺物④(埴輪)(1:4)	35
図30 第3T出土遺物⑤(須恵器)(1:4)	36
図31 第3T出土遺物⑥(土師器)(1:3)	37
図32 第4T出土遺物(埴輪)(1:4)	38
図33 第4・5T出土遺物(1:4)	39
図34 第5T出土遺物①(埴輪)(1:4)	40
図35 第5T出土遺物②(埴輪)(1:4)	41
図36 第5T出土遺物③(埴輪・土器)(1:3)	42
図37 第6T出土遺物①(埴輪)(1:4)	43
図38 第6T出土遺物②(埴輪)(1:4)	44
図39 第6T出土遺物③(埴輪)(1:4)	45
図40 第6T出土遺物④(埴輪)(1:4)	46
図41 第6T出土遺物⑤(土師器・須恵器)(1:3)	47
図42 第7T出土遺物①(埴輪)(1:4)	49
図43 第7T出土遺物②(埴輪)(1:4)	50
図44 第7T出土遺物③(埴輪)(1:4)	51
図45 第7T出土遺物④(埴輪)(1:4)	52
図46 第7T出土遺物⑤(埴輪)(1:4)	53
図47 第7T出土遺物⑥(土師器)(1:3)	54
図48 第8T出土遺物(須恵器)(1:3)	55
第4章 考察	
図49 墳丘規模復元図	61
図50 円筒埴輪形態分類図	63

表目次

第3章 調査の結果	
表1 平成12年度発掘調査主要基準杭座標一覧表	5
表2 平成13年度発掘調査主要基準杭座標一覧表	16
第4章 考察	
表3 赤色円筒埴輪一覧表	64
表4 明橙色円筒埴輪一覧表	65
表5 上塗冶築山古墳出土須恵器子持壺属性分類表	68

写真図版目次

- 図版 1 第1T調査状況（南西から）
　　第1T調査完了状況（南から）
　　第1TSD02完掘状況（北から）
- 図版 2 第1TSD03遺物出土状況①（南から）
　　第1TSD03遺物出土状況②（南から）
　　第1TSD03土層堆積状況（東から）
- 図版 3 第2T調査前状況（南西から）
　　第2T調査完了状況（南西から）
- 図版 4 第2T北東壁土層堆積状況（南西から）
　　第2T北西壁墳丘荷土層堆積状況（南東から）
- 図版 5 第3T調査前状況（西から）
　　第3T調査状況（西から）
　　第3TG2gr遺物出土状況（西から）
- 図版 6 第3TG8gr調査完了状況（西から）
　　第3TSE01完掘状況（南から）
　　第3TSB01検出状況（西から）
- 図版 7 第4T調査完了状況（南から）
　　第4T調査完了状況（北から）
　　第4TSD02完掘状況（南から）
- 図版 8 第4TSD02土層堆積状況（東から）
　　第4TSD02土層堆積状況（南から）
　　第4TI1-I2gr調査完了状況（北から）
- 図版 9 第5T調査前
　　第5T周壕検出状況
　　第5T調査状況
- 図版 10 第5T墳丘盛上部土層堆積状況①
　　第5T墳丘盛上部土層堆積状況②
- 図版 11 第5T1Gr遺構検出状況
　　第5T完掘状況
　　第5T周壕肩（墳丘側）付近
- 図版 12 第6T調査前
　　第6T地山落ち込み部土層堆積状況
　　第6T遺物出土状況①
- 図版 13 第6T周壕中央部土層堆積状況
　　第6T遺物出土状況②
　　第6T完掘状況
- 図版 14 第7T調査前
　　第7T周壕肩（墳丘側）検出状況
　　第7T周壕肩（墳丘側）完掘状況
- 図版 15 第7T2gr遺物出土状況①
　　第7T2gr遺物出土状況②
- 図版 16 第7T2gr遺物出土状況③
- 第7T2gr遺物出土状況④
- 図版 17 第7T周壕埋土堆積状況（周濠外周付近）
　　第7T土層堆積状況
　　第7TSD03土層堆積状況
- 図版 18 第7TSX01検出状況
　　第8T遺物検出状況
　　第8T土層堆積状況
- 図版 19 第1TSD03出土 円筒埴輪
　　第1TSD03出土 円筒埴輪
　　第1T出土 須恵器子持壺（壺部）
　　第1T出土 須恵器子持壺（脚部）
- 図版 20 第1T出土 須恵器壺（口緑部）
　　第1T出土 須恵器壺（胴部）
　　第1TSD01出土 中世土師器
- 図版 21 第1・2T出土 円筒埴輪
　　第2T出土 円筒埴輪
　　第2T出土 円筒埴輪
- 図版 22 第2T出土 須恵器子持壺（壺部から脚部）
　　第2T出土 須恵器子持壺（脚端部）
- 図版 22～図版 27
　　第3T出土 円筒埴輪
　　第3T出土 須恵器子持壺
　　第3T出土 須恵器子持壺（脚端部）
- 図版 29 第3T出土 中世土師器
　　第3T出土 中世土師器
- 図版 30 第3T出土 中世土師器
　　第4T出土 円筒埴輪
　　第4T出土 円筒埴輪
- 図版 31 第4T・5T出土 須恵器
　　第5T出土 円筒埴輪
- 図版 32 第5T出土 円筒埴輪・須恵器・土師器
- 図版 33 第6T出土 円筒埴輪
- 図版 34 第6T出土 円筒埴輪
- 図版 35 第6T出土 円筒埴輪・須恵器・土師器
- 図版 36 第6T出土 土師器
- 図版 37 第7T出土 円筒埴輪
- 図版 38 第7T出土 円筒埴輪・形象埴輪
- 図版 39 第7T出土 円筒埴輪
- 図版 40 第7T出土 須恵器
- 図版 41 第7T出土 土師器
- 図版 42 第7T出土 土師器
- 図版 43 第7T出土 土師器

第1章 調査に至る経緯

出雲市教育委員会では国庫・県費補助を受け、近年継続的に市内の重要な遺跡の詳細確認などを目的に、トレンチ調査を主とした発掘調査を行っている。

このような状況の中、当初、平成12年度（2000）は前年度に引き続いて古志本郷遺跡の郡家跡と考えられる遺構と下古志遺跡の環濠跡と考えられる遺構を対象に、範囲確認調査を行う予定であった。

しかし、島根県出雲土木建築事務所によって主要地方道出雲三刀屋線改良計画が進められつつあるのに伴い、島根県教育委員会から予定を変更し、この計画予定地周辺であり、かつ、特に重要と考えられる塩治判官館跡と築山遺跡の発掘調査を優先的に行い、今後の保存方針を判断するうえで必要となる遺跡の性格についてのデータを集めておくよう指示があった。出雲市教育委員会はこれを受け今回の発掘調査を実施することとなった。

この地は以前トレンチ調査が行われていた。そのため、トレンチ設定については、これらを勘案して事前に出雲市教育委員会で設定候補地を検討したのち、島根県教育委員会と現地にて協議して決定した。その後、出雲市教育委員会が地権者に打診し、地権者の意向を踏まえた箇所を最終的なトレンチ設定箇所とした。

この結果、上塩治築山古墳周辺については第1Tから第8Tを設定することになり、平成12年度（2000）に第1Tから第4Tを、平成13年度（2001）に第5Tから第8Tを発掘調査した。

なお、塩治判官館跡については当初3箇所程度予定していたトレンチ設定箇所が、第1Tの1箇所に絞られることとなり、平成12年度（2000）にあわせて発掘調査を実施し、平成15年3月に報告書を発刊している。

第2章 位置と環境

上塩治築山古墳は島根県出雲市上塩治町に位置している。この場所は出雲平野の南側、神戸川が平野へと流れ出るすぐそばであり、神戸川の沖積作用によって形作られた平野の縁辺に近い部分にあたり。ここでは、上塩治築山古墳周辺における歴史的概観をみておきたい。

旧石器・縄文時代

旧石器時代の遺跡は上塩治築山古墳周辺ばかりでなく、出雲平野には見ることはできない。縄文時代にはいると縄文時代早期と考えられる原山遺跡（大社町）・上長浜貝塚といった遺跡が出現するが、現在の出雲平野のほとんどは海進によって海の底となっており、平野縁辺部にしか人間の活動痕跡をみることはできない。縄文時代後期になると平野中心部の微高地に矢野遺跡などが出現する。上塩治築山古墳の周辺においても三田谷I遺跡がみられ、この遺跡からは丸木舟が発見されていることから、この遺跡の周辺は河道であったことがわかっている。

弥生時代

弥生時代前期においては矢野遺跡などが引き続き営まれるが、人々が本格的に平野への進出を果たすのは弥生時代中期に入つてからである。弥生時代中期には四絡遺跡群・古志遺跡群・天神遺跡といつた斐伊川・神戸川の自然堤防上に立地する遺跡が多く出現する。特に天神遺跡においてはこの時期の集落区画溝の可能性がある大溝が発見されており大規模な集落が形成される先駆けとなっている。弥生時代後期から古墳時代初頭は天神遺跡も継続して営まれるが、特筆すべきは古志遺跡群が最盛期を迎えることである。古志本郷遺跡・下古志遺跡とも大規模な集落区画溝が発見されており、非常に大きい集落が形成されていたことをうかがわせる。

これと同時期、弥生時代後期後半に四隅突出型墳丘墓が丘陵上に多く造営される西谷墳墓群が構築されるようになる。また、四隅突出型墳丘墓は丘陵上だけではなく中野美保遺跡・青木遺跡のように平地でも発見されており、いわゆる首長層を含むこの地域の実力者の墳墓形態として定着したようである。しかし、これらの集落・墳墓は古墳時代初頭をもって突如としてその数を急激に減らしていく。

古墳時代

出雲平野において古墳時代前期における集落は発見されていない。前期古墳も山地古墳・大寺古墳・西谷7号墓が平野縁辺部に見られるのみであり、この時代以前の様子とは一線を画している。中期に入つても古墳の築造は西谷15・16号墓・北光寺古墳と依然として少ない。集落では三田谷I遺跡で古墳時代中期の集落が発見されているほか井原遺跡でこの時期の土器が多く出土するなど、少なからず人間の営みの痕跡を見ることができる。

出雲平野に古墳文化が花開くのは古墳時代後期に入つてからのことである。6世紀後半の今市大念寺古墳を皮切りに上塩治築山古墳・地蔵山古墳といった首長墓と考えられる巨大な古墳が神戸川右岸に次々と築造される。それに対応するように、神戸川左岸にも妙蓮寺山古墳・放れ山古墳・小坂古墳といった横穴式石室を持った古墳も築造されており、神戸川右岸の被葬者である首長の副官クラスと考えられる人が葬られていたと考えられている。また、後期後半からは神門横穴墓群や上塩治横穴墓群といった2大横穴墓群が形成され始め、終末期になるとこれらが盛行するようになる。

古代

奈良時代に入り古代の郡制の開始により出雲平野は神門郡・出雲郡の2郡に分割され、上塩治築山古墳の周辺は神門郡に属することとなる。近年の調査により神門郡家は古志本郷遺跡に比定されるようになった。また、新造院の一所として神門寺境内廃寺が比定されている。

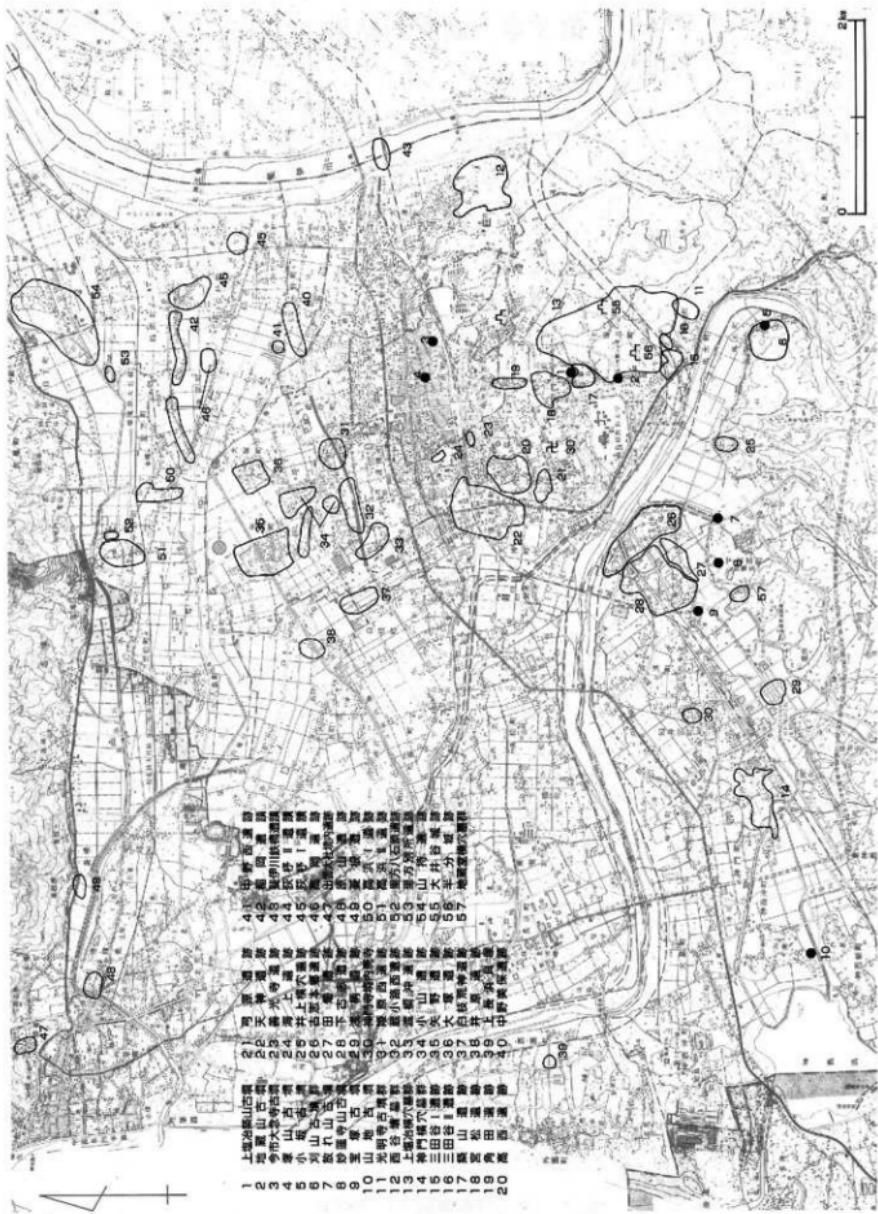


図1 出雲平野 主要道路分布図 (1:50000)

第3章 調査の結果

上塙治築山古墳はこれまで円墳と推測されてきてはいるが、前方後円墳など異なる墳形を呈する可能性も残されていた。

一方、島根県出雲土木建築事務所が計画する県道出雲三刀屋線は、築山古墳の見かけの墳裾から、南に約70m離れた地点を東西横切る道路である。このため、築山古墳が前方後円墳であり、かつ、前方部が南方あるいは南東方向に伸びることを想定した場合、県道出雲三刀屋線が墳丘の一部あるいは墓域付近をかすめる可能性も考えられた。したがって、平成12年度の調査では、取り急ぎ確認が必要であった、現存墳丘の南方から南東方向に広がる墓域の有無を確認するために、第1Tから第5Tを設定し調査を進め、さらに、平成13年度調査では、前年度調査で確認ができなかった西方や北方にもトレンチを追加し、合計8つのトレンチを設定して調査を実施した。

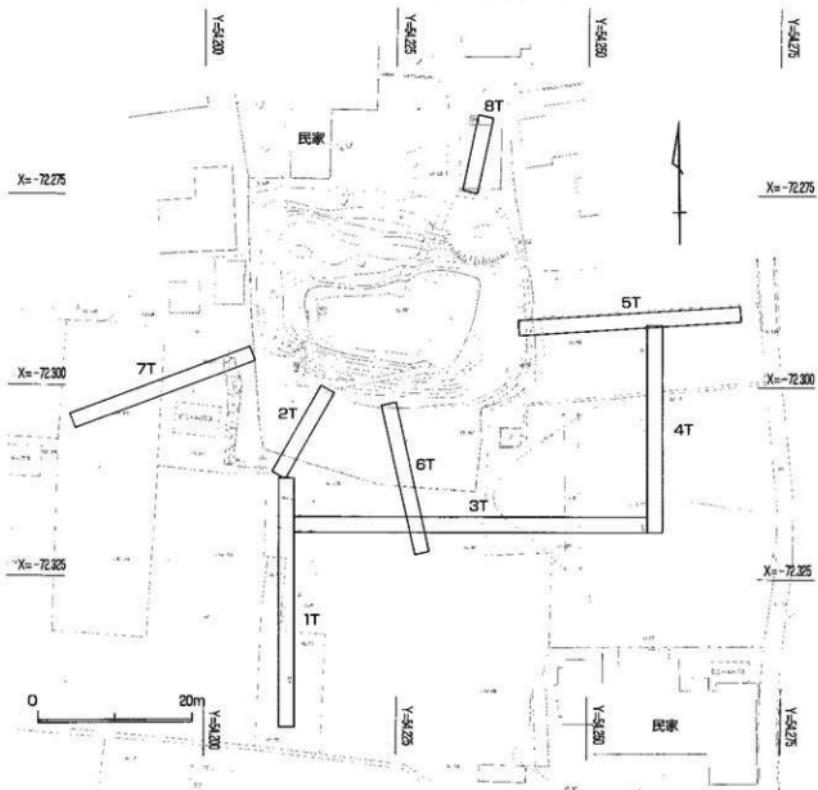


図2 トレンチ配置図 (1:600)

第1節 遺構

(1) 平成12年度発掘調査

平成12年度(2000)の発掘調査は、上塩治築山古墳の南方向から南東方に広がる可能性のある墓域の有無を確認することを目的に、国庫・県費補助を受け、平成12年(2000)10月16日から平成12年12月15日まで実施した。

トレンチの設定にあたっては、事前に島根県教育委員会文化財課と協議を重ねたが、地権者の都合も考慮し、結果的に築山古墳の南側を主に第1Tから第5Tの合計5つのトレンチを設定することになった。

第1Tは築山古墳の見かけの墳裾から11m離れた地点から南に向かって設定した2m×32.5mのトレンチである。一部に地権者宅の墓地があったため、その箇所を除く区間について調査を実施した。

標高9.8m～10.0m付近に地山が広がっており、この上面で遺構検出を行ったところ、調査区南側において、東西方向に延びる中世土師器などを出土する溝状遺構を2条確認したほか、ピットなども検出した。また、C3grでは円筒埴輪片や須恵器子持蓋片が密集して出土した箇所も認められた。

第2Tは築山古墳の見かけの墳裾から南に向かい設定した2m×11.8mのトレンチである。地山は調査区北端のE1grでは標高10.3m付近で、南端のE3grでは標高9.5m付近で検出した。よって、墳丘の近くでは、トレンチの南寄りに比べ0.8m程度地山が高いことが確認できた。また、E2-E1ラインセクションでは上塩治築山古墳の盛土と思われる土層を確認した。

第3Tは築山古墳南側に東西に設定した2m×46mのトレンチである。西寄りのG2grでは円筒埴輪片や須恵器子持蓋片が比較的密に出土したほか、G3grからG4grにかけては中世のものと思われる礎石も確認できた。

地山上面はG1grでは標高9.8m付近に広がっているようであるが、東に向かい徐々に低くなってしまい、G7grでは標高9.5mまで落ち込んでいる。しかし、G8grでは再び標高10.1mまで高くなっている。現在、築山古墳周辺はほぼ平坦であるが、かつては0.6m程度の標高差で起伏があったことが窺える。

第4Tは築山古墳の見かけの墳裾から約15m離れた箇所に、南北方向に設定した2m×27mのトレンチである。

標高10.1m付近で地山に至り、この上面で溝状遺構やピットなどを検出したが、SD02のみを完掘し、他は未調査のまま調査を打ち切った。

第5Tは墳丘東側に設定した、長さ12.5mを測るトレンチであるが、未調査のまま調査を打ち切った。

T	測点	X	Y
1	C1	-72311.958	54209.741
	C8'	-72344.473	54209.757
T	D1	-72311.954	54211.741
	D8'	-72344.472	54211.756
2	E1	-72299.813	54215.207
	E4	-72311.141	54208.834
T	F1	-72300.786	54216.946
	F4	-72312.127	54210.586

T	測点	X	Y
3	G1	-72316.960	54211.742
	G10	-72316.927	54256.743
T	H1	-72318.960	54211.740
	H10	-72318.912	54256.746
4	I1	-72291.919	54257.730
	I7	-72318.912	54257.747
T	J1	-72291.914	54259.729
	J7	-72318.916	54259.747

表1 平成12年度発掘調査主要基準杭座標一覧表

第1トレンチ

土層堆積状況

第1Tには上層から順に、1. 黒褐色土層（現耕作土層）、2. 黒褐色土層がトレンチ全体を通して確認できた。また、C1 grからC3 grにかけては部分的に3. 黒色土層が地山より上位に観察できた。1層、2層からは円筒埴輪片、須恵器片、中世土師器片などが出土するが、3層からは円筒埴輪片、須恵器子持壺片が出土していることから、1層、2層が中世以降、3層が古墳時代の遺物包含層と考えられる。

地山は砂を多く含むぶい黄褐色土で、墳丘に最も近いC1 grでは標高9.75 m付近で、最も遠いC7 grでは10.15 m付近で観察できた。このことから、地山の標高は南に向かうにつれ、徐々に上がっていることが確認できた。

層序で興味深い点は、C1-C2ラインセクションで観察できたa. 黒褐色土層とb. 黑褐色土層である。出土遺物がないため時代は不明であるが、墳丘近くの地山直上で観察でき、砂混じりの硬く締まった層であることなどから、墳丘築造にあたり人工的に造成された墳丘基底部である可能性も考えられる。

検出遺構の概要

遺構検出を地山上面で行ったところ、溝状遺構や土坑などを検出した。しかし、今回の調査目的が築山古墳の墓域の広がりや墳形確認を主としていたため、古墳に関連する可能性のあったSD 01、SD 02、SD 03のみを掘削して詳細を記録し、その他の検出遺構は掘削せずに現状保存した。調査の結果、出土遺物などから、SD 03が古墳に関係する遺構で、SD 01とSD 02は後世の遺構であることが判明した。

古墳関連遺構

SD 03はC3 grの標高9.70 mの調査面で検出した遺構である。現在の墓地が間際にあったため、一部の検出にとどまつたが、溝状を呈するものと思われる。検出部分での遺構の深さは10cm～18cmと浅く、底は比較的平坦である。この遺構は現在の見かけの墳裾から約20m離れた箇所に存在することと、軸方向などを勘案し、古墳の周溝である可能性が考えられる。

遺物については、検出面より上位の標高10.10 m付近から遺構内にかけて土器片が密集して出土した。これらは円筒埴輪片、須恵器子持壺片、須恵器大甕片であったが、接合の結果、いずれもほぼ完形に復元できた。特

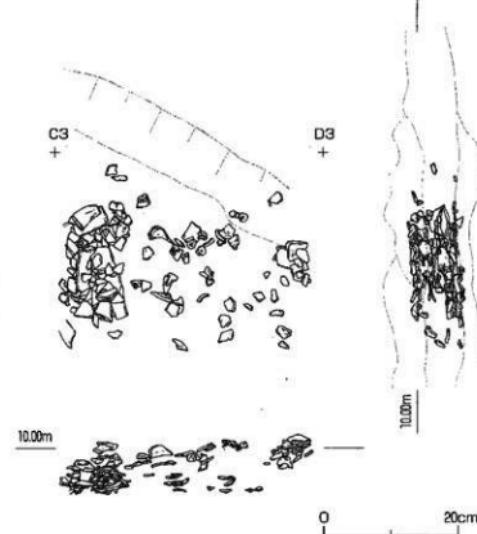


図3 第1T SD 03 遺物出土状況図 (1:40)

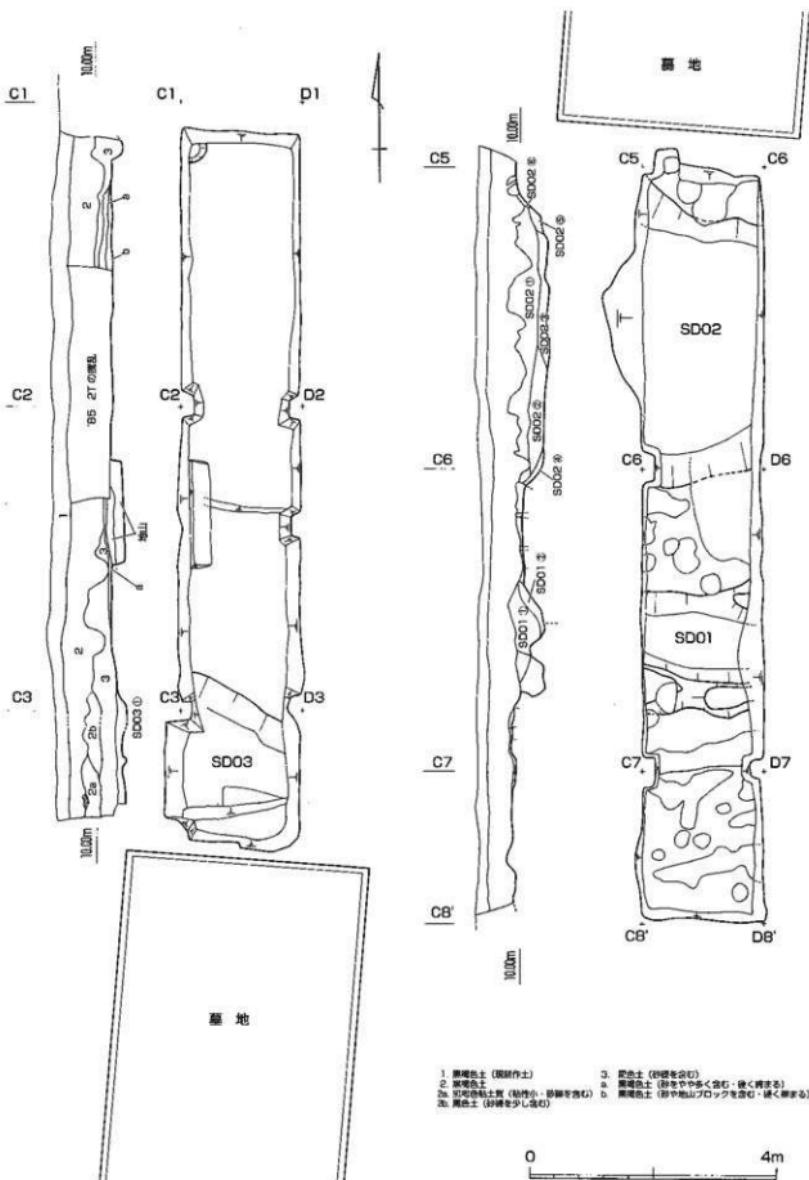


図4 第1T遺構・土層図 (1:80)

に円筒埴輪は、破片があまり散乱していない状態で出土していることから、遺構の傍らに設置されたものが横転し、そのまま埋没した状況も想定できる。他の出土遺物も含めて、出土地からあまり離れていない地点に設置されていた印象を受ける出土状況であった。

その他の遺構

SD 01 は C 6 gr の標高 9.90 m 付近の地山面で検出した溝状遺構と考えられる遺構である。N-80° ~ W 方向に主軸を持ち、検出規模は長さ 1.54 m、上幅 1.7 m ~ 1.2 m、下幅 0.9 m ~ 0.6 m、深さ 29 cm を測る。C ラインで断面を観察すると、覆土が一部標高 10.20 m 付近から観察できることから、元来 60 cm 以上の深さを有していたと考えられる。断面形は「U」字状を呈するが、側壁の立ち上がりは北側と比較し南側が急である。また、2 層確認できた覆土の堆積状況から、掘り返しが行われたことが伺える。遺物はビニール袋 1 / 3 程度の中世土師器片が出土しており、実測可能なものを 04-1 に図示した。標高 9.65 m で出土したこの中世土師器は 13 世紀の所産と考えられ、遺構の時期を示すと思われる。

SD 02 は C 5 gr の標高 9.90 m 付近の地山面で検出した溝状遺構と考えられる遺構である。概ねトレンチと直交する方向に延びており、検出規模は上幅 5.0 m ~ 4.0 m、下幅 3.7 ~ 2.9 m、深さ 37 cm ~ 27 cm を測る。C ラインで断面観察を行うと、覆土が一部標高 10.23 m まで認められることから、本来 80 cm 程度の深さを有する溝であったと思われる。覆土は 6 層確認でき、ここからビニール袋 1 / 3 程度の遺物が出土した。円筒埴輪片も認められるが中世土師器片が存在するため、この遺構の時期は中世と考えられる。

第 1 トレーナーのまとめ

以上の調査結果から、C 3 gr の一部と C 4 gr は現在の墓地が占有し調査ができなかったが、SD 03 より南には築山古墳に関係すると考えられる遺構が確認できなかった。このため、少なくとも C 5 gr 以南には築山古墳の墓域は広がらないと考えられる。

第 2 トレーナー

土層堆積状況

第 2 T は現在の見かけの埴輪付近から、N-30° - E 方向に 11.8 m の長さに設置したトレーナーである。掘削によって表土下に埋まる本来の埴輪を破壊する可能性があったため、土層堆積状況の観察に重点を置くこととし、埴輪破壊を最小限に防ぐべく、全体を 50 cm 程度掘削後、E ラインから幅 1 m のみを地山まで掘り下げるにとどめ調査を実施した。

このトレーナー付近、つまり、墳丘の南側は他の墳丘周囲より標高が若干高い。また、この土中から円筒埴輪片が出土することが以前から確認されていた。このため、墳丘の土を削って造成されたと推定されている。この土は E ラインの断面で 1. 黒色土層として確認できた。墳丘寄りでは 30 cm 程度の堆積となっているが、墳丘から離れた地点では、130 cm ~ 50 cm の厚さで堆積している。

5. 黒色土層、6. 黒色土層、7. 黒褐色粘質土層、8. 黑褐色土層、9. 黑褐色土層は落ち込みの覆土である。検出範囲が狭く形状の詳細が不明であるが、溝状を呈すると思われる。しかし、軸方向から古墳に関連するものではなく、後世に築かれたものと考えられる。

11. 黒色土層、12. 黒色土層は、E 3 gr の標高 9.50 m 付近の地山上堆積する土である。この箇所の地山は概ね平坦であるが、E 3-E 2 ラインで標高を徐々に上げている箇所が認められることから、ここに元来の埴輪が存在していた可能性も指摘できる。なお、この場合、築山古墳が円墳で石室中心線上かつ奥壁付近に円の中心が存在したと仮定すると、その規模は直径 46 m を測ることとなる。また、墳

裾の周りは地山を削って整えたことも、地山が平坦である現状から想定できる。11層、12層はそうした地山上に後世に堆積した土であろう。

最も墳丘に近い箇所では2.灰黄褐色砂層、13.黒色土層、14.黒色土層、15.黒色土層、16.黒褐色土層が観察できた。標高10.20mの平坦に整えられたと思われる地山上にこれららの層はほぼ水平に載っている。2層を除く層はいずれも縁まりがあり、他の層とは明らかに性質を異にしているため、これららは墳丘の盛土である可能性が高い。なお、E2--F2ラインまでこれらの層は延びないが、これをもって墳裾を想定することはできない。なぜなら、先の仮定で墳丘規模を推定すると、半径17m程度となる。他の箇所で現存する見かけの墳裾でも半径17mを越える箇所があるため、ここを本来の墳裾とするには無理がある。

10. 黒褐色土層はE2grで標高10.04 mから9.70 mの地山上に載る土である。この層からは円筒埴輪片が出土しているため、墳丘築造時の土ではない。

遺物出土狀況

1層と4層は円筒埴輪片を多く出土するが、中世土器なども混じるため、中世以降の堆積である。また、10層からは円筒埴輪片が出土しているため、少なくとも埴丘築造時の土ではない。11層からは比較的大きな円筒埴輪片のほか、 $1/2$ 程度に復元できる須恵器子持壺片が出している。10層と11層の新旧関係ははっきりしないが、出土遺物の残存状態から推定するに11層の方が古いと思われる。よって、11層はお

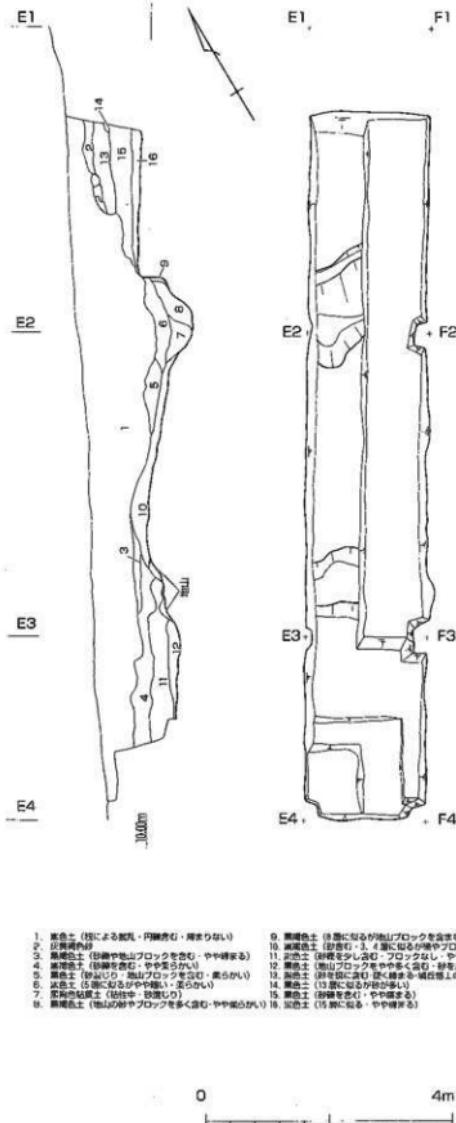


図5 第2丁遺構・土層図 (1:80)

そらく中世以前に墳丘の土を用いて造成された盛土と思われる。

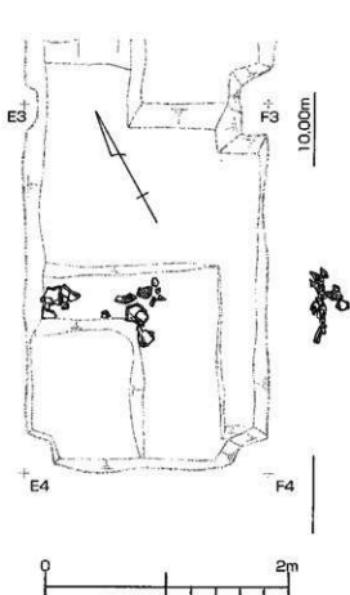


図6 第2TE3gr遺物出土状況図（1:40）

第3トレンチ

十一層堆積狀況

第3Tは墳丘の南から南東にかけての墓域の広がりを確認するために、東西方向に設定した長さ46mを測るトレンチである。

層序は概観すると3層に分けられる。すなわち、1層は現耕作土層、2~2e層は中世以降の遺物包含層、3~3j層は古墳時代遺物包含層である。地山の標高に着目するとG1grでは9.8m付近で観察できる地山は、G2grからG8grにかけては9.5m付近とやや落ち込み、G9・G10grでは10.0m付近に標高を上げている。3~3j層は地山の標高が低いG2grからG8grにかけて2~2e層と地山の間に堆積する層である。この層は築山古墳の墳丘に備えられていたと

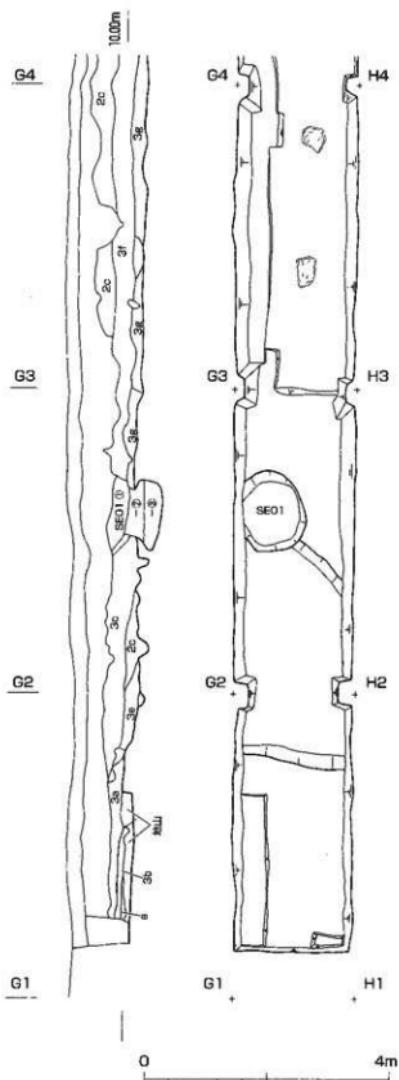


図7 第3丁遺構・土層図①(1:80)

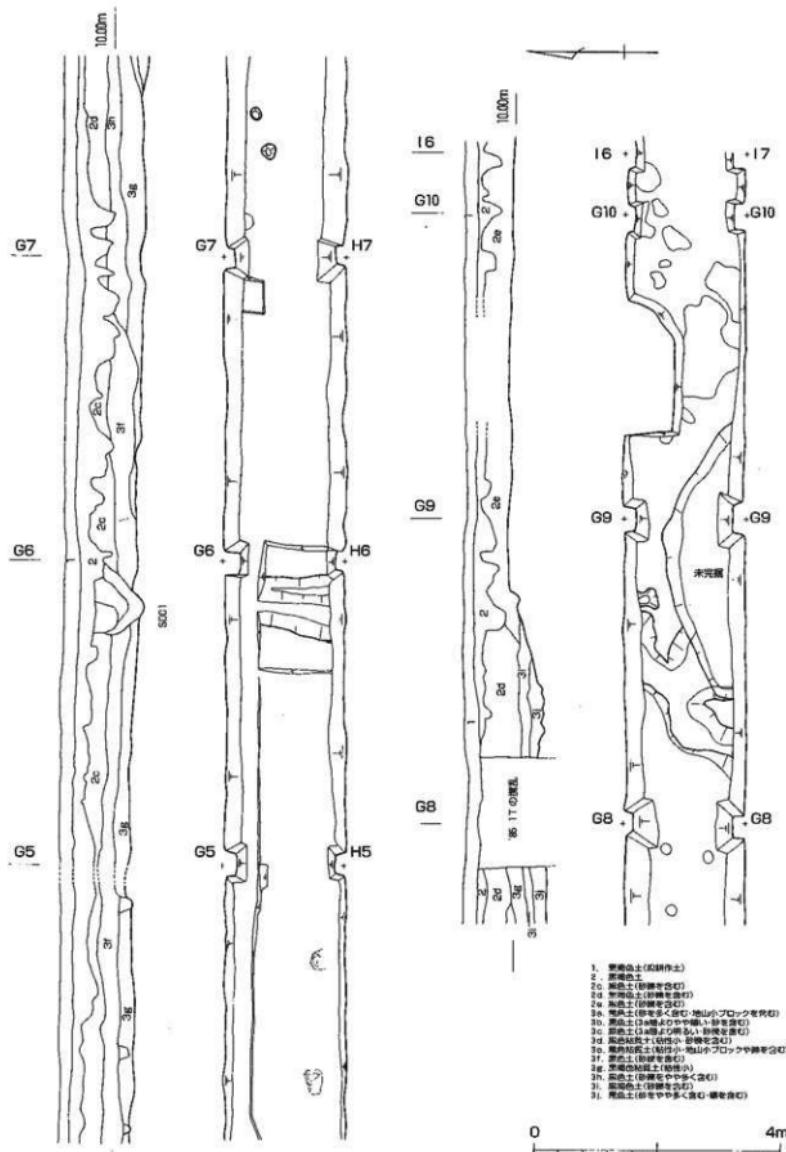


図 8 第3T造構・土層図② (1:80)

考えられる円筒埴輪片を多量に包含していた。

検出遺構の概要

G3grからG5grにかけては礎石と考えられる直線上に並ぶ石を4個確認した。このため、地山までの掘削はG3-G6ラインのサブトレンチのみにとどめ、礎石検出面以下は地山までの堆積土の掘削は行わなかつたが、その他のグリッドについては地山面で遺構検出を行った。

この結果、礎石のほか溝状遺構、井戸跡、ピットなどを確認したが、検出時に古墳に関係する可能性があると思われた遺構を主に完掘して記録を取り、その他のものは掘削を行わなかつた。

古墳関連遺構

古墳に関係する明確な遺構は検出されなかつたが、堆積土中に多量の円筒埴輪片を包含する低地の広がりがG2grからG8grにかけて確認できた。この間の地山の標高は9.5m付近であるのに対して、G1grでは9.8m付近、G9grでは10.00m付近となっており、30cm~50cm程度地山が低い。特にG8grでは中程に段が認められ、これを境に標高差が生じている状況である。この段は墓域を区画するため、人工的に築かれた可能性が指摘できる。

遺物はG2grの堆積土3c~3g層で特に多く出土している。円筒埴輪片のほかに手持壺が認められ、破片も比較的大きいことから付近に備えられていたものと推測される。

その他の遺構

SE01はG2grの標高9.70mの調査面で検出した井戸跡と考えられる遺構である。一部がトレンチ外に広がっているが、平面形は径1.3m程度の円形を呈すると推定され、最下低までの深さは54cmを測る。また、底はほぼ平坦であるが、側壁を抉り袋状に広がっている。この底からは湧き水が認めら

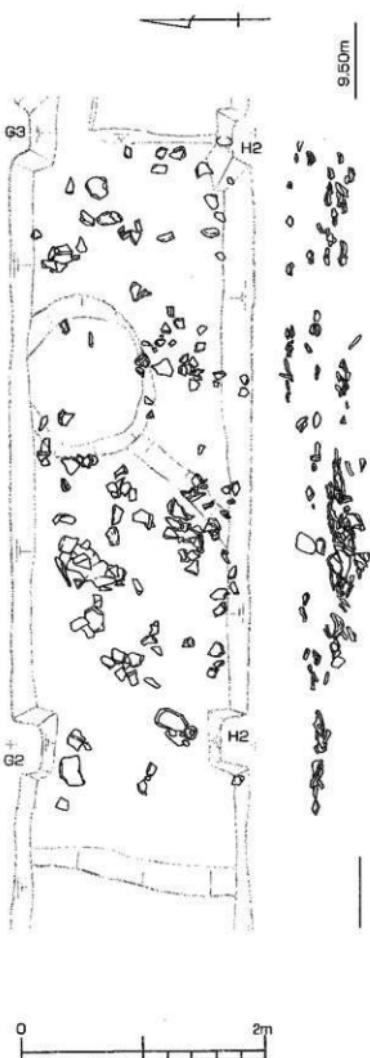


図9 第3TG2gr遺物出土状況図 (1:40)

れるが、井戸側や水溜の痕跡は検出できなかった。よって、素掘りの井戸であった可能性が高い。

G2-G3ラインセクションで土の堆積を観察すると、検出面上位からこの遺構の落ち込みが観察できた。したがって本来の深さは90cm以上となる。

覆土は3層確認でき、ここから円筒埴輪などの破片が出土している。しかし、これらの遺物はこの遺構が埋まつた際に、周囲の包含層から混入したものと考えられ、遺構の時期を示すものではない。この井戸の時期は中世以降と考えられる。

SB01はG3・G4grで検出した礎石建物跡と考えられる石列である。石は加工が施されていない自然石が用いられており、30cm～50cm程度の大きさのものがN-87°～W方向の直線上に4個確認できた。平坦な面を上に向け、いずれもその面がほぼ水平になるように据えられているが、各石の検出レベルにはばらつきがあり、標高9.80m～10.16mとなっている。また、配置の間隔も220cm、230cm、200cmと若干差が認められる。これらの石は層位的に2c層と3f層の境、または、3f層内で検出されるが、堀方は認められないことから地表に露出するように据えられたと考えられる。検出した状態では3間の建物であるが、トレンチ外にさらに規模が広がる可能性を残している。なお、時代については検出層位から推定し、中世以降と考えられる。

SD01はG5grのG6-H6ライン際で検出した溝状遺構であり、2C層を掘り込んで築かれている。N-11°～E方向に軸をとり長さ1.2mの検出とどったが、検出規模は上幅80cm～106cm、下幅15cm～31cm、深さ80cmで、底の標高は9.41mである。断面形は「U」字状を呈しており、側壁の勾配は41°である。覆土は3層に分層可能で、少量の土器片が出土している。時期については検出層位から中世以降と考えられる。

第4トレンチ

土層堆積状況

第4Tは墳丘の南東から東にかけての墓域の広がりを確認するために、南北方向に設定した長さ27mのトレンチである。このうち遺構検出を実施したのはI3grからI6grまでの17m間であり、I1grとI2grの10m間は調査期間の都合上、表土から60cmの掘削を行った時点で調査を中断している。

I3grから16grにかけての層序については、概観して、1層、2層、2e層の3層に分層可能である。これらは第3Tの同名層と同一層であり、それぞれ繋がり対応するものとなっている。地山の標高に着目すると、10.00m～10.18mであり、第3Tと比較するとさらに標高が高くなっている。

検出遺構の概要

I3grからI6grにかけて地山面で遺構検出を行ったところ、ピットや溝状遺構と考えられる遺構を検出した。これらのうち、古墳に関係する可能性があるSD02のみ完掘して記録を取ったが、他の遺構については検出のみにとどめ掘削は行わなかった。

古墳関連遺構

SD02はI3grで検出した遺構であり溝状を呈すると思われる。トレンチに対して斜め方向に延びていて、墳丘方向に落ち込む側壁から底にかけての一部の検出にとどまり、もう片方の側壁の立ち上がりは検出できなかった。検出部分でこの遺構を直線的に概観すると、N-27°～E方向に軸をとるようであるが、若干湾曲している様子も窺える。検出した範囲では、この遺構は標高9.90mの地山面から落ち込みが確認でき、底は平坦で標高9.43mを測る。また、側壁の立ち上がりは緩やかであり、標高9.60m前後に幅70cm程度の段も認められる。4層確認できる覆土及びその上位に堆積する遺物包

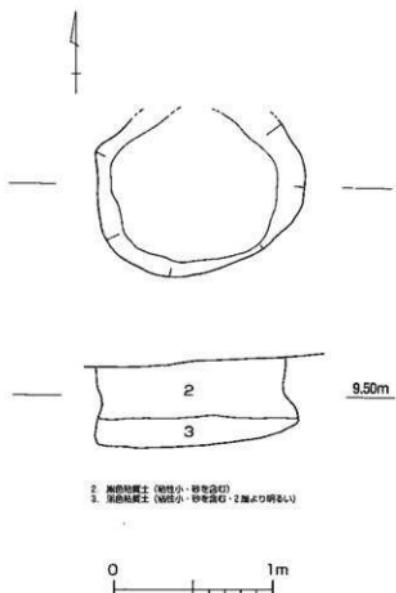


図 10 第3 TSE 01 実測図 (1:40)

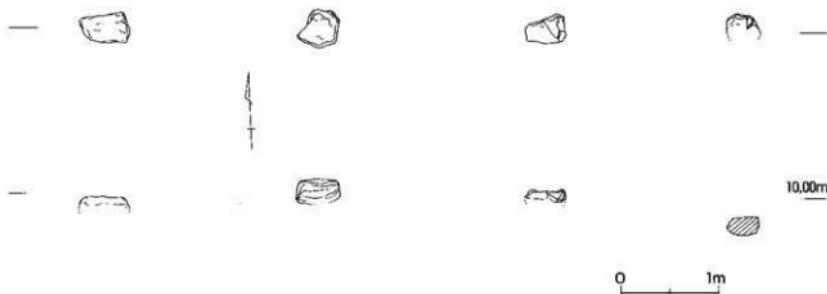


図 11 第3 TSB 01 実測図 (1:60)

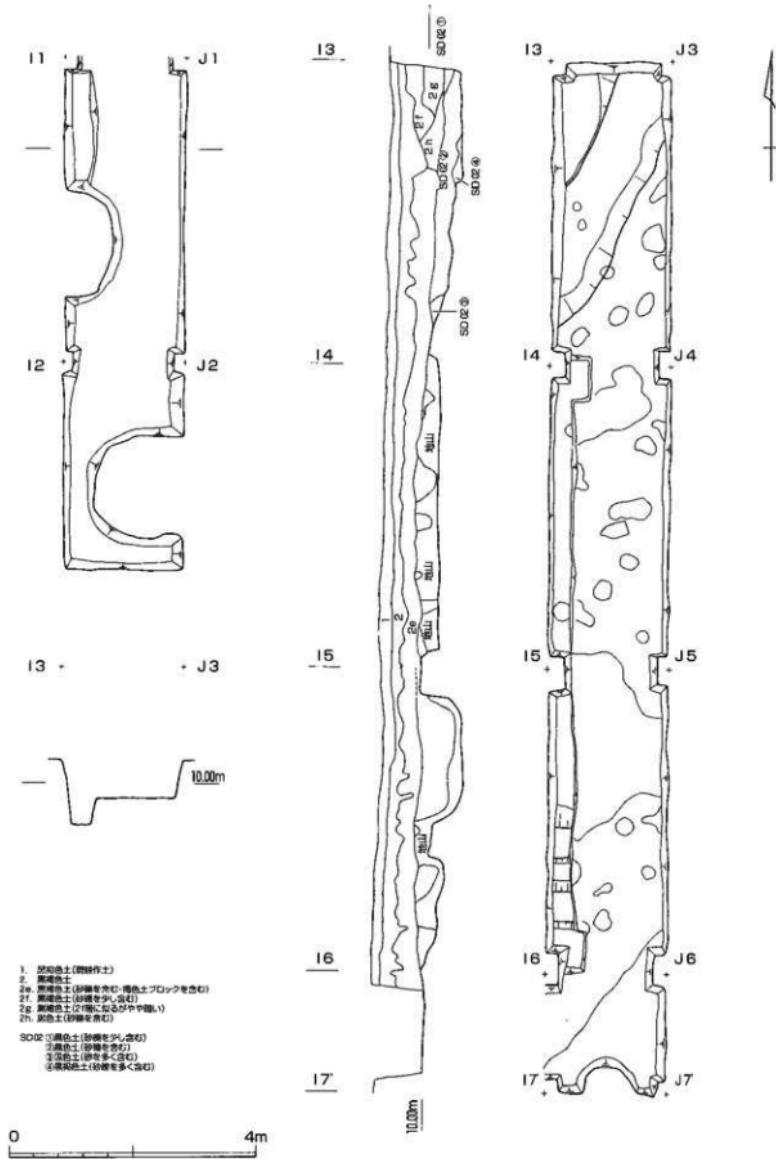


図 12 第4構造・土層図 (1:80)

(2) 平成 13 年度発掘調査

平成 13 年度（2001）は、平成 12 年度（2000）の調査だけでは墓域の把握という目的を達するだけの資料を得ることができなかつたため、引き続いて発掘調査を実施した。平成 12 年度（2000）と同様に国庫・県費補助を受けて平成 13 年（2001）10 月 15 日から平成 13 年（2001）12 月 14 日まで現地調査を行つた。

トレンチ設定にあたつては、平成 12 年度（2000）の調査で、前方後円墳である可能性が否定され、円墳の可能性が高まつたことから、墳丘の中心と考えられる場所より放射状に第 5 T～第 7 T の 3 つのトレンチを設定することとなつた。また、調査の途中で墳丘北側に位置する民家の蔵が取り壊されることとなり、地権者のご好意によりトレンチ（第 8 T）を設定して調査を実施することができた。墳丘北半における調査はこれが初めてである。

第 5 T は墳丘西側に墳丘中心推定部からほぼ放射状に設置した 2 m × 30 m の東西に長いトレンチである。墳端の確認及び墓域の確認を目的として設置した。当該地は梅林となつてゐるため、これを避けながらの調査となつたことから非常に変則的な形状となつたが、墳丘盛土の残存状況が確認でき、周塚と考えられる溝の検出や溝内からの大畠の円筒埴輪の出土などが認められた。

第 6 T は墳丘南側に設置した 2 m × 20 m の南北に長いトレンチである。第 3 T に直交しているが、平成 12 年度の調査では中世遺構面までの検出であったため、第 6 トレンチでは地山面まで検出を行なつてゐる。他のトレンチの調査が進んだ結果、最外周は設定したよりも更に南側に存在すると推定されたが、トレンチ南側の畠においては作物が植えられていたために調査をすることができなかつた。

第 7 T は墳丘東側に設置したトレンチである。トレンチの西端は現存する墳丘の程近いところに位置し、墳丘盛土が比較的の残存している可能性があつたため、墳丘盛土・墳端及び墓域の確認を目的とした。トレンチの規模は 2 m × 25 m である。

第 8 T は墳丘の北側に設置したトレンチである。墳丘北側は民家の庭で大きく改変されており、墳丘の残存は期待できないものの、周塚及び墳端部の検出を目的として設置した。しかし、この場所は地権者宅の蔵があつたいた場所であることから、その際の擾乱が非常に深くまで及んでいたため遺構の残存状況は良くなかった。

T	測点	X	Y
第 5 T	A 1	-- 72291.472	54240.847
	A 7	- 72289.576	54269.789
	B 1	- 72293.464	54240.974
第 6 T	B 7	- 72291.570	54269.911
	A 1	- 72302.201	54224.996
	A 5	- 72321.707	54229.423
	B 1	- 72302.647	54223.049
第 7 T	B 5	- 72322.148	54227.493

T	測点	X	Y
第 7 T	A 1	- 72294.960	54205.874
	A 6	- 72303.862	54182.509
	B 1	- 72296.825	54206.580
第 8 T	B 6	- 72305.724	54183.219
	A 1	- 72274.938	54235.330
	A 3	- 72265.152	54237.396
	B 1	- 72274.524	54233.376
第 9 T	B 3	- 72264.739	54235.439

表 2 平成 13 年度発掘調査主要基準杭座標一覧表

第5トレーナー

土層堆積状況

腐葉土及び表土（1・2層）の下層には黒色土（5～7層）が堆積しており、このほとんどには円筒埴輪片及び須恵器片とともに中世土師器の出土がみられ、中世以降の堆積土であると考えられる。遺構埋土である8～10層は暗灰黄色が基調となる土層であり、出土遺物からみて中世期と考えられる。また、11～15層は黒褐色土であるが、この層からは円筒埴輪片が大量に出土するうえ中世土師器の出土がみられないため、築山古墳築造（古墳時代後期）以降、中世に入るまでの堆積土と考えられる。なお、16・17層は黒色のかたくしまった層であり遺物が全く出土しない。現在確認できる墳丘にかかることからも、築山古墳の墳丘盛土である可能性がある。

検出遺構の概要

古墳関連遺構

2ライン付近から徐々に地山面が下がっていき、遺構肩から2.5～3.0mの地点で傾斜がほぼ平らとなり、底に至る。この平らな面は5ライン付近まで続く。そこから徐々に上がっていき、幅約15mの大きな溝状遺構を呈している。底に堆積している層は中世の搅乱が認められないことから、築山古墳の周壕と考えられる。底の最深レベルは9.6mである。この溝は、地山の最高レベルが墳丘側の10.4mであることから、当時の地山面から0.8m以上掘り込まれていると考えられる。

また、1～2grにおける平坦面は土層堆積状況から中世以降に削平されたと考えられるが、この平坦面に直径30cm、深さ10cmのピットを検出した。このピットの規模や墳端近くに位置することを考えると円筒埴輪の抜き取り痕の可能性も考えられる。

なお、3grでは古墳に関連すると考えられる幅約2mの浅い溝状遺構を検出しているが、湧水が激しく平面図を作成することができなかった。

その他の遺構

SD01は1grで検出した幅0.95mの溝状の落ち込みである。これは中世以降の堆積土と考えられる6層を切っており、築山古墳築造に関連するものではなく、後世のものと考えられる。なお、第2T及び第6TのSD03でも類似遺構が確認されており、現在の墳丘をめぐっていると考えられる。性格としては部分的に袋状となっていることからみて水の流れによる浸食がうかがえ、何らかの排水溝の機能を果たしていたものかもしれない。

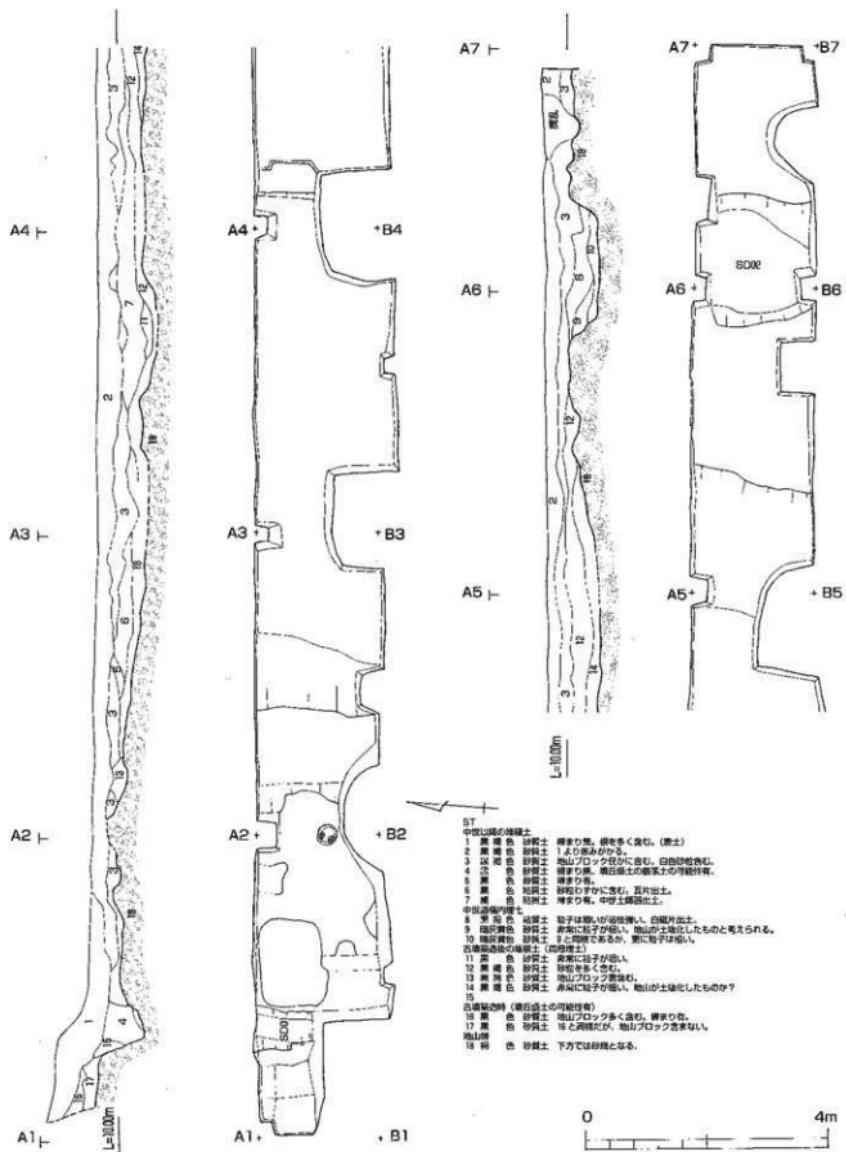
また、5～6grではSD02を検出した。この遺構もトレーナーに直交しており幅2.2mを測る。遺構内から白磁・中世土師器が出土しており、中世期以降の遺構と考えられる。

遺物出土状況

2～4grで埴輪・須恵器が集中的に出土した。これら埴輪及び須恵器がまとまって出土する層は12層・16層である。

2grの大溝が底に至る部分では埴輪片がまとまって出土している。これらを復元すると完形とはならないものの、かなりの部分で復元可能であった。（34-1）3grではまばらにではあるが12層中に埴輪片の出土がみられている。また、4grの16層からは須恵器片がまとまって出土した。これらは4T北端から出土した須恵器片溜まりと接合し、これを復元すると須恵器の大甕であった。（33-1）なお、3gr付近の溝状遺構から多くの埴輪が認められた。

これらの埴輪溜まり・須恵器溜まりはほぼ地山面直上で出土しているため、大溝が構築されてまもなく、この場に移動してきたものと考えられよう。しかし、これらは全て壊れて散逸している部分も



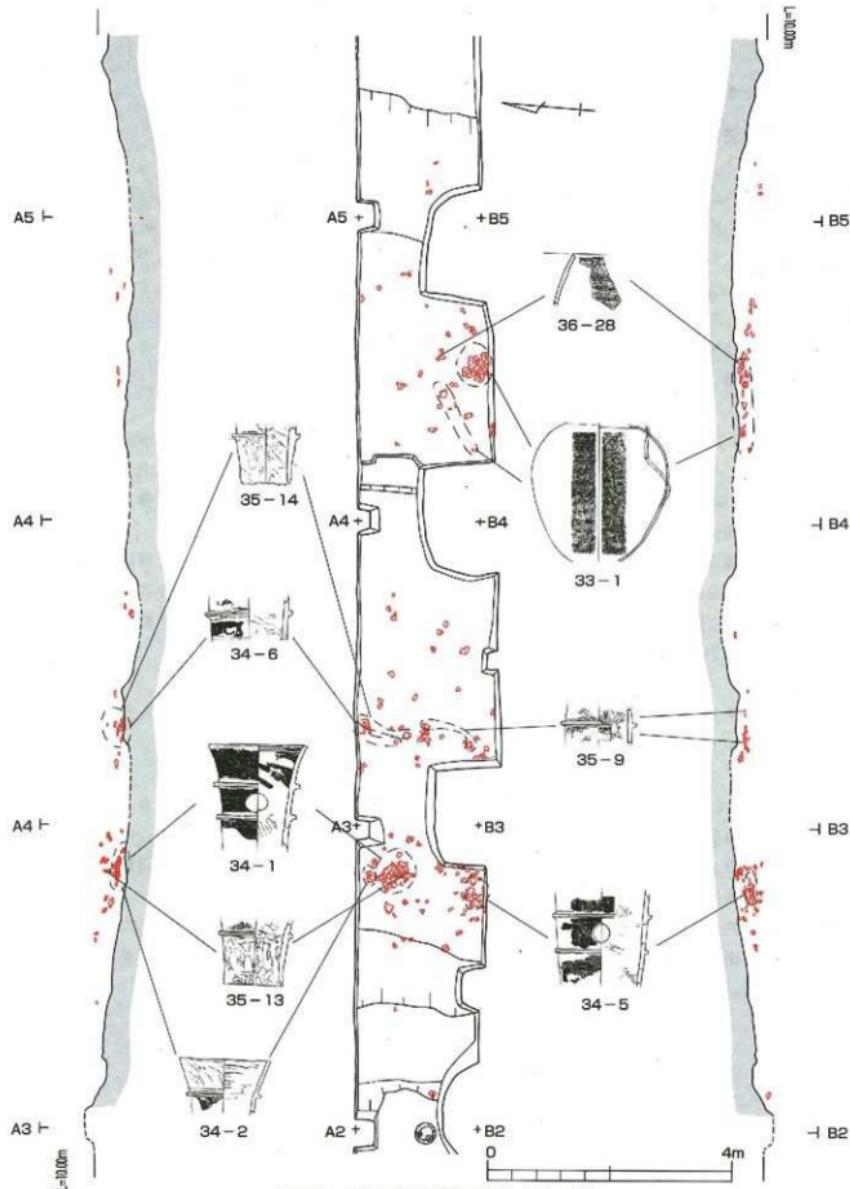


図 14 第5T遺物出土状況図 (1:80)

多く認められるため、その場所へ置いたなど意図的なことは感じられない。

第6トレンチ

土層堆積状況

1・2層は表土及び耕作土であり、この直下の4層に中世期の遺構面が存在する。4～6層の黒色土は出土遺物より中世期の堆積である。更に下の8～11層は同じ黒色土であるが、円筒埴輪片を多く含み中世土器の出土がみられないため中世よりも前の堆積土と考えられる。なお、7層は現存墳丘の間際まで堆積していることや遺物が全く含まれないことから墳丘盛土の可能性はあるが、トレンチ北端に性格不明の溝状遺構（SD 04）が存在し、第5TのSD 01と類似することから考えて、墳丘盛土ではない可能性もある。なお、地山面の最高高は9.8mと他のトレンチよりも低くなっている。築山古墳周辺においては墳丘南側が最も低いようである。

検出遺構の概要

古墳関連遺構

第5T・第7Tと同様に築山古墳の周塚と考えられる大きな溝状遺構の内側半分を確認することができた。墳端と考えられるラインは3ラインの南側に認めることができる。周塚底の最低高は9.3～9.5mであり、第5Tよりも若干低くなっている。また、4grからは幅2.2mの溝状遺構を検出した。大溝との位置関係から第5Tのものと同様のものであることが考えられる。

墳丘側の周塚立ち上がり部分には部分的に幅70cm程のテラスが作られているが、これはトレンチ西半分のみで認められ、西に行くほど徐々に広がっているようである。なお、このテラス上に堆積する10層より完形の円筒埴輪が出土していることから考えても、当時の姿を残している可能性がある。このテラスは第2Tのものと一連の遺構と考えられる。

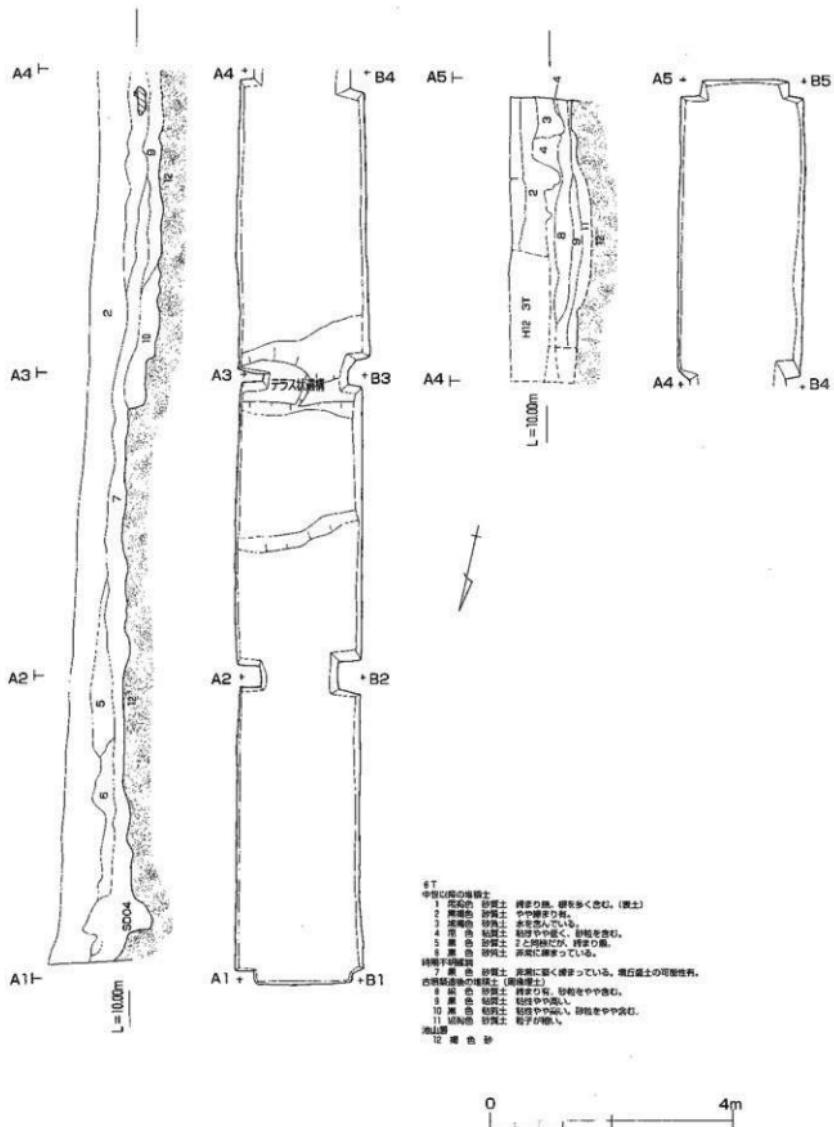
その他の遺構

第3トレンチで認められた礎石及びこれに対応すると考えられる礎石を検出した。ただし、それ以外の遺構については認められなかった。

遺物出土状況

3grから4grを通じて多くの埴輪片が認められた。第5及び第6Tのように埴輪溜まりと言えるような出土の状況は認められないが、あえてまとまりを指摘するならば、3gr中ほどと4grの溝状遺構からである。なお、これらは全て8～11層中からの出土であり、その上面の中世以降の遺構面以上には埴輪など上塙治築山古墳に伴うと考えられる遺物はあまり認められない。

また、特筆すべきは10層中より完形の円筒埴輪が出土していることである。層序よりこの層は埴輪片が集中して出土する層よりも古く、この埴輪は古墳築造後、早い段階で現在の位置に移動したものと考えられる。



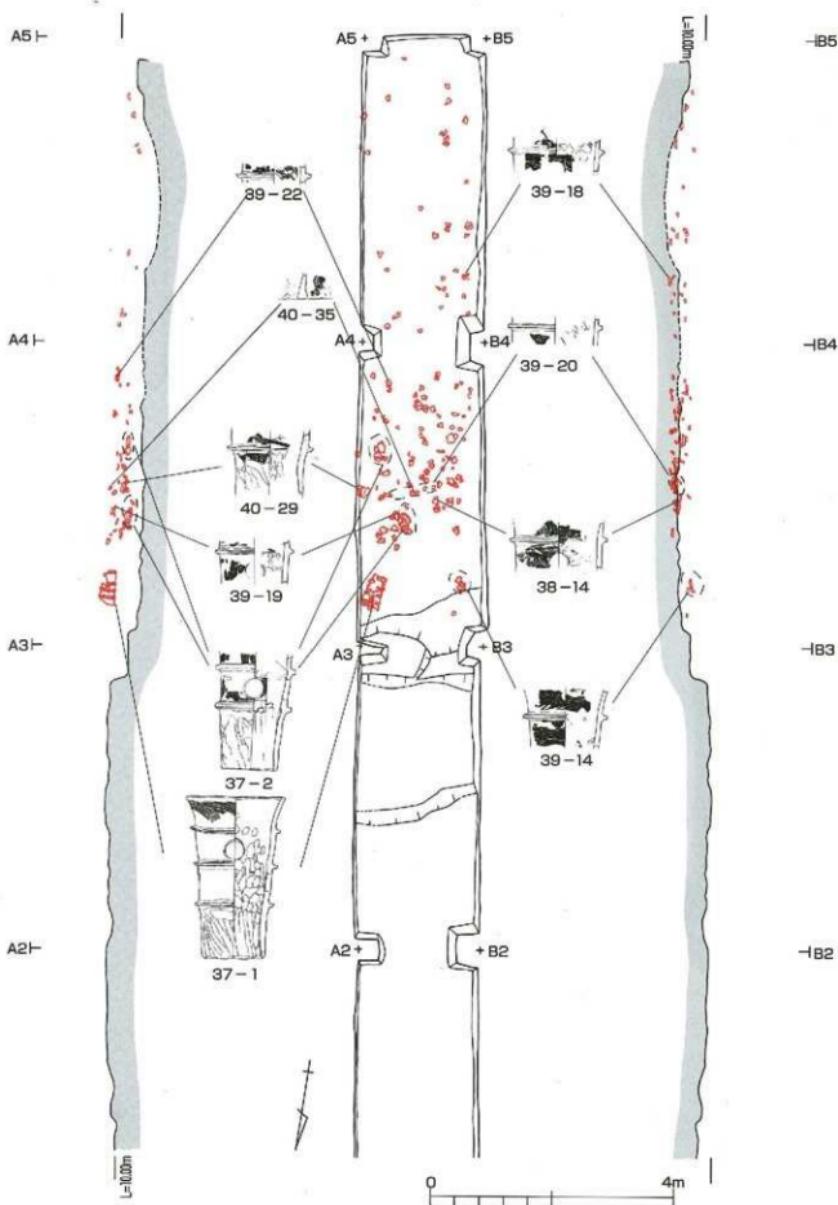


図 16 第6T遺物出土状況図 (1:80)

第7トレンチ

土層堆積状況

1grでは地山面が標高10.2m程度で残存しており、2ライン付近から徐々にレベルが下がっていっている。1層は表土、2～10層の黒褐色土は出土遺物より中世期のものと考えられる。10層は溝状遺構の埋土であるが、古墳時代後期から中世よりも前の層と考えられる。19層を切ることから中世のものと考えられよう。11～17層は中世期の溝状遺構の埋土であり、2～10層と同様のものである。

20層は黒色のしまりがある土層であり、墳丘の周辺でのみ確認できる。地山面の直上に堆積しており遺物も含まれていないことから、墳丘盛土が残存している可能性が考えられる。

5層からは中世土師器の出土がみられており、2～10層が中世以降の堆積土と考えられる。それ以下の18層・19層は円筒埴輪片及び須恵器片が多く出土し、築山古墳に伴うと考えられる遺物ばかりが出上するため、古墳築造時（古墳時代後期）から中世よりも前の堆積土であると考えられる。

検出遺構の概要

古墳関連遺構

墳端と考えられるラインは2grの東端で検出された。これは残存墳丘よりも5m以上離れており、この場所においても墳丘は大きく破壊されていることがうかがえる。周壕の最外周のほとんどは中世以降の遺構に破壊されているが4gr西端でわずかに確認することができ、墳端ラインから14.5m離れている。ただし、8・9層が崩落土である可能性もあり、後世による攪乱もしくは自然の崩壊により周壕最外周の原位置はもう少し墳丘よりであったかもしれない。周壕の底レベルは第9.5mであり、第6Tよりも若干高くなっている。

なお、第2・5・6Tで認められた周壕中ほどの溝状遺構については明確に検出できなかった。

その他の遺構

周壕内に中世以降の大きな遺構（SX 01）が存在しており、周壕の西端が切られていた。これは東西5.1mにもなる遺構であり、湧水が認められたため井戸の掘り方である可能性があったが、調査の目的外であったため発掘しなかった。また、周壕よりも西側には南北に伸びると考えられる溝状遺構（SD 03）の西半分を検出した。この遺構内よりは中世土師器が多く出土している。

遺物出土状況

2ライン付近に埴輪・須恵器溜まりを検出することができた。これらは復元すると完形にこそならないが、3分の2ほどの高さが残るもののが4個体以上（44～23～26）出土しており、比較的残存状況の良いまま現在の位置に移動したものと考えられる。しかし、多くは残っていないことや破片となっていることからも、意図的に置いたものとは考えられない。また、埴輪溜まり以外の埴輪・須恵器は中世土師器が混じる層よりの出土であり、中世期の大規模な造成工事によって埋められたことがうかがえる。

SD 03 からは多くの中世土師器が出土したが、出土状況にまとまりはなく散布しているような状況である。

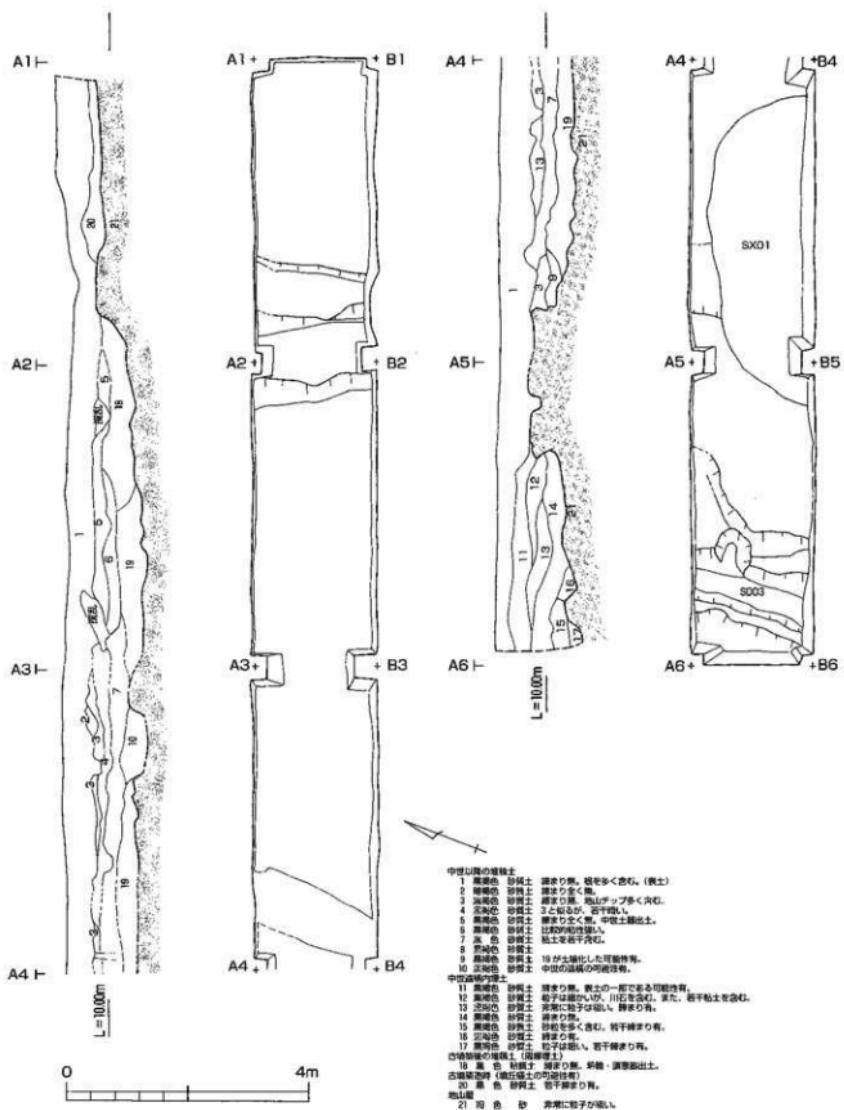


図 17 第7T遺構・土層図 (1:80)

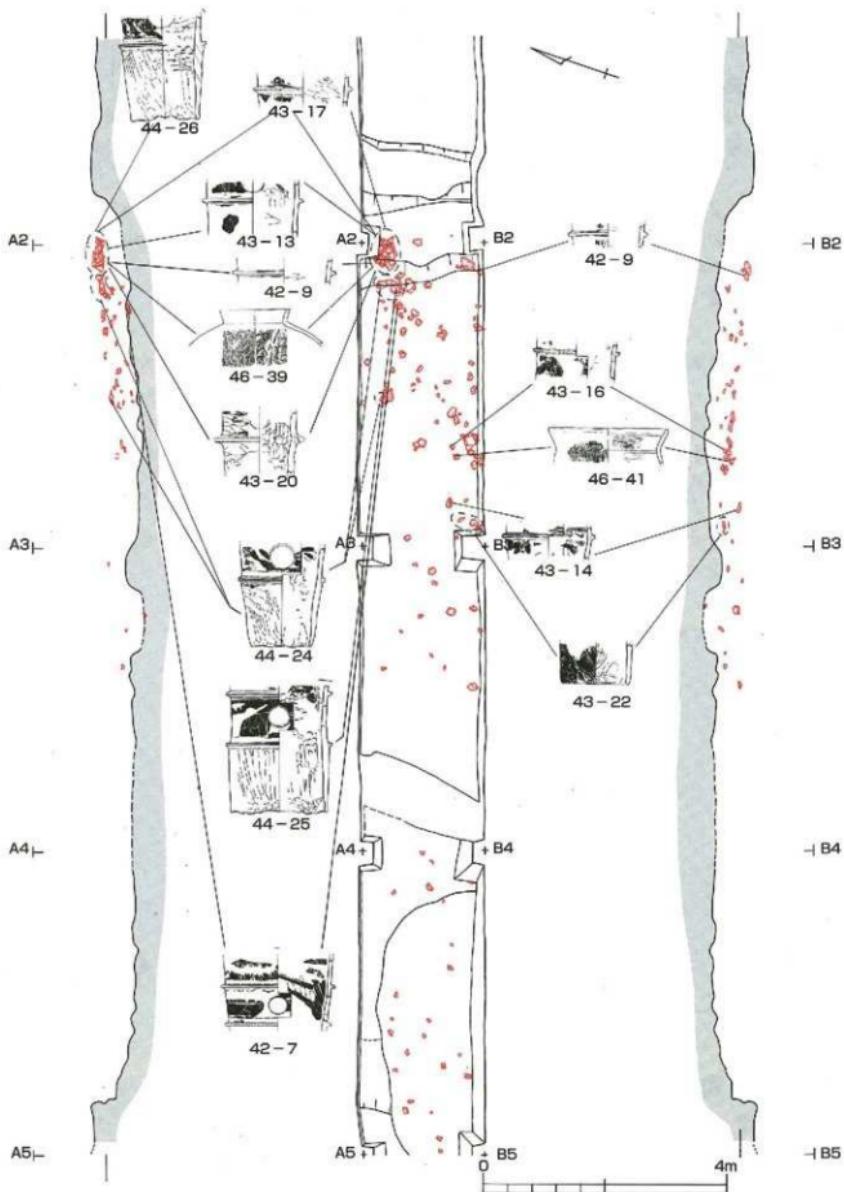


図 18 第7T遺物出土状況図 (1:80)

第8トレンチ

土層堆積狀況

トレンチ内のほとんどが蔵によって擾乱を受けていた。特に南半分については蔵建設時に深掘りをしたものと考えられ、かなり深くまで擾乱が及んでいたため、北側の地山面を検出した時点で調査を終了した。

しかし、1・2層からは円筒埴輪片・須恵器片の出土がみられ、包含層が残存しているものと考えられる。また、地山面は墳丘に近いほうが0.5mほど高くなってしまっており、トレンチ北側は築山古墳築造時に掘削され、この時期には地山レベルが下がっていたことがうかがえる。

検出遺構の概要

古墳閣連遺稿

トレンチの北側半分で周壕の底と考えられる部分を検出した。しかし、周壕の肩又は墻端と推定できる場所については、搅乱により既に失われており検出できなかった。ただし、地山面がトレンチ南側では 10.1 m、周壕の底と考えられる場所では 9.5 m と 0.5 ~ 0.6 m ほど高低差があり、この範囲で墻端が存在していると推定できる。また、周壕最外周はトレンチの更に北側に存在すると推定されるが、この場所には民家があるために調査は不可能であり、現在では知るすべはない。

その他の遺構

搅乱により他のトレンチで認められた中世期の遺構を確認することはできなかった。蔵建設時の搅乱によりその全てが破壊されたものと考えられる。

遺物出土狀況

円筒埴輪片及び須恵器片が出土したが、全て包含層遺物である。

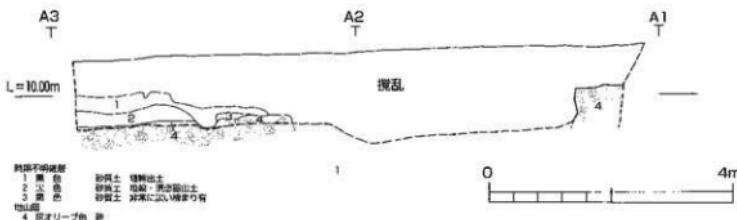


図 19 第8T土層図 (1:80)

第2節 出土遺物

(1) 平成12年度出土遺物

第1トレンチ

SD 03 からは、古墳に関連すると思われる円筒埴輪、須恵器子持壺、須恵器壺が出土しており、これらを図20~23に示した。

円筒埴輪(図20)

1~3は円筒埴輪であり、1・2はほぼ完形に復元できた。1は3段のタガを有する器高54cmのものである。口縁部は内外面ナナメハケ後に端部直下を強く指ナデする。2段の胴部には外面ナナメハケ後、二次調整のヨコハケが認められる。また、それぞれ2孔1対の円形スカシが施されているが、穿

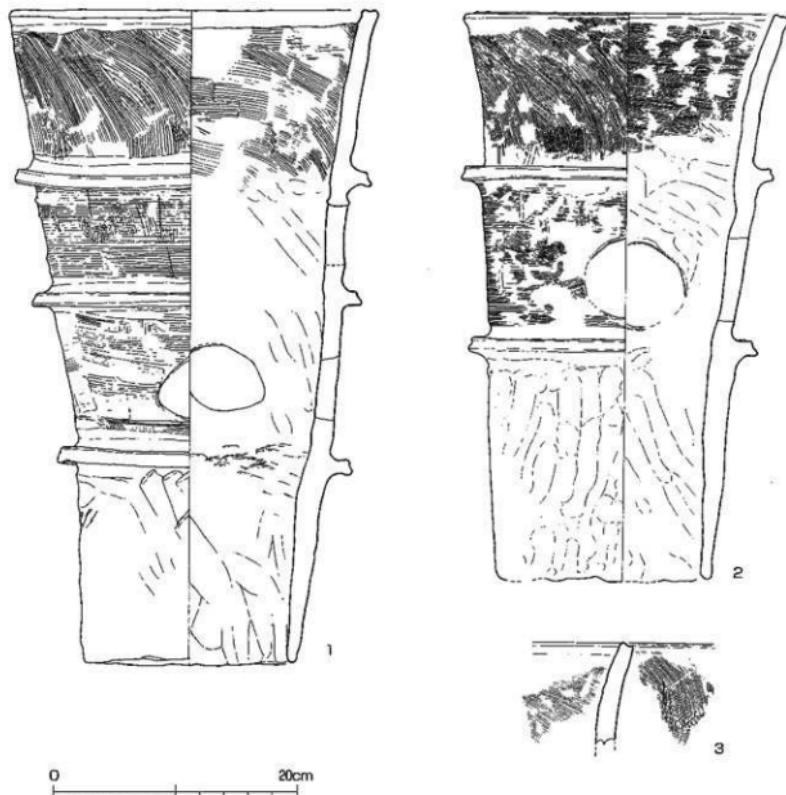


図20 第1TSD 03 出土遺物①(埴輪)(1:4)

孔方向は互いに 90° 振っている。基底部は円柱状工具によるタタキ後にナデ調整が施されている。2 は2段タガを有し器高47cmを測る。口縁部は内外面ハケ調整後、端部直下を強く指ナデする。胴部にはタガ取り付け後の二次調整ヨコハケが認められる。また、2孔1対の円形スカシが穿たれる。基底部は円柱状工具によるタタキ後ナデ調整が施される。3 は口縁部片であるが1・2に接合しないため、別個体であることが明らかである。内外面ナメハケで、口縁端部はナデの圧力により窪んでいる。

須恵器 (図 21・22)

4 は須恵器の子持壺である。親壺は頸部が「く」字状に屈曲し、やや外反して開口する口縁部で、胴部は丸く膨らむ。胴部上半の破片であるが、調整は内外面ともナデ調整である。反転復元の結果、法量の推定値は口径 24cm、胴部最大径 22cm、高さ 17cm である。なお、親壺と脚部は突帯によって区切られると思われる。子壺は親壺の肩部に斜め上方に 8 個付く。口縁部は比較的長く、やや外反して

開口し、口径は 8.2cm を測る。体部は陵によってその膨らみが表現されており、底はなく、作成時に脚状に形成された端部を親壺に強く撫でつけて接合されている。よって、子壺から底を覗くと親壺の器面が観察できる状況である。なお、子壺の調整も内外面ナデである。脚部は高さは推定で

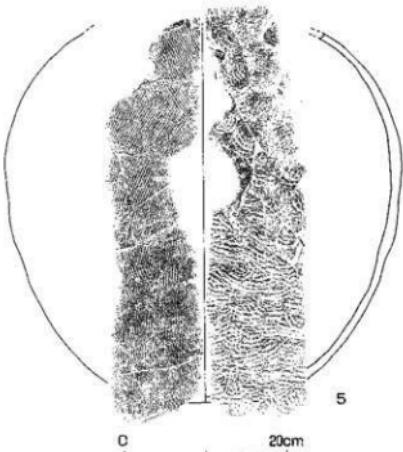
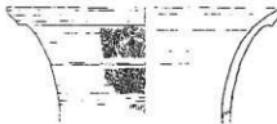
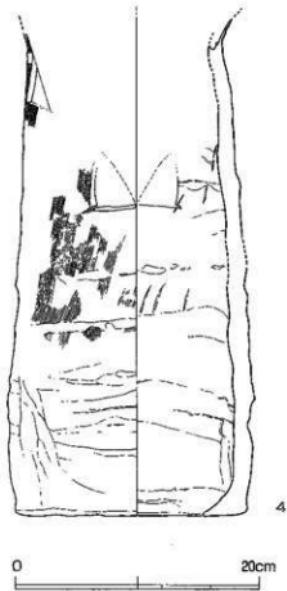
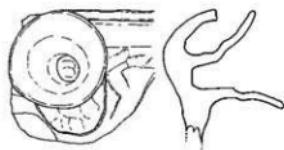


図 21 第1T SD03出土遺物②(須恵器)(1:4)　図 22 第1T SD03出土遺物③(須恵器)(1:6)

43cmを測り筒状を呈す。下半部に最大径を有し19cmを測る。上半部にはその痕跡から、4方の三角形スカシが2段施されていたと推測される。また、上段と下段のスカシでは、互いに45°振っているようである。脚端部は内側に裾が延び、幅3.5cm程度の面をつくっていることから、自立が可能である。調整については、上半部の外面がタタキ後ハケ、内面が横ナデを施しているようである。また、下半部の内外面は強く横ナデされている。しかし、粘土紐の接合部位が容易に観察でき、全体的に粗い調整となっている。なお、この子持壺の全体の器高は推定で60cmである。

5は須恵器の壺である。口縁部は口径34cmで、外反して開口し外面に段を有する。頸部は比較的長く、外面は粗い継ハケ後に横ナデを施すが、一部はハケ目が消えるほど強くナデており沈線状を呈している。胴部は上半に最大径を有する。外面はタタキ、内面は同心円状の当て具痕が顕著に残る。全体の器高は推定66cmで、6世紀末から7世紀初頭のものと考えられる。

土師器(図23)

SD 01からは小さな土器片が量にしてビニール袋半袋分出土しているが、大半は中世土師器である。これらのうち実測可能なものを6に示した。口縁部を欠くが体部から底部にかけては残存している。底部外面には回転糸切り痕が残り、体部の器壁は僅かに内湾して立ち上がる。13世紀頃の所産で造構の時期を示すと思われる。



図23 第1T SD01出土遺物
(土師器)(1:3)

第2トレーナー

第2Tからはコンテナ1箱分の土器片が出上している。これらは円筒埴輪、須恵器子持壺、中世土師などであるが、円筒埴輪の破片が大半を占めている。これら出土遺物のうち、実測に堪えるものを図24~25に示した。

円筒埴輪(図24)

1~13には円筒埴輪を示した。1~5は口縁部の破片である。いずれも外反して開口し、調整は内面横ハケ、外面斜めハケである。1の口径は推定で29cmである。6~7も口縁部であるが、端部で直立し開口する。两者とも端部直下の外面を指で強く横ナデしている。この結果、後者は端面がやや深んでいる。

8~9は胴部片である。両者ともタガを有し、円形スカシの痕跡が認められる。後者は外面に継ハケ後二次調整横ハケが認められる。

10~13は基底部片である。いずれも基底端部の断面は先細りを呈する。10~11は基底端部径がそれぞれ推定で17cmと18cmである。また、11~13の内外面の調整は、円柱状工具でタタキ後ナデであるが、10は指オサエ後ナデのようである。

須恵器(図25)

14はE3grの11層で破片がまとまって出土した須恵器の子持壺である。親壺は頸部が「く」字状に屈曲し、やや外反して開口する口縁部で胴部が膨らむ。胴部下半には現存する破片には2箇所円形スカシが認められ、4方または6方に施されていると思われる。調整については、口縁部の内外面が横ナデ、胴部の外面が粗いハケ後横ハケ、内面が強い指オサエである。反転復元の結果、親壺の法量の推定値は口径10.5cm、胴部最大径11.2cm、高さ20.6cmである。子壺は親壺の肩部に斜め上方向きに6個から8個付くと推定される。口縁部は比較的長く、やや外反して開口し口径は残存破片の実測値で7.3

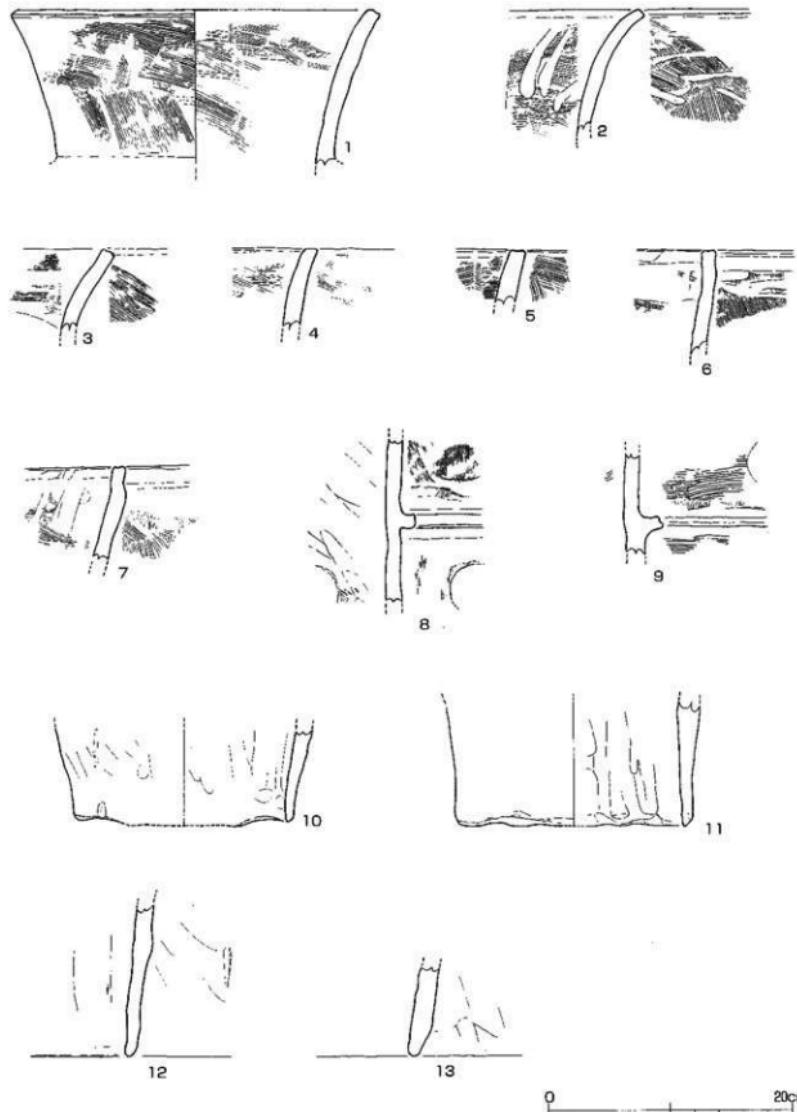


図 24 第2T出土遺物①(埴輪) (1:4)

cm または 7.0cm である。体部は穂によってその膨らみが表現されており、底ではなく、製作時に脚状に形成された端部を親壺に強く撫でつけて取り付けられている。子壺の底は親壺器面にうまくなじませたものもあれば、器面が観察できるものもあり、仕上げに差が認められる。なお、子壺の調整は内外面横ナデである。

親壺と脚部は薄く引き出された突帯によって区切られている。

脚部は高さ 41cm を有すると推定され、最大径 20.6cm を測る筒状を呈している。突帯下に頂角以外が丸みを帯びた三角形スカシが 6 方に施されていたようである。脚端部は裾を内側に広げ、幅 1.8cm の面をつくっていることから、白立が可能であると考えられる。調整については、外面が強い横ナデ後横ハケ、内面が強い横ナデ後斜めハケであるが、脚端部付近では内外面ともハケ調整は省略しているようである。脚部は全体的に粘土紙の接合単位が容易に観察でき、丁寧な調整とは言えない。なお、この子持壺の全體の器高は推定で 63cm である。

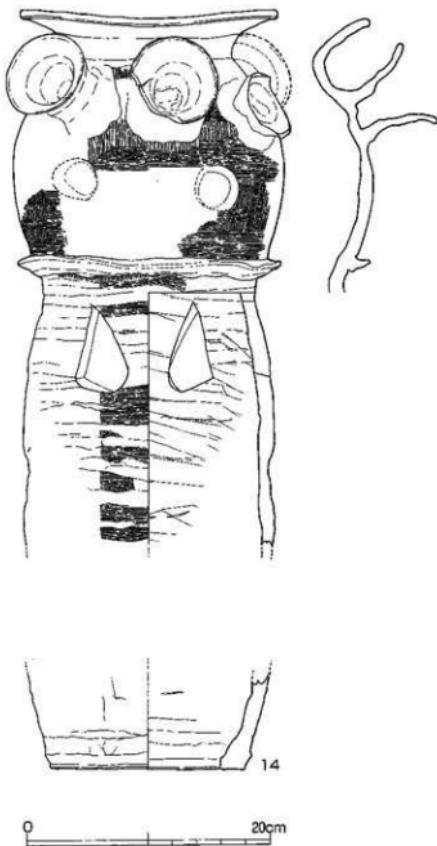


図 25 第 2 T 出土遺物②（須恵器）(1:4)

第 3 トレンチ

第 3 T からはコンテナ 6 箱分の土器片が出土している。これらは円筒埴輪片、須恵器子持壺、須恵器甕、中世土師器などであるが、円筒埴輪の破片が大半を占めている。これら出土遺物をある程度選別して以下のとおり図示した。

円筒埴輪（図26～29図）

1～8は口縁部片である。1は口縁部から基底部まで接合したもので、2段タガを有し器高43.5cmを測る。口縁部は内外面ハケ調整後、端部直下に横ナデを施す。胴部は一次調整の斜めハケ調整は観察できるが、タガ取り付け後の二次調整横ハケは認められない。また、2孔1対の円形スカシが施される。基底部は円柱状原体によるタタキ後ナデで調整されている。2～8は口縁部片である。2～4は僅かに外反するものであり、5～7は反らすに外傾して開口するものである。8は端部で直立している。口縁部片は端部直下を横ナデし端面が窪み、内外面ともハケ調整が多い。

9～28は胴部片である。9～12は3段のタガを有すると考えられるもので、いずれも2孔1対の円形スカシを2段千鳥で施すと思われる。13～23は円形スカシとタガが残存する破片を取り上げた。これらのうち、外面に二次調整横ハケが認められるのは13・15・19・23であり、その他は一次調整の縱ハケまたは斜めハケが二次調整を受けずに残っている。

29～36は基底部片である。いずれも端部の器壁が薄くなることから倒立再調整が施されたと考えられる。29～35の主な調整としては円柱状工具を用いて内面オサエ、外面タタキ後、端部付近内外面指オサエと想定されるが、36はその後さらに内外面ハケ調整が施されているようである。



図26 第3T出土遺物①（埴輪）(1:4)

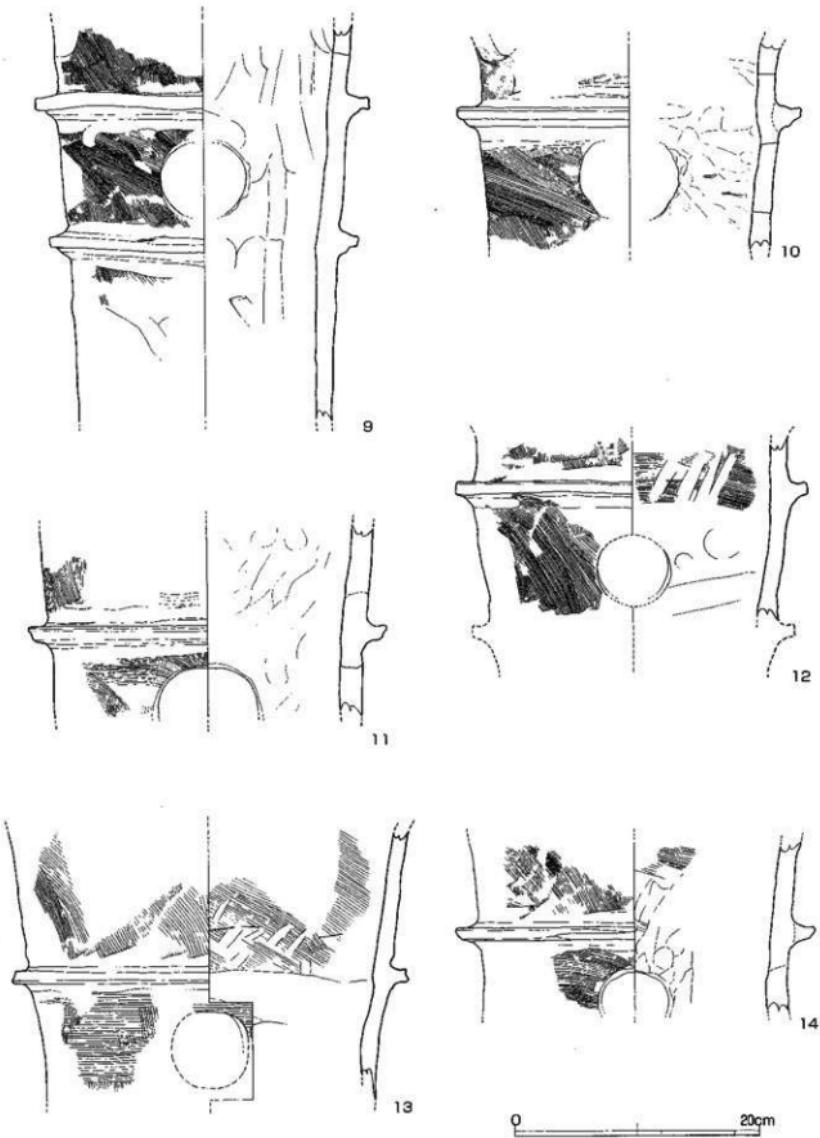
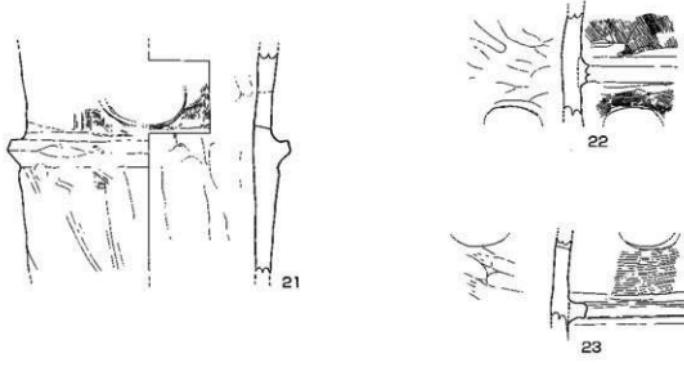
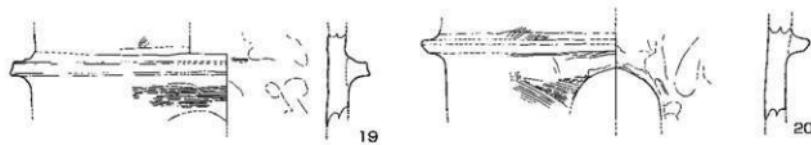
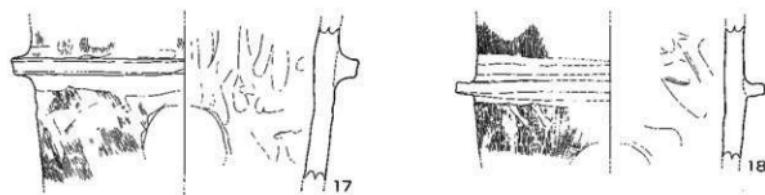
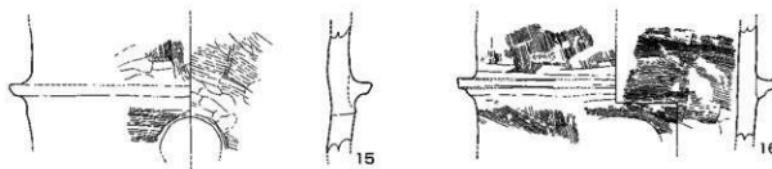


図 27 第3T出土遺物②(埴輪) (1:4)



0 20cm

図28 第3T出土遺物③(埴輪) (1:4)

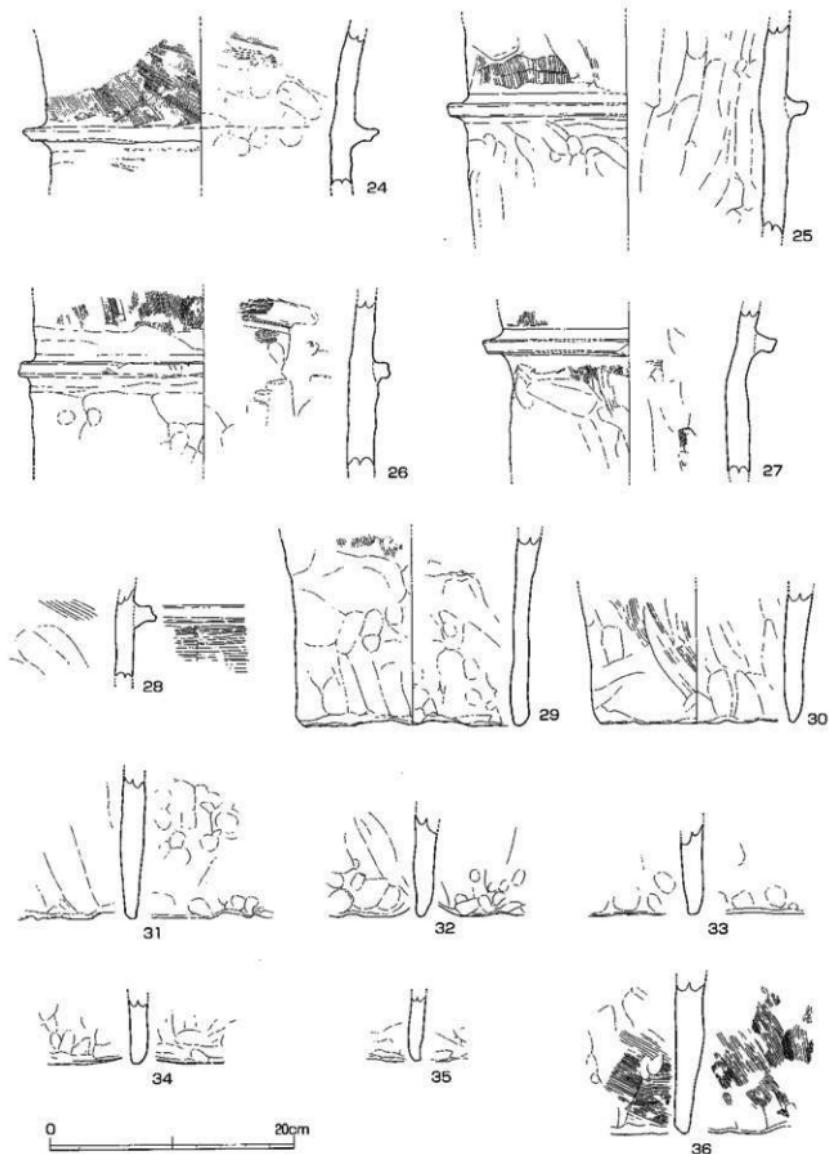


図29 第3T出土遺物④(埴輪)(1:4)

須恵器 (図30)

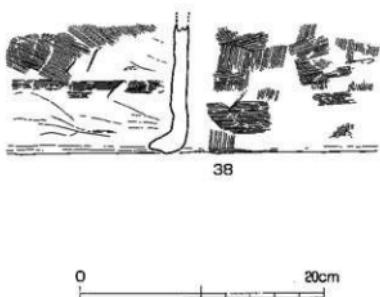
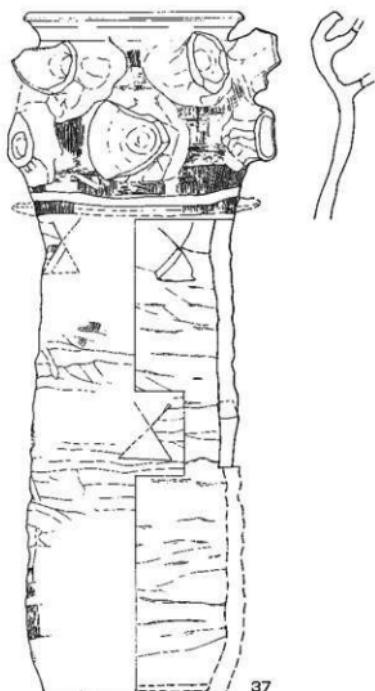


図30 第3T出土遺物⑤(須恵器)(1:4)

37はその破片がG 2 grに集中していた須恵器の子持壺を示した。親壺は短く外反して開口する口縁部で、端部を外側に若干引き出している。内外面とも横ナデで調整されている。胴部は中程で最も膨らみ、調整は外面タタキ後一部横ナデ、内面指オサエである。反転復元の結果では、親壺の法量推定値は口径17.0、胴部最大径19.4cm、高さ16.4cmとなる。

子壺は親壺の残存部分に8個認められる。これらは親壺肩部と胴部に2段千鳥ではば等間隔で付けられていることから、各段5個、計10個付いていたと考えてほぼ間違いない。取り付け方向は上段のものが斜め上方、下段のものが横方向を指向する。L1縁部は比較的長く端部を短く外反させて開口している。体部は緩い稜によってその膨らみが表現されている。また、底ではなく、製作時に脚状に形成された端部を親壺に強く撫でつけて貼り付けられたと考えられる。いずれも、十分な量の粘土が用いられたためか、子壺の底部に親壺の器面が覗くことはない。

親壺と脚部を区切る突帯は残存していないが、これを強く撫でつけ貼り付けた痕跡が残るため、本来あったものが剥離したと考えられる。

脚部は高さ39.8cmを測る。下半部で若干膨らみ推定最大径18.0cmとなるが、概ね筒状を呈する。また、上部と中央に三角形スカシをそれぞれ4方施すが、千鳥に配していずれも頂角より延長する切り込みで削り抜いている。脚端部は器壁を内側に肥厚させ、端部に幅1.7cm程度の面をつくっていることから、自立が可能と考えられる。調整については、粘土紐を調染させる強い横ナデ後、中程を除く上方と下方は外面タタキが施されていると考えられる。脚部は全体的に粘土紐の接合単位が容易に観察できる

雜なつくりとなっている。なお、この子持壺全体の器高は56.2cmを測る。

38は子持壺の脚部である。端部の器壁を内側に引き出し、幅2.0cm程度の面をつくり自立可能であったと考えられる。調整については内外面タタキ後ナデが施されている。なお、この脚部は30…37とは別個体である。

土師器（図31）

第3Tからは中世土師器も多く出土している。これらのうち実測に堪えるものを以下に示した。

39～49には杯を示した。底部をやや絞り、器壁は体部で内湾し口縁部付近で僅かに外反して開口するものが多いようである。調整については、いずれも口縁部と体部の内外面で回転ナデ、底部の内面が回転ナデ、底部外面が回転糸切りである。さらに、44と49には底面にスノコ状圧痕が認められる。また、43には底部の中心に焼成前に穿孔が施されており実用品ではない。

50～63には皿を示した。50は比較的口径が広く、51・52はやや器高が高い。53～61は小皿であり、底部を絞り器壁が内湾気味に立ち上がり開口するものが多いようである。62・63は高台皿であり、いずれも柱状高台が付く。これらの皿の調整はいずれも内外面回転ナデで、底面には回転糸切り痕を残している。

以上に示した中世土師器は、12世紀から13世紀頃にかけての所産と思われる。

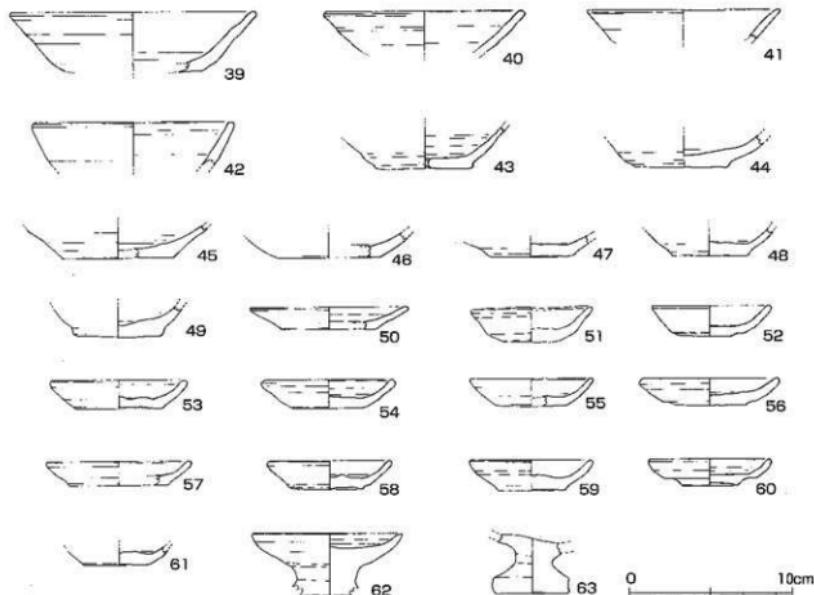


図31 第3T出土遺物⑥（土師器）(1:3)

第4トレンチ

第4Tからはコンテナ半箱分の遺物が出土している。これらは円筒埴輪片、須恵器片、中世土師器片であるが、円筒埴輪片が大半を占めている。須恵器片や中世土師器片は少量かつ小片であり、実測に堪えないため、円筒埴輪片のみを以下に示した。

円筒埴輪（図32）

1・2は比較的大きな破片であり、円形スカシと2段のタガが認められる。破片の上部が残存しないため、3段タガか2段タガかは判然としない。3～8は口縁部片である。いずれも外傾して開口し端部に窪みを有する。調整については内外面斜めハケ後端部を強く横ナデするものが多い。9は胴部片であり1段のタガと円形スカシが認められる。10・11は基底部の端部片である。断面先細りを呈するものが多い中、前者は端部に面を有しており他と異なる。

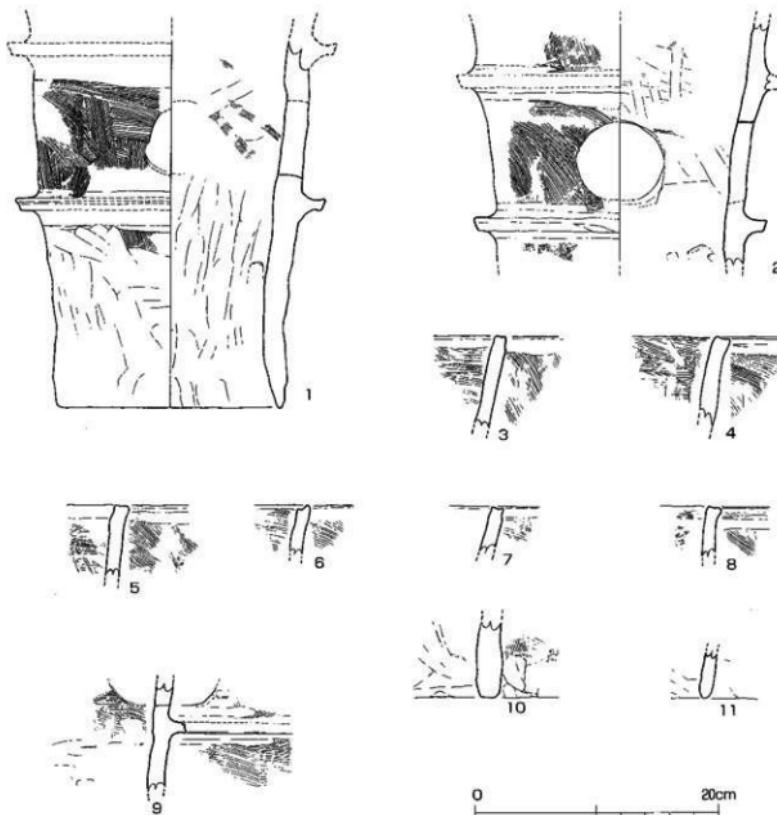


図32 第4T出土遺物（埴輪）(1:4)

(2) 平成 13 年度出土遺物

第4 トレンチ・第5 トレンチ

須恵器 (図 33)

1は第4T北端及び第5Tより出土した須恵器溜まりの破片を復元して胴部最大径45cmを測る大甕となったものである。一部が大きく歪んでおり焼成時点での歪みと考えられる。口縁部については認められていない。外面は直線文タタキ痕、内面は同心円文タタキ当具痕が残存している。

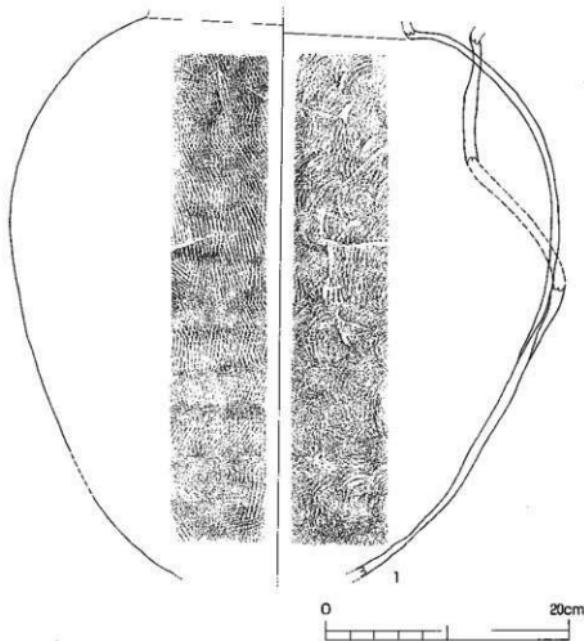


図 33 第4・5 T出土遺物 (1:4)

第5 トレンチ出土遺物

円筒埴輪 (図 34・35)

1は口縁部～下段胴部までが残存している。口縁部外面は縦及び斜めハケ目が施されるが、上段胴部及び下段胴部とも横ハケ目で2次調整されている。口縁端部及びタガは強いナデで凹みを持つ。

2は口縁部～上段胴部までが残存しているものである。口縁部は直線的に伸びるが、口縁端部の強いナデは認められない。内面は板状工具によるナデであり、板の痕跡がはっきりと確認できる。また、胴部外面ははっきりとした斜めハケ目調整である。

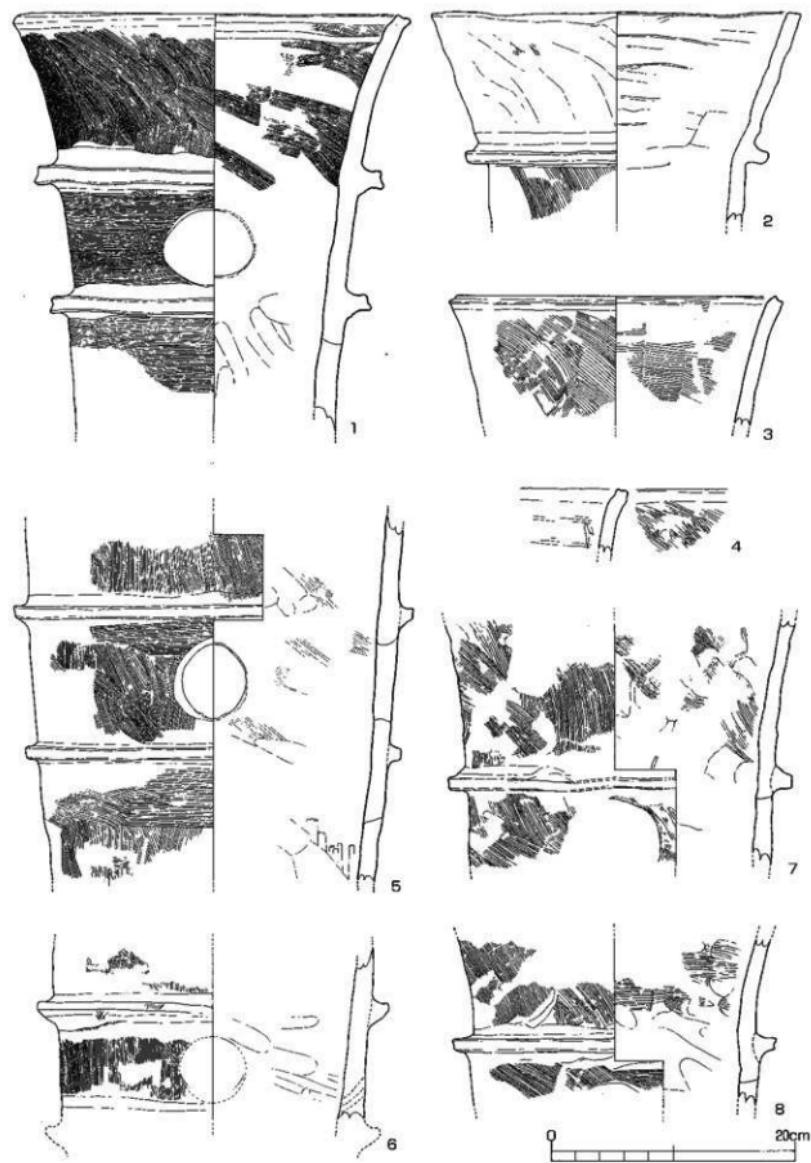


図34 第5T出土遺物①(埴輪)(1:4)

3・4は口縁部である。4は破片であるが口縁端部が一度屈曲することが特徴的である。端部の内外面は強いナデが施されており、凹みが残されている。3は逆「ハ」の字に直線的に伸び、端部で若干屈曲する。内外面ともハケ目による調整だが、内面の上部は板状工具のようなものでナデ消されている。

5～12は胴部である。5は3段と考えられる円筒埴輪である。胴部には2方向に円形の透孔が作られており、下段ではこれに直交して同じく2方向に設けられている。6はわずかに円形の透孔が残存していた。観察できたハケ目は全て縱方向であり、タガ取付部の様子からも第2次調整は施されてな

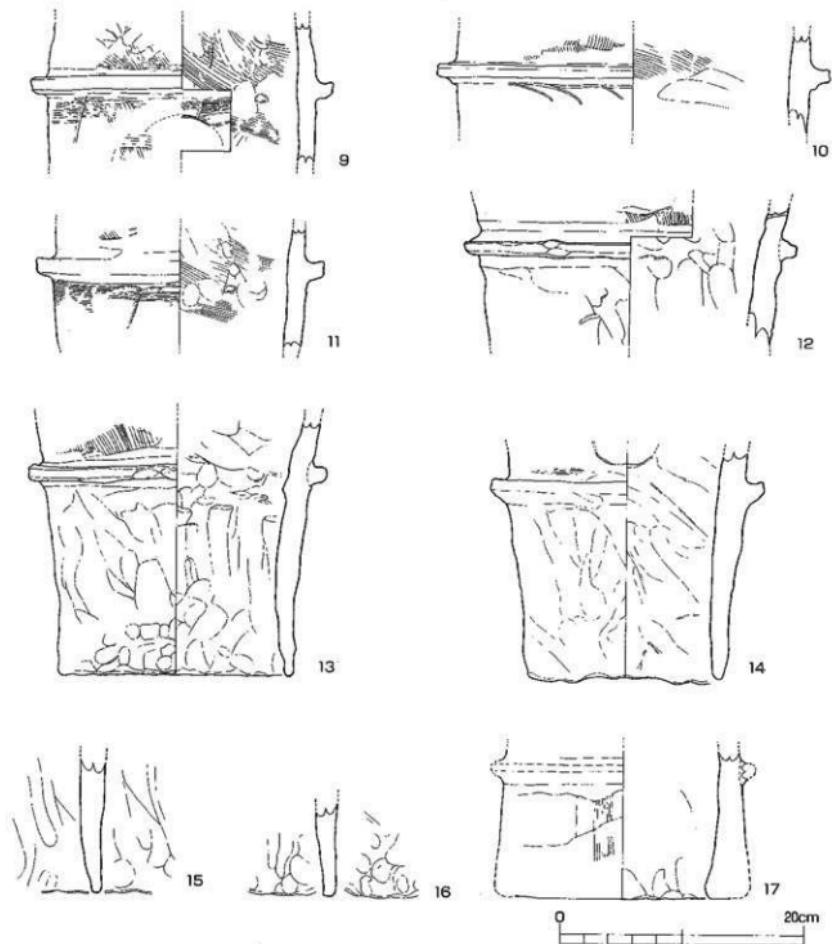


図35 第5T出土遺物②(埴輪)(1:4)

い。また、タガ部には斜め格子状の傷が認められるがハケ目原体ではないようである。7は上半部に透孔が認められないため口縁部と考えられ、口縁部から胴部が残存しているものである。胴部には円形と推定できる透孔が開けられている。全体が斜めハケ目で調整されるが、II縁部の方がより継ぎみである。8も7と同様な埴輪である。タガ部において一度内向してから逆「ハ」の字に聞くことが特徴的である。9の下胴部には透孔が認められた。全体的にハケ目調整であるがところどころはっきりとした指ナデにより消されている。なお、タガ付近には縦ハケ目（第1次調整）の痕跡が残っており、タガよりも下ではタガ貼付後に横ハケ目（第2次調整）を施しているようである。10の外面には下部タガを貼付けた後に板状工具で強くナデ付けた痕跡が認められる。11のタガよりも下では横ハケ目が施されており、タガ取付部に縦ハケ日の痕跡が認められることからも第2次調整が行われているようである。

13～16は基底部である。13の胴部には1次調整の縦ハケ目が認められた。基底部外表面は板状工具によるナデが認められ、基底から3cmの高さまではユビオサエにより整形されている。14は下段胴部に透孔が認められ、基底部の外表面は強い縱方向のナデによる整形の後、板状工具によるナデで平滑にならしている。また内面については板状工具によるナデを施しており、底端部はユビオサエによつて整形している。15・16は基底部の破片であるが、同様の調整が施されている。

形象埴輪（図35）

17は形象埴輪の基底部と考えられるものである。底部調整は認められず、1段目のタガが11cmの高さに貼り付けられている。円筒埴輪では基本的に15cm以上での高さで認められることから円筒埴輪であるとは考えにくく、形象埴輪の基部である可能性がある。

須恵器（図36）

23は大甕のII縁部である。II縁端部には刻目が認められ、沈線で区画された4段にヘラ描の波状文が施されている。

土師器（図36）

18は複合口縁の土師器であり、古墳時代初頭のものと考えられる。表土より出土しているため、流

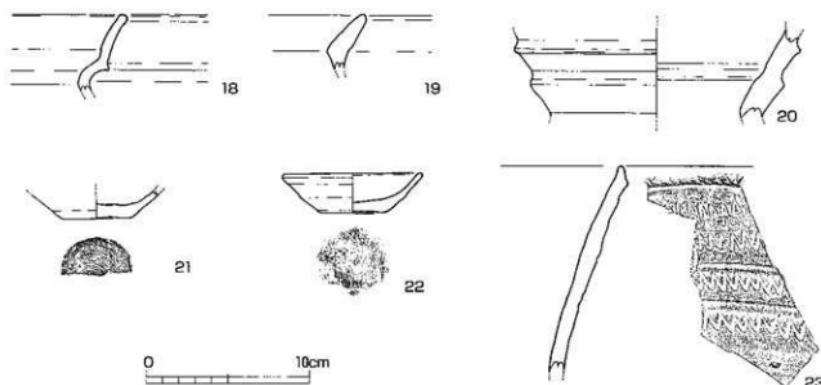


図36 第5T出土遺物③（須恵器・土師器）(1:3)

れ込みの遺物であろう。

19は土師器壺の口縁部である。古墳時代後期のものの可能性があるが、上塙治築山古墳に伴うものであるかどうかは不明である。

20は土師器の口縁部である。内外面とも朱塗りである。外面は3段になると考えられ、内面には1条の沈線が認められる。器形については他トレンチ出土のものから考えると壺になるものと考えられる。この遺物は中世の搅乱土からの出土であるが、第4T出土の同様のものが埴輪・古墳時代須恵器しか出土しない層から出土しており、上塙治築山古墳に伴うものである可能性がある。

21・22は土師器の皿である。15～16世紀頃のものと考えられる。

第6トレンチ

円筒埴輪（図37～40）

1はほぼ完形で出土した円筒埴輪である。3段の円筒埴輪であり高さ53cmを測る。各段には円形の透孔を2方向に設け、胴上部と胴下部ではほぼその方向は直交する。外面の調整は口縁部に斜め方向

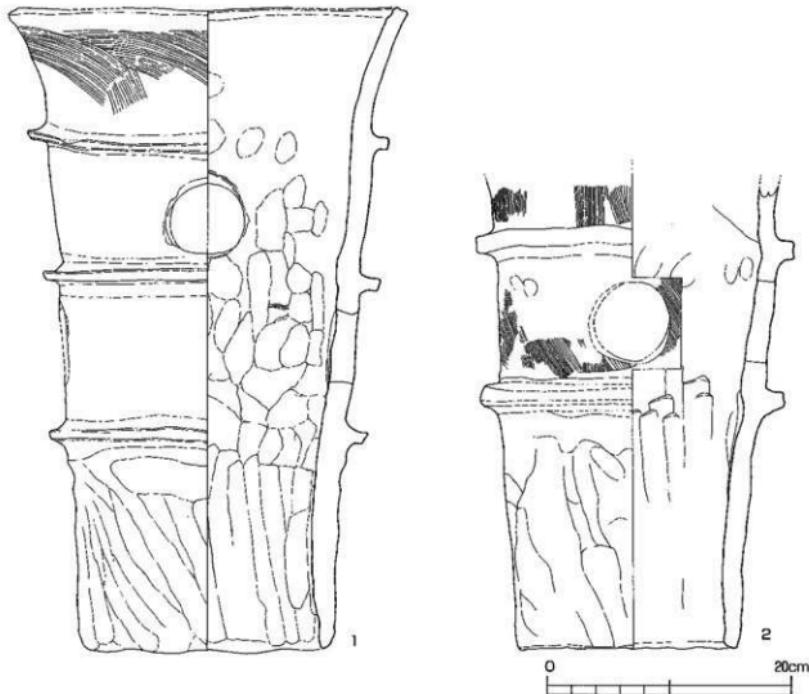


図37 第6T出土遺物①（埴輪）(1:4)

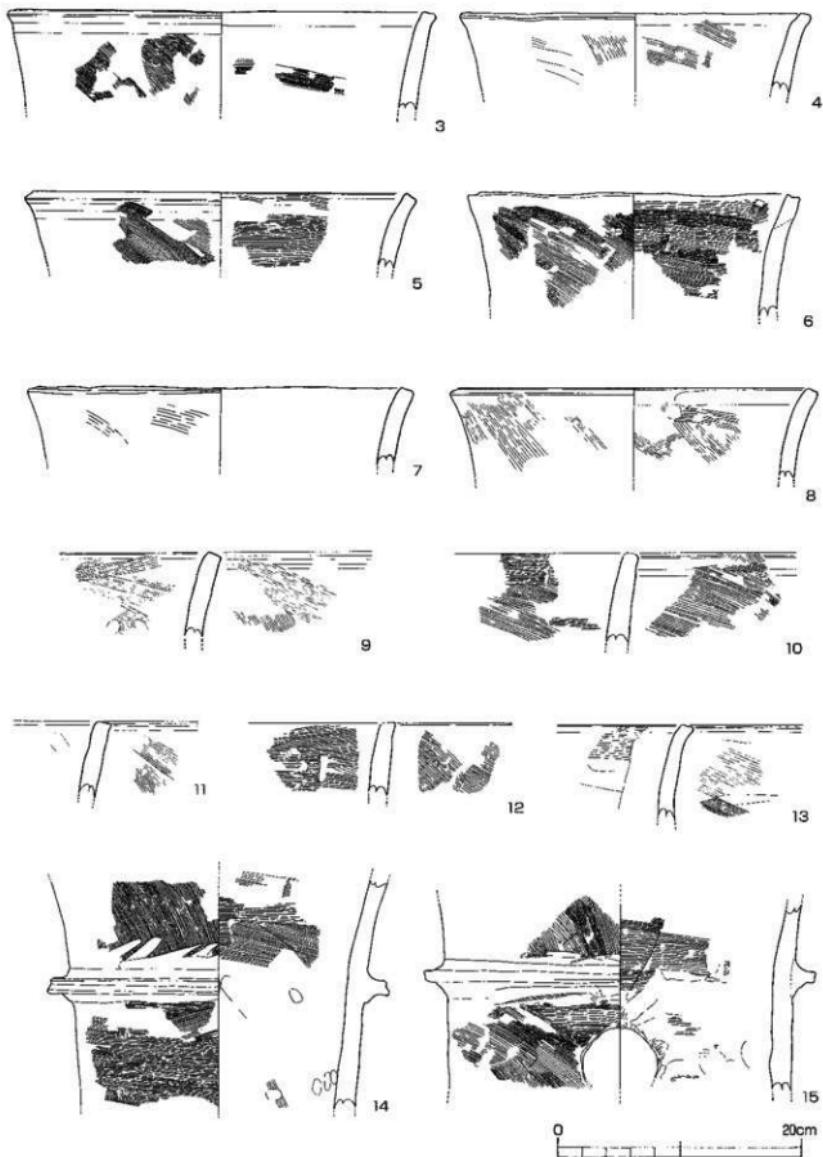


図38 第6T出土遺物②(埴輪)(1:4)

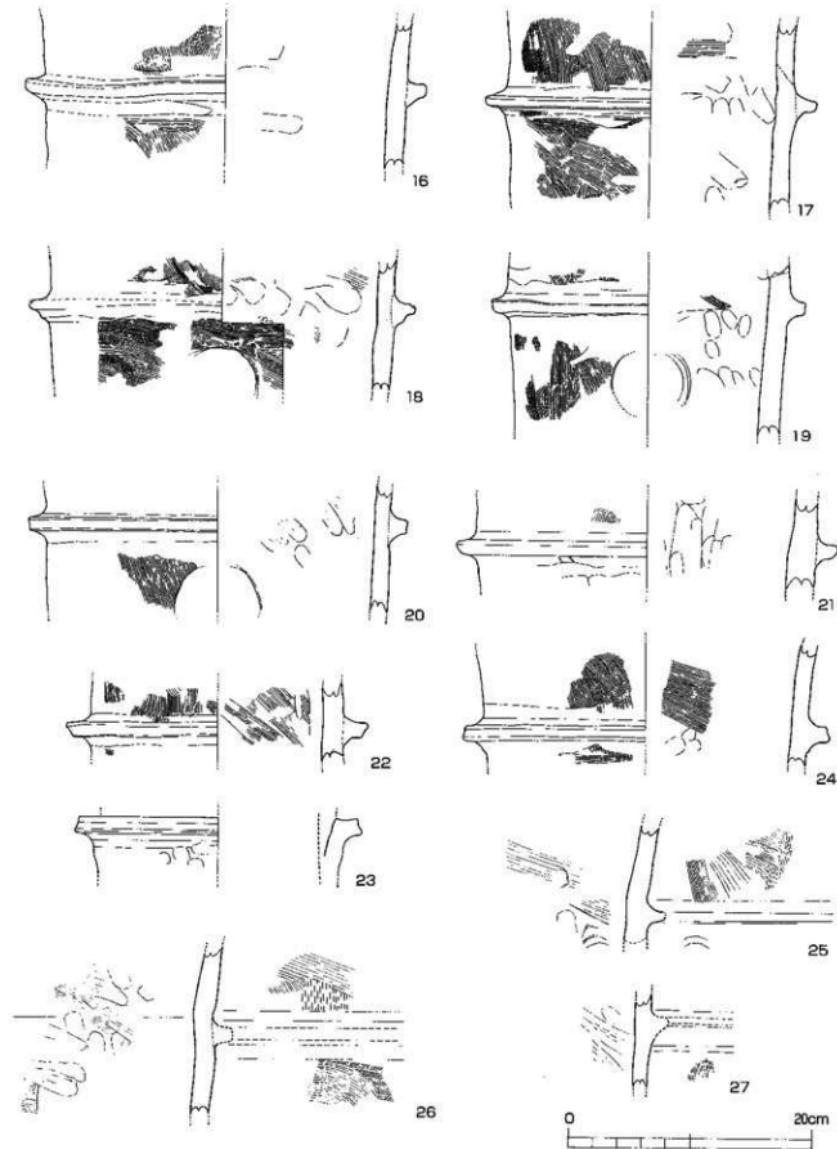


図39 第6T出土遺物③(唐輪)(1:4)

のハケ目を施すが、胴部では明確なハケ目ではなく板状工具でのナデに近い痕跡となっている。基底部は棒状工具でしっかりとしたナデを施している。内面については上半部までは調整の痕跡が確認できぬほど平滑に作っているが、下半部についてはユビオサエ、棒状工具による強いナデなど調整痕跡がしっかりと残っている。2は基底部から上段胴部（口縁部の可能性がある。）まで残存している円筒埴輪である。胴部には2方向に円形透孔が設けられておりタガは台形を呈している。胴部外面は縦ハケ目調整、基底部外面は棒状、内面はヘラ状工具によって強いナデ調整となっており、1と同様の特徴を持っている。なお、この基底部調整は築山古墳の円筒埴輪に普遍的に確認できる特徴である。

3～13は口縁部である。3は口縁端部を緩やかに外方へ引き出しており、内外面とも若干の棱を持っています。外面端部はハケ目がナデ消されていることから、ハケ目調整を行った後、口縁端部の最終調整を行っているようである。また、口唇部はナデによる凹みを持つ。4も同様に口縁端部で緩や

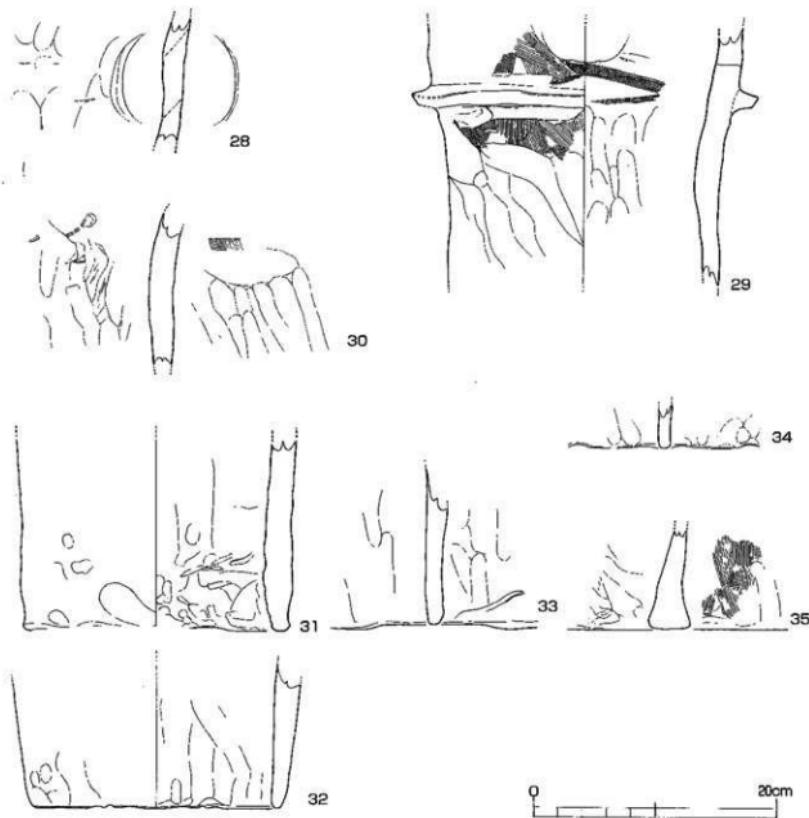


図40 第6T出土遺物④（埴輪）(1:4)

かに外方に引き出されるが、口唇部に凹みは見られない。5～7・9～12には口縁端部の引き出しはほとんど認められず、ハケ目調整も口縁端部まで残存しているものが多く、最終の調整を省略しているようである。8については軽く外方に引き出され、内面ハケ目調整は口縁端部でナデ消されるが、外面はハケ目が残存しており、3・4と5～7・9～12の中間の特徴を持つものである。

14・15は口縁部～体部である。14は口縁部に縦ハケ目（第1次調整）を残し、体部に横ハケ目（第2次調整）が施されている。タガ取付部よりも下の内面では横ハケ目がナデ消されている。15は内外面ともハケ目調整であるが、14と同様にタガ取付部よりも下の内面ではナデ消されている。外面は2次調整である。胴部には円形透孔が認められている。

16～28は体部である。17・18の外面は2次調整が認められ、縦ハケ・横ハケとともに存在する。19は2方向の円形透孔を上下段では直交して配置しており3段の円筒埴輪と考えられる。外面には2次調整が認められず、タガ取付時に縦ハケ目がナデ消されていることが顕著にみられる。22は2次調整で縦ハケ目が施されている。24はタガ取付部に縦ハケ目が確認でき、タガを貼り付けて後に横ハケ目（第2次調整）が施されている。

26は下段に横ハケ目が施されているが、2次調整であるかどうかはわからなかった。

29～34は基底部であり、内外面とも強いナデ痕が認められる。ただし、29・30については上部に縦ハケ目が残存している。底端部が残存しているものは全てU字型を呈している。

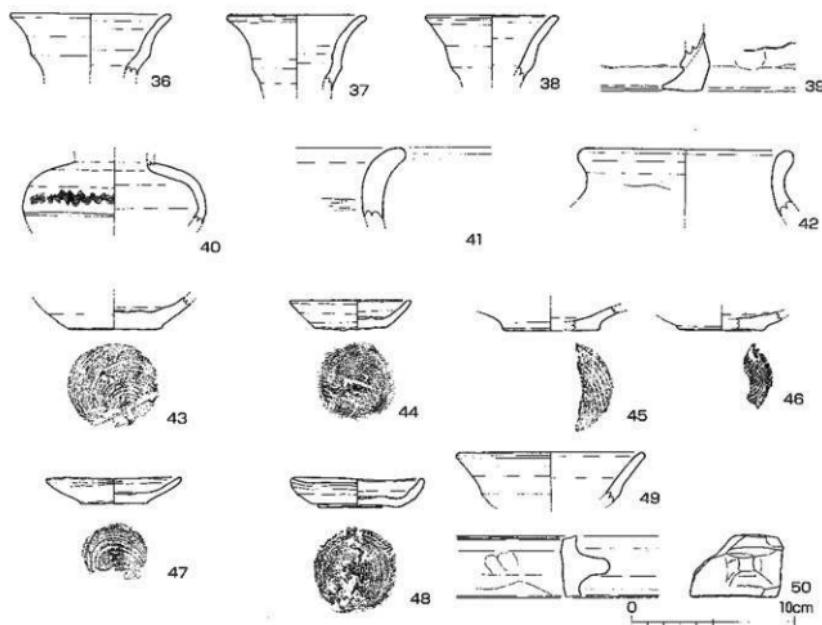


図 41 第6T出土遺物⑤（土師器・須恵器）(1:3)

形象埴輪（図40）

35は基底部であるが、どっしりと肥厚した底部を呈し、外面は縦ハケ目が残っている。形象埴輪の基底部の可能性があるものである。

須恵器（図41）

36～38は子持壺の子壺片である。いずれも一度屈曲して外反するタイプのものであり、腹を意識しているものと考えられるが、形は崩れてしまっている。特に38は屈曲部が非常に曖昧である。

39は子持壺の脚部と考えられるものである。外面は比較的垂直になるが、内面は自立させるように平坦面を形成するため端部が張り出している。底部調整は認められない。

40は腹もしくは小壺と考えられるものである。胴部に一条の沈線が見られ、その上方にはハケ目による波状文が施されている。出雲3期に比定されるものであろうか。

土師器（図41）

41・42は甕の口縁部である。双方とも破片であるが、口縁端部が丸みを帯びるタイプであるが、時期を限定することは難しい。

43～49は中世期の皿又は坏である。14～15世纪頃のものと考えられる。

50は用途不明品である。上下は欠損していないが、破片のため器形の全体像及び上下左右は不明である。ツマミ状に突出部が認められる。

第7トレーナー

円筒埴輪（図42～45）

1～6は口縁部である。2・4は口縁端部で屈曲し外反するタイプのものであり、器面は2の内面が風化によりはっきりとはしないものの、内外面とも横または斜めハケ目によって調整されている。これ以外は口縁端部で屈曲しないタイプである。いずれも器面は内外面とも横及び斜めハケで調整され、口唇部は2・4ほど明瞭なへこみを持たない。1は内面にはツメまたはヘラで押されたと考えられる圧痕が認められる。6の内面はハケ目後ケズリを施しており、その痕跡をナデ消そうとする意図が認められる。また口唇部外面に面取りをすることが特徴的である。

7～18は胴部である。7・13・14は胴張りになるタイプのものと考えられる。いずれも外面は縦ハケ目を基調とする調整であり、2次調整は認められない。また、7・14の内面が斜めハケ目調整であるが、13の内面はハケ目がほとんどなくユビオサエ痕が多く認められることから、基底部である可能性もある。その他は直線的に伸びるタイプのものである。15の外面調整は縦ハケ目が認められるが、内面調整に棒状または角材状工具痕が認められるため、13と同様に基底部である可能性も残されている。16は円形の透孔が確認される。17は2次調整に縦ハケ目が認められる。18はわずかに円形の透孔を認めることができる。

19～21・23～26は胴部及び基底部である。いずれも円形透孔を持ち、外面は縦ハケ目調整で2次調整は認められない。19はタガの端部を強くナデてへこみを持たせるタイプのものであり、上下は貼り付ける際の強いナデ痕が残されている。胴部は縦ハケ目調整（1次調整）基底部は棒状工具による縦方向の強いナデ付けもしくはタタキ痕が確認される。20・21も同様に円形の透孔が認められるが、20は体部にまで棒状工具痕が認められることが特徴的である。24の基底部外面には通常の棒状工具痕が認められるものの、上方の一部に縦ハケ目が残存しており、ハケ目の状況からは1次調整が残存したものと考えられる。25は基底部がすばまらずに直立してどっしりとした印象を受けるものであ

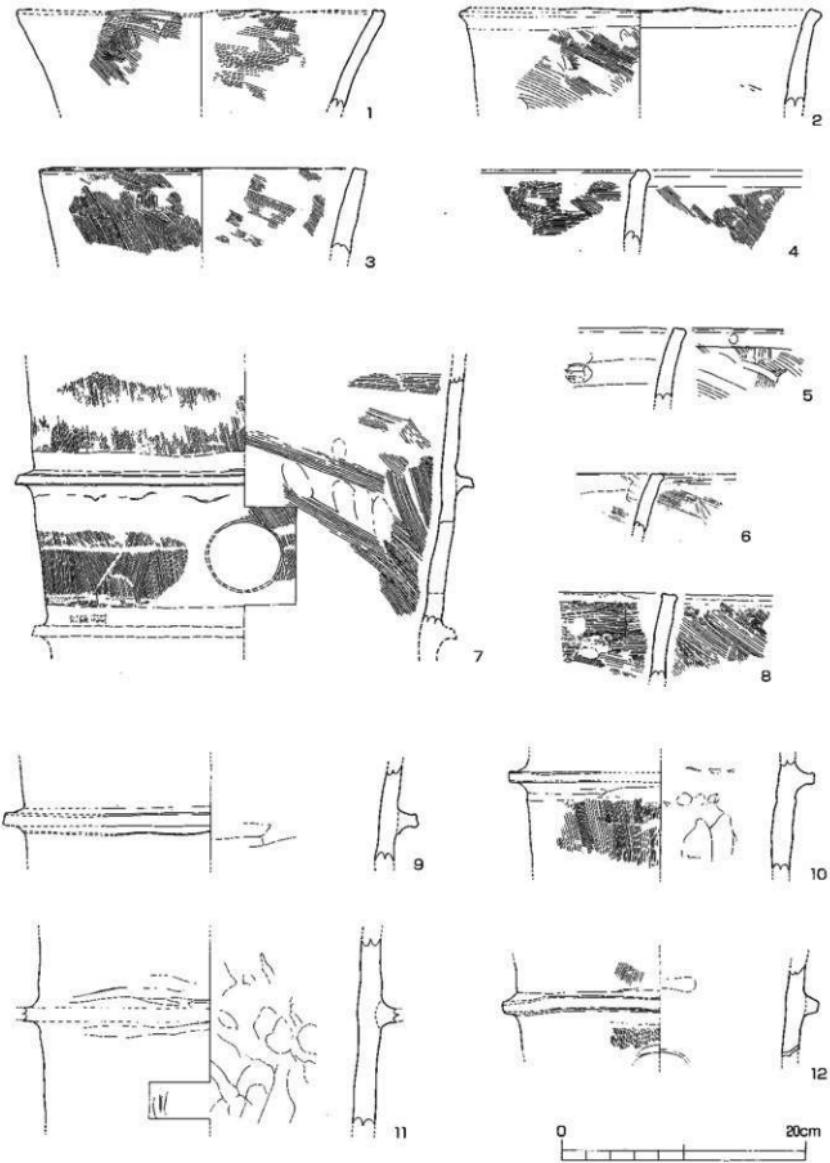


図42 第7T出土遺物①(埴輪)(1:4)

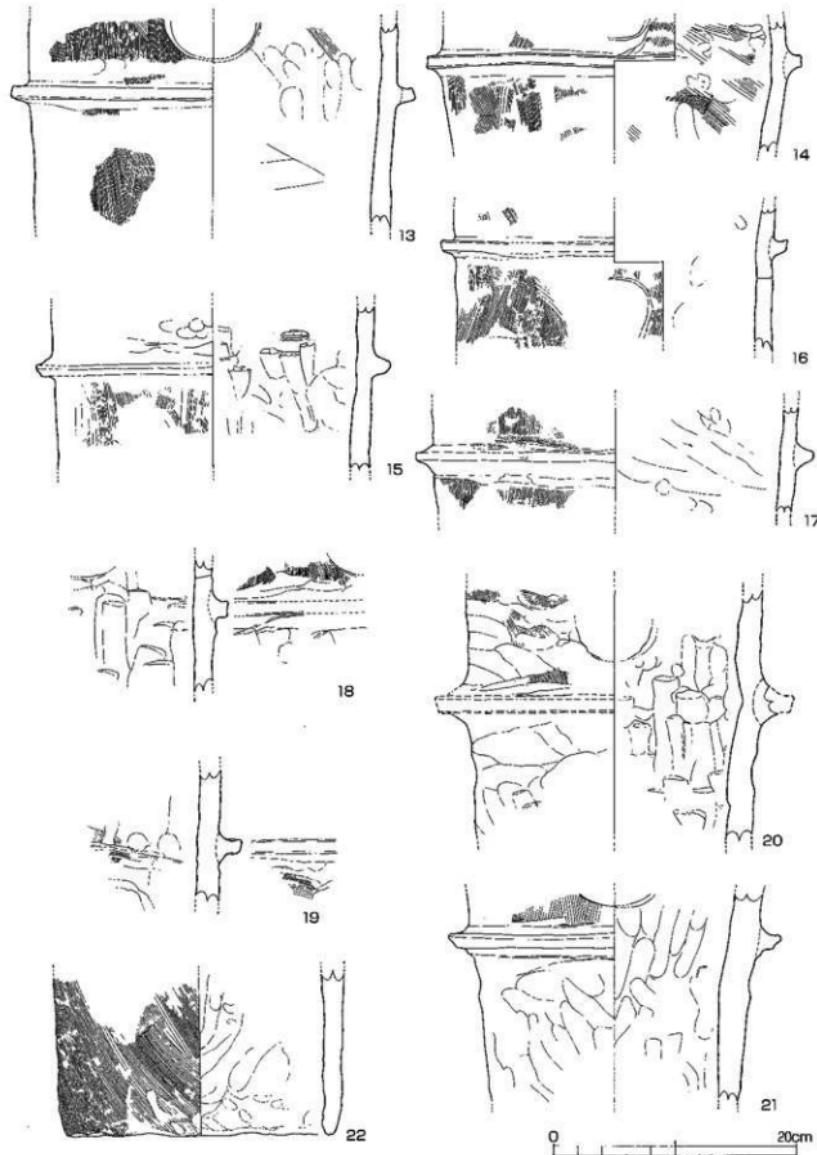


図43 第7T出土遺物②(埴輪)(1:4)

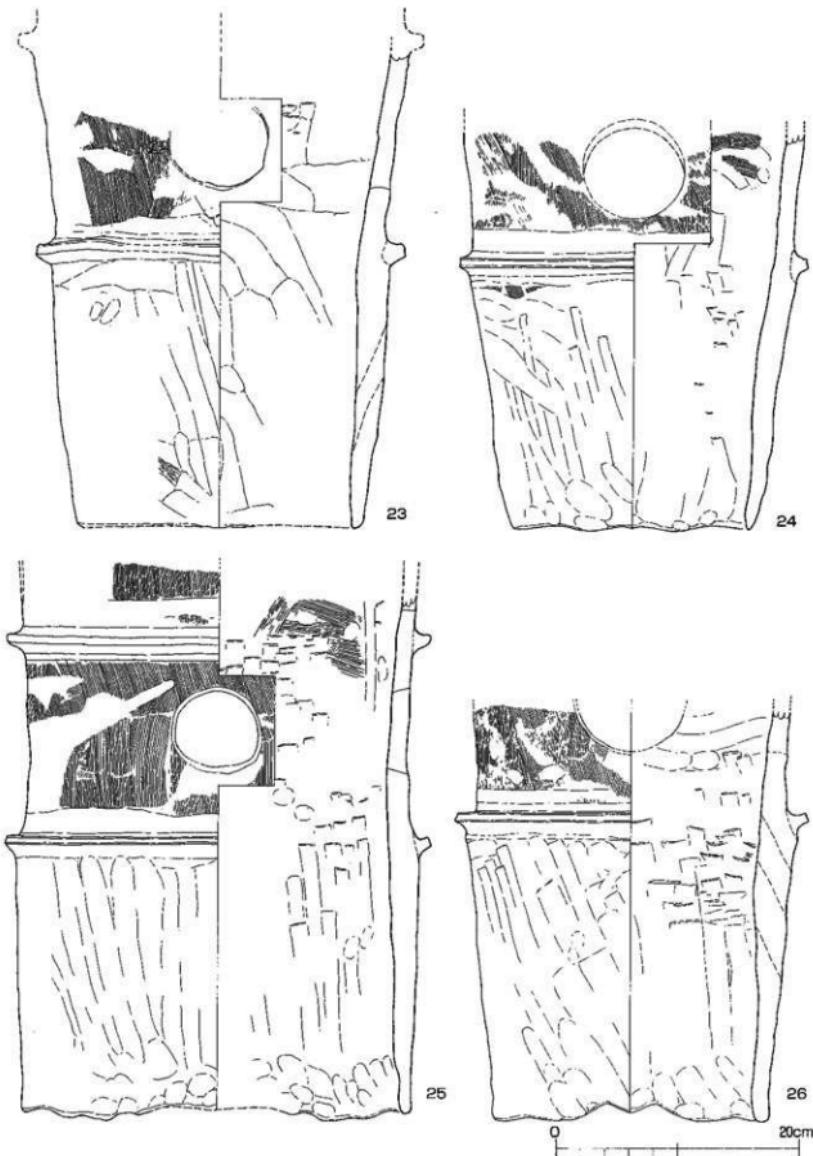


図 44 第 7 T 出土遺物③ (埴輪) (1 : 4)

る。3段の円筒埴輪であり、器径自体も通常の円筒埴輪よりも大きい。胴部の外面調整は全て縦ハケ目である。26は基底部の厚さが胴部に比べ著しく厚いことが特徴的である。内面調整は基底部に全て棒状又は角材状工具痕が残存しており、特に24・26では顕著である。なお、24・26には透孔部分以上の部位で横ハケ目が認められるが23では認められなかった。

22・27～29は基底部のみ残存しているものである。27～29は内外面とも強いナデもしくは指オサエで調整されている。これは通常の円筒埴輪に認められる調整方法である。一方、22の外面は底端部に至るまで斜めハケ目が認められることが特徴であり、このタイプの基底部は出雲地域に類例は少ない。底端部は23・24がV字型、それ以外がU字型である。

形象埴輪（図45）

30は形象埴輪の可能性がある破片である。タガが他の円筒埴輪と比べて低く帯状になると埴輪部の横断面形が楕円形を呈すると推定されることから、形象埴輪片とした。帶状貼付部は幅2.0cm、高さ0.4cmを測る。この形態の貼付部は手綱など革紐の表現に類似していることから馬形埴輪の一部であることも考えられる。ただし、近畿地方のタガに見られる板押圧による調整の可能性もある。

須恵器（図46）

31は子持壺の親壺と子壺の連結部である。親壺は胴部中部に最大径があるタイプと考えられ、肩部に子壺が取り付いている。子壺部は下半しか残されていないが、融が退化したタイプのものと推定できる。子壺の数については破片のため推定することは難しい。子壺の直下に透孔の痕跡が認められ、25・14と類似するものと考えられる。

32は子持壺の親壺と脚部の連結部である。連結部に突帯を巡らせ、親壺部外面はタタキ痕が残存し

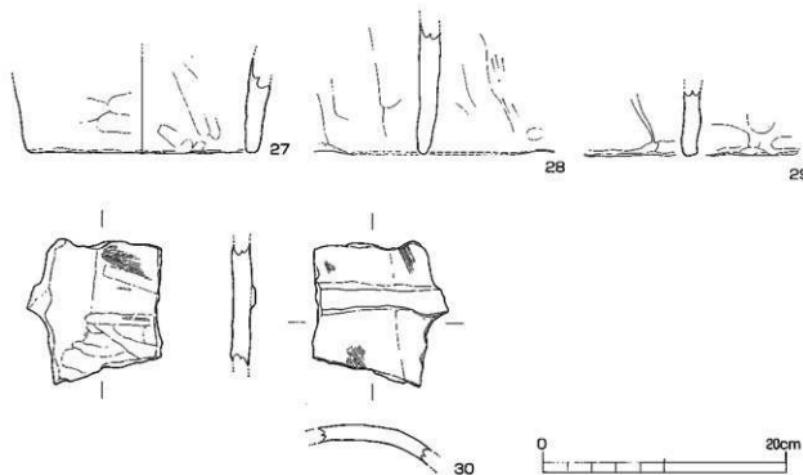


図45 第7T出土遺物④（埴輪）（1:4）

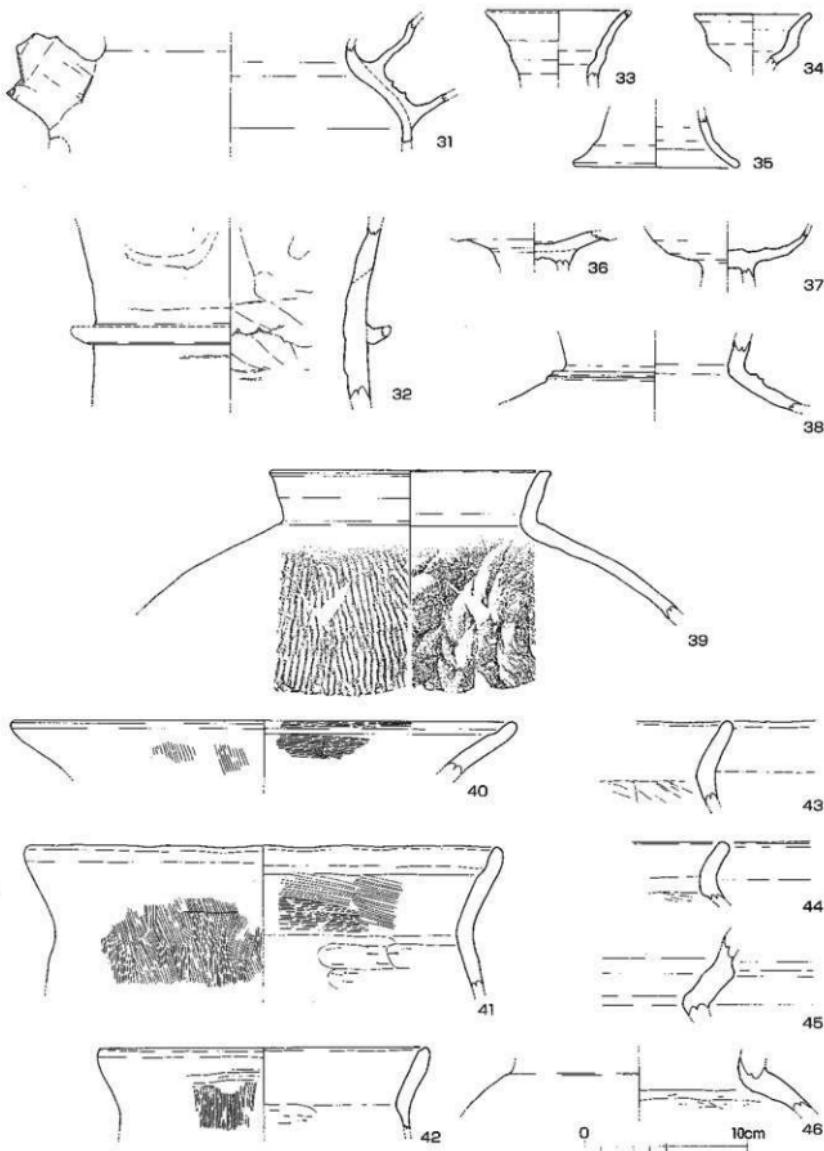


図 46 第7T出土遺物⑤(埴輪) (1:4)

ている。また、子壺の連結部の下部が認められた。内面は強いナデにより調整されるが粘土紐痕が残存しており、非常に粗い調整となっている。柳浦分類の有脚IV類に該当すると考えられる。

33・34は子持壺の子壺である。33は口縁部が大きく外反し壺部が退化した築山古墳の子持壺に通有に見られるタイプのものである。34は非常に浅いタイプのものであり、築山古墳では唯一のタイプの子壺である。

35は高壺の脚部と考えられるものである。内外面ともナデ調整であり、上部内面には紋込みの痕跡が認められる。内面の造りから脚部であると判断したが、子持壺の子壺口縁部である可能性が残されている。

36・37は高壺の壺・脚部接合部である。36は壺部の残存する端部が外反していることから子持壺の親壺・子壺連結部である可能性もある。

38・39は壺である。38は頸部直下にM字中の突帯を巡らせており、類例を確認することができなかつた。全体的に丁寧な造りをしており上下の判断に迷ったが、肩部内面が比較的雑であることから実測図のとおりに判断した。39は口縁部から肩部である。口縁端部は外方に若干引き出されたよう

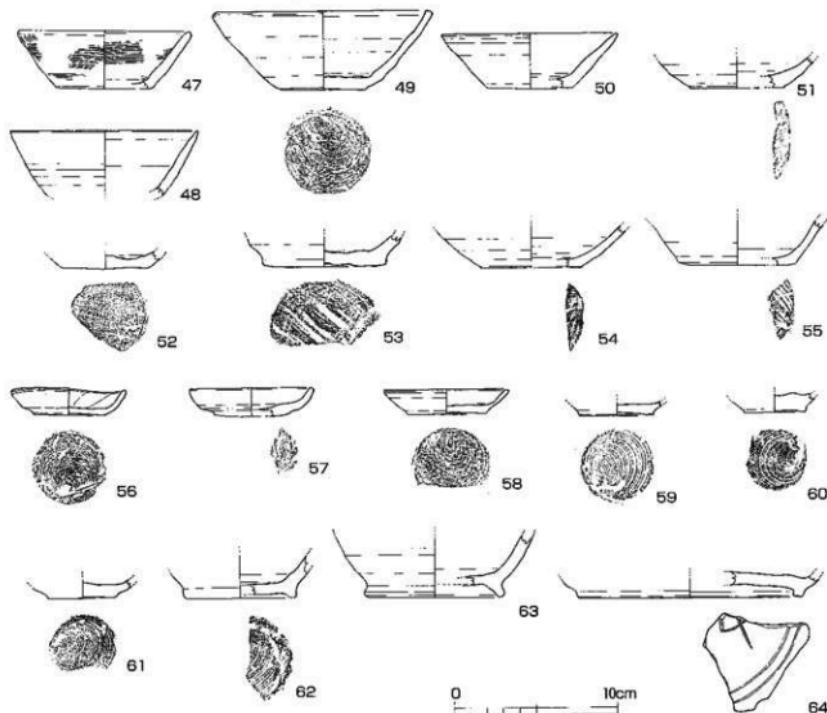


図47 第7T出土遺物⑥(土師器)(1:3)

になっており、肩部外面は直線文タタキ痕、内面は当具痕と考えられる痕跡が残存している。

土師器（図 46・47）

40～44は壺又は壺の口縁部である。40・41は口縁部内面にへこみを持ち、口縁部内外面にはハケ目で調整されている。41の内面頸部以下はヘラケズリであることから、40も同様であろう。しかし、同様の特徴をもつものの口縁部の角度が違っていることは、壺と壺の器種の違いであることが推定される。42は口縁端部にへこみを持つことが特徴である。43・44は壺の破片であるが、古墳時代後期の土師器壺に良く見られるタイプのものである。なお、いずれの遺物にもススの付着が認められる。

45・46は丹塗壺と考えられるものである。第5T（36～20）で出土したものと同様のものである。

47～64は壺又は皿である。47～55は壺であり、中世から近世のものと考えられる。56～61は皿であり、同様の時期のものであろう。62～64は高台を持つものである。64の底部外面にはヘラ記号が認められる。

第8トレンチ出土遺物

須恵器（図 48）

第8Tの出土遺物で図化できたものは須恵器子持壺の脚部1点のみである。柳浦氏の有脚IV類と考えられるもので、第2Tより同様の脚部（25～14）の出土が確認されている。脚部は粘土紐の積上げ痕が顕著に認められ、底部は整形段階の上部の重みによる歪みが見られる。端部内面が垂直に切られていることが特徴である。



図 48 第8T出土遺物(須恵器) (1:3)

参考文献

川西宏幸 「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第2号 1978

井上寛光 「山雲の円筒埴輪」『松江考古』第5号 1983

出雲市教育委員会「塙治地区遺跡分布調査 I」1986

藤永照隆 「出雲の円筒埴輪編年と地域性」『島根考古学会誌』第14集 1997

藤永照隆 「第5章 墳丘出土遺物」「上塙治築山古墳の研究」島根県古代文化センター 1999

大谷晃二 「円筒埴輪基底部再調整の技法復元」『宮山古墳群の研究』島根県古代文化センター・島根県埋蔵文化財センター 2003

山内英樹 「埴輪研究の現状と課題～「基底部調整」をめぐる諸問題について～」『宮山古墳群の研究』島根県古代文化センター・島根県埋蔵文化財センター

第3節 調査成果のまとめ

(1) 築山古墳に關わる遺構の性格

墳丘から放射状に設定したトレンチのうち、第5T～7Tのトレンチにおいて埴丘裾と考えられる場所から約15mの幅で落ち込み状遺構を確認している。この遺構の底面標高は9.3m～9.5mとほぼ一定であること、円筒埴輪が大量に出土することなど多くの共通点を持っている。このため一連の遺構であることが推定でき、築山古墳を巡る周壕であると考えられる。

また、墳丘に放射状に設定した第2T・5T・6Tから、周壕のほぼ中ほどに幅2mの溝状遺構が検出された。この遺構から多くの円筒埴輪・須恵器子持壺の出土がみられることからみても築山古墳に関連するものであると考えられる。ただし、完形に近い状況で出土するものはほとんどなく、この溝状遺構に埴輪を樹立させていたとは考えにくい。この遺構について、人為的なものかどうか確認するのは非常に難しいが、埋土が周壕埋土よりも粘質であることから水が絶えずあったことが推定される。ちょうど周壕の中央に位置することから考えても、周壕中央よりに集まった雨水が周壕内部の低い方向へ流れていった作用により自然に形成されたものかもしれない。

また、第2T・6T・7Tから認められたテラス状遺構は、その位置から考えて一連のものである可能性がある。なお、このテラス状遺構上の堆積土は古墳時代以降の包含層であることから築山古墳に關わる可能性があるが、その確証を得るだけの成果を得ることができなかった。

(2) 墳丘と周壕

C14年代測定法の結果よりみる埴丘盛土と周壕埋土

周壕埋土は大きく2分割することができる。一方は埴輪・須恵器片は出土するものの中世土師器が含まれる層群、もう一方は完形品も含め、多くの埴輪・須恵器が出土するこれらの単純層群である。発掘調査における所見として前者は中世期以降、後者は築山古墳築造直後から中世よりも前の時期と考えられる。

また、埴丘盛土が残存している場所も確認できたこともあり、築山古墳の築造年代及び周壕の埋没過程の解明のための資料を科学的アプローチから得ることを目的として、周壕埋土及び埴丘盛土推定土層についてC14年代測定法による年代測定を実施した。

土 层		測定年代 (yBP)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	補正年代 (yBP)	暦年代	備考
埴丘盛土	5T-17	1,770 ± 30	- 21.47	1800 ± 30	AD 130 ~ AD 330	
周壕埋土	5T-7	1,750 ± 30	- 20.93	1780 ± 30	AD 130 ~ AD 350	中世土師器含む
	5T-12	1,710 ± 20	- 19.37	1750 ± 20	AD 210 ~ AD 400	埴輪のみ出土
	5T-8	1,550 ± 30	- 21.17	1580 ± 30	AD 410 ~ AD 560	埴輪のみ出土
	5T-9	1,530 ± 30	- 19.22	1570 ± 30	AD 410 ~ AD 570	埴輪のみ出土

表3 C14年代測定結果

対象土層は次のとおりである。

墳丘盛土 5T-17層 (図13)

周塚埋土 5T-7・12層 (図13) 6T-8・9層 (図15)

なお、この業務は文化財調査コンサルタント株式会社に委託して年代測定を実施した。測定結果については第3表のとおりである。(提出された報告書より抜粋し、土層名などについて一部改変。)

周塚埋土については第5Tが2~4世紀、第6Tは5~6世紀の年代を得ることができた。これを盲目的に信頼すれば周塚は2世紀から第5T付近より埋没はじめ、6世紀までにある程度の埋没が完了したと把握することができる。しかし、上塙治築山古墳の年代は出土遺物や横穴式石室及び石棺から6世紀後半ごろと比定されているため、考古学的な年代観とは矛盾を生じている。この矛盾を解決するためには墳丘盛土推定土層の年代が鍵となるようである。この土層は2~4世紀の年代が明らかになっている。つまり、墳丘盛土については墳丘築造以前の古土壤を利用していた可能性が指摘できよう。現在の墳丘が大きく改変されていることを考慮すれば、墳丘に利用していた古土壤の崩壊もしくは人為的な造成によって周塚が埋没したものと考えれば良いのではないだろうか。

第2T-5Tにおいて墳丘の盛土と推定できる土層を確認しているが、この土質は非常にしまっていることを除けば周塚内の堆積土と酷似する。また、現状の墳丘が大きく破壊されていることからみても、周塚内堆積土のほとんどが墳丘を切り崩した土と考えられ、中世期に大規模な土地開発による築山古墳墳丘の破壊が行われていたことがうかがえる。

なお、墳丘に使用したとみられるクロボク土は築山古墳の周辺にしか分布しておらず、100mも離れるとみられなくなってしまう。このことから、築山古墳築造を目的としてどこからかこのクロボク土を搬入してきたものと推定できるものの、考古学的にも科学的にも根拠に乏しく、この問題についての結論は今後の土壤分析等の成果に譲らざるを得ない。

「築山」という地名

上塙治築山古墳周辺には「築山」という集落名がみられ、これは古墳所有地宅の門名であることが上塙治築山古墳発見の際の新聞に記載されている。「慶安四年塙治村御検地帳」にも「つき山」という地名がみえ、1651年には「築山」という地名が成立していたことがわかり、17世紀には人工の山であることが理解されていたようである。発掘調査成績によれば、15~16世紀ごろには周塚が埋められて周辺の造成が行なわれていたことが推測されるが、この造成は墳丘の切り崩しによることは前述のとおりであり、この時期には既に古墳または信仰の対象としてはみられていなかった可能性が高いと考えられる。

(3) 遺物出土状況について

周塚内から多くの円筒埴輪及び須恵器子持壺が出土したことは報告のとおりである。ここでは、これらの遺物出土状況の特徴についてまとめておきたい。

周塚内よりの出土状況は大きく2通りに分けられる。1つは中世土師器と混在して出土する状況であり周塚内上層で認められる。2つめは円筒埴輪及び須恵器(築山古墳に伴う時期のもの)のみが出土する状況であり、周塚内下層で認められる。層位学的に考えると上層は中世期、下層は築山古墳築造後から中世期までと推定できる。

上層より出土する円筒埴輪及び須恵器のほとんどは破片であり接合して形状の大半がわかる資料は少なく、中世期における築山古墳の破壊に関わると考えられる。一方、下層より出土するものについては接合ができるものが大量にあり、形状が把握できるものも多く認められた。なお、下層よりは円

筒埴輪が口縁部から基底部まではほぼ完形の状態で出土したものが3例認められている。

自然に墳丘が崩れる等の作用により周塚内に流れ込んだとすれば、円筒埴輪はある程度破壊され、破片が散逸していくものと推定できる。しかし、基底部がきちんと残存していることから、きれいに抜き取ったものと考えられ、投げ捨てればバラバラになるであろうことから抜き取った後もあえて周塚内に置いた状況が推定される。意図的に抜き取るもの、必要ないものとして処分するのではなく、周塚内に置いたような様子であり異様な状況となっている。

このような状況が観察できたものの、今回の調査においてはこの行為に対する原因となる事柄や行為者の意図を推測するだけの知見を得ることができず、謎に包まれたままである。

一方、須恵器子持壺の出土は第1T・2T・3Tで全体が復元できるものが出土した。また、昭和60年度の調査においては墳丘の南東側からもほぼ完形のものが出土している。その他にも8トレンチで底部片が出上するなど、どのトレンチでも確認することができている。須恵器子持壺は石室付近に固められて配置されることが多いが、上塩治築山古墳においては石室に近い場所に集中する傾向はみられない。須恵器子持壺の破片は第1T～第8Tのどのトレンチからも出土することから考えても、墳丘周辺に円筒埴輪と並んで一定の割合で存在していた可能性がある。このような状況は現在では築山古墳でしか認められていないことから、築山古墳の造営にあたって子持壺の使用方法を誤解もしくは独自の方法として採用したものと推定される。

(4) 形象埴輪について

部分的ではあるが、報告で述べたように形象埴輪と考えられる埴輪片が出土している。しかし、たまたま底部調整を行わなかったことやタガの突出度の著しく低い形状（畿内周辺では当該時期に低いタガは普通である。）であるとも考えられることから円筒埴輪である可能性も否定はできない。ただし、形象埴輪の可能性も否定ができないことも事実であり、形象埴輪とするならばこれまで円筒埴輪しか認められていなかった上塩治築山古墳から出土したことは意義あることであろう。

(5) 丹塗りの土器について

各トレンチから丹塗りの土器の出土がみられている。(36-20・46-45・46) その大半が上層（中世期）よりの出土であるが、第5Tでは下層（築山古墳築造後）より出土したことが確認できており、築山古墳に関連する遺物である可能性がある。この遺物は壺の破片であり、薄手の肩部に厚手の口縁部が付くようである。特徴的なのは2段以上になる口縁部であり、内面に1条の凹みを持つ。また、胎土は白褐色を呈しており埴輪やその他の土師器とは全く異なるものである。

類似例は現在のところ認められておらず、築山古墳に伴うものかという点も含め、どのような性格を持つものかは、未だ不明である。

参考文献

- (1) 今岡清「地名の話 築山」『えんや物語』第11号 塩治公民館文化部 2001)

第4章 考察

第1節 上塙治築山古墳の墳丘形態と規模

築山古墳は壯麗な横穴式石室を持つことから今市大念寺古墳と並び出雲平野の代表とされる古墳である。豪華な副葬品を持つことも手伝って様々な研究の対象となってきたが、墳丘が後世の大きな改変を受けていることや発掘調査が進んでいなかったこともあり、墳丘規模の復元は条件付の推定であったと言わざるを得ない。

今回の調査では必ずしも墳丘規模が確定できる十分な成果であったとはいえないが、発掘調査で得られた事実に基づいて若干ながら築山古墳の墳形・規模の復元について検討してみたい。

(1) これまでの復元案

築山古墳の規模復元に関する研究についてまとめられた報告書が既に刊行されているため、ここでは各復元案の詳細についてはそちらに譲りたいが、簡単に各復元案を紹介しておきたい。

山本清復元案

山本清氏は1951年に「塚の原形を推定するは発掘以外手がかりがない」としたが、石室の奥壁付近に円形の中心が存在すると仮定して復元を行っている。これは墳丘の北西隅は最も残存しているとして、墳丘の半径を中心から北西隅までを半径と想定し、直径約43mの円墳を復元している。

西尾克己復元案

西尾克己氏は墳丘規模の復元を目的とはしていないが、横穴式石室の検討から墳丘の規模を想定している。¹⁰ 石室の基準線を奥壁とほぼ直角に交わる南側側壁ラインと仮定し、両側壁ラインを延長した場合、奥壁ラインを合わせた形が細長い三角形を呈することに着目した上で、この両側壁の延長線上の交わる点と基準線となる側壁奥の角（南東奥隅）の長さを墳丘の半径と考え、直径を約45mと想定した。

(2) 墳丘形状・規模の推定

墳丘裾の推定

中世以降の削平により大きく墳丘形状が改変されている以上、現状の墳丘から墳形・規模を具体的に把握するのは困難である。これらを復元するためには発掘成果をもとに墳丘裾を把握しておく必要がある。しかし、本来であれば最下段の円筒埴輪が巡らされている場所に墳丘裾を求めるのが一般的であると思われるが、円筒埴輪列があった場所が不明確であるため仮に墳丘から周縁に至り底となる傾斜変換点に求めておく。

墳丘形態の検討

築山古墳の墳形については円墳・方墳・前方後円（方）墳と諸説あり、現在は円墳である説が有力である。そこで、今回の調査において確認した仮墳丘裾と考えられるラインを築山古墳周辺地図に合成したものが第49図でありこれを元に検討を行いたい。

・前方後円（方）墳の可能性

1907年にウイリアム・ガウラントが前方後円墳（ダブル＝マウンド）として報告していた経緯もあり、今回の発掘調査においては、まず墳丘裾の確認とあわせて前方後円（方）墳であるかどうかの目的を持って調査を行っている。（第1～4T）この結果、第3・4Tでは前方部の痕跡は確認できず、

前方部が南側に存在している可能性は否定できる。しかし、この時点では前方部が北側に存在する可能性も残されていた。

なお、墳丘北側については一部調査をすることができた。(第8T)しかし、ここでは攪乱が深くまで及んでいたため、墳丘裾を確認することはできなかった。ただし、トレンチ底にはクロボク土の堆積が残存しており須恵器子持壺片が出土した上、そのレベルは他の周濠底面と同レベルであることから、この部分に周濠があった可能性は大きく、この方向に前方部が存在している可能性は低い。ただし、第8T以外の墳丘北側は民家群となっており、更なる調査は困難であるため、前方後円墳の可能性が完全に否定できたわけではない。

・考える墳丘形態

第2・4Tで周濠と考えられる落ち込み状遺構が検出されていることから、平成13年度はこの形状の把握を目的として調査を行っている。(第5～8T)これらのトレンチより確認した仮墳丘裾ラインはいずれもトレンチにはば直交した状況を確認することができた。方墳であれば方形の軸がずれた場合、墳丘裾ラインがトレンチに対し斜め方向に検出されると考えられるため、方墳ではないと考えられる。

また、第5・7Tにおいて周濠最外周が検出されている。その他、周濠最外周と考えられる落ち込みの肩は第3・4Tからも確認できており、これらをつなげば弧を描くことから周濠最外周が円形を呈すると考えられる。これらの状況を考え合わせると、墳丘の本来の形状は円形であったと結論付けることができよう。

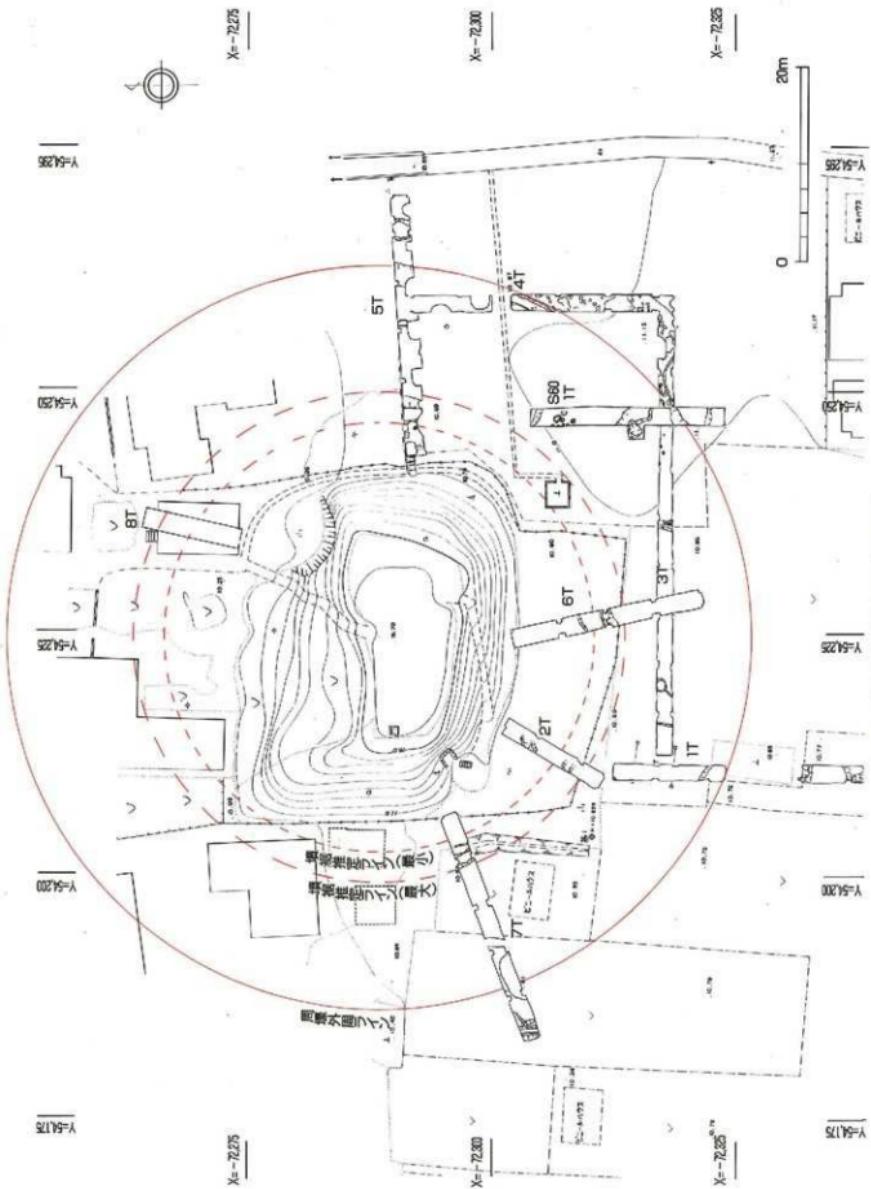
墳丘及び墓域の規模

調査により判明した仮墳丘裾ラインから円形の中心を復元しようと試みる場合、先に見たとおり山本・西尾両氏が推測するように石室奥壁付近に求めることを推定されている。しかし、今回は実際に調査して判明した場所から復元的に中心を考えたい。前項の結論より築山古墳は円墳であると仮定して全ての仮墳丘裾が円形の弧上を通るように墳丘範囲を設定し墳丘中心を推定した。すると墳丘中心は石室南東奥隅よりも3mほど北側にあることが考えられる。墳丘規模は、直径50.5mと推定することができるが、これは仮墳丘裾ラインを基本とした場合である。第5Tより検出したピットが円筒埴輪抜き取り痕とするならば、この部分が墳丘裾と意識されていたと推定でき直径44.5mとなる。少なくとも、直径50.5mよりも大きくなるとは考えにくく、この2案の範囲で墳端があるものと推定できる。

周濠最外周肩の部分では地山の直上が中世以降の堆積土であり、周堤帯の有無については確認するすべがない。ただし、周辺はどこをみてもフラットな状況であることから周堤帯が存在しているとは考えがたいこともあり、築山古墳の墓域の外限を周濠最外周検出部分と仮定する。現状では仮墳丘ラインから周濠最外周までは約14～15mを測り、非常に幅の広い周濠を持っていたことがうかがえ、深さは現状で最大0.8mを測る。

以上のことを総合すると、築山古墳は直径約45～50mの円墳（または前方後円墳の後円部）であり、周囲に約15mの周濠を巡らせた古墳であることが確認できた。墓域（周濠の端から墳丘を挟んだ対端）は約77mと非常に大きく、今市大念寺古墳の次の首長墓として遜色ない規模を誇っているといえるだろう。

図 49 塗丘規模復元図 (1 : 500)



参考文献

1. 「上塙治築山古墳の研究—島根県古代文化センター調査研究報告書4—」島根県古代文化センター
1999
2. William Gowland: The Burial Mound and Dolmens of the Early Emperors of Japan.: The Journal of the Royal Anthropological Institute of Great Britain and Ireland, vol.37.1907.
3. 渡辺貞幸「ガウラント氏と山陰の古墳（下）」（『八雲立つ風土記の丘』No.40 八雲立つ風土記の丘
資料館 1980）
4. 池田満雄「上塙治築山古墳」（『出雲市の文化財』第1集 出雲市教育委員会 1956）

第2節 上塙治築山古墳出土の円筒埴輪について

これまで報告してきた円筒埴輪は全て周濠内からの出土であることから、上塙治築山古墳に伴うものであることは明らかである。ところが、その形態は画一的ではなく様々な特徴を持つものが混在しているようであるため、この項においては報告書掲載遺物を中心に形態的・手法的な点に着目して整理をしてみたい。

なお、この項における埴輪例については、前章に図面を掲載していることから実測図を掲載せずに挿図番号と遺物番号で表記する。

（1）当該地域の円筒埴輪研究

当該地域の円筒埴輪については川西氏の論考¹¹⁾で地域性が指摘されて以来、昌子（井上）寛光氏、藤永照隆氏らによって論じられてきた。昌子（井上）氏は島根県内の全体器形がわかるものを中心に円筒埴輪の集成を行い、「底部再調整が認められること、退化しているにも関わらず突出度をもつタガが認められること」は出雲地方の地域性であると指摘している。藤永氏は昌子（井上）氏の論考以後増加した出雲全体の円筒埴輪の再集成したうえで、形態的・手法的に検討して出雲における円筒埴輪の編年を示している。

また、近年、安来市宮山古墳群の円筒埴輪に端を発して基底部調整の研究が進められた。¹²⁾山陰の円筒埴輪の基底部に見られる圧痕について、これまで棒状または角材状の工具で強くナデつけて調整されたと考えられてきたものの中に、これらの工具でタタキを施した可能性があることを指摘し、出雲東部を中心として基底部調整の時期的傾向について明らかにされている。

（2）上塙治築山古墳出土埴輪の特徴

形態的特徴

上塙治築山古墳の円筒埴輪はタガが非常に突出していることが特徴的であり、川西編年V期・出雲の円筒埴輪編年V期にあたるものと考えられる。

・口縁端部の形態

大きく2種類認められる。端部が凹むもの（1類）・端部がフラットなもの（2類）である。これらは更に口縁端部を外方へ若干引き出すもの（a）とそうでないもの（b）が存在している。

・タガの形態

大きく3種類認められる。端部が凹むもの（1類）・端部がフラットなもの（2類）・端部が突出するものの（3類）が認められ、更に上方が出るもの（a）・下方が出るもの（b）・真横に出るもの（c）が存在している。

なお、1類～3類は同一埴輪に混在することが少なく工人の特徴によるものである可能性があるが、同類中の(a) (b) (c)については同一埴輪に混在する例も認められる。(34-5)しかし、こういった例は少なく基本的には同向きであるため、タガの貼付作業においては埴輪自体を反転することなく付けられたものと推定される。

・基底端部の形態

4種類認められる。口縁端部が鋭角になるもの(1類)・鈍角になるもの(2類)・「U」字形を呈するもの(3類)・基底部調整を施さないもの(4類)が存在する。

1類 上塙治築山古墳出土の円筒埴輪に普遍的に見られるものである。どちらも板状工具または棒状工具痕が内外面ともに認められ、基本的には同様の調整方法であったと考えられる。最終的に指オサエ及びナデ調整によつて断面形が「V」字形を呈するものである。

2類 基本的には1類と同様の基底部再調整を行なうものである。1類と異なる点は最終的な端部の調整を丸く仕上げる点であり、断面形が「U」字形を呈するものである。

3類 口縁端部をいわゆるカット技法を用いて整形・調整されるものであり、上塙治築山古墳の出土例では稀有な例である。この調整を施している可能性のあるものは4例を確認している。(32-3・35-16・45-27・29)

4類 埴輪の自重によって基底端部が肥厚し、再調整を施さないものである。上塙治築山古墳出土の円筒埴輪においては基本的に基底部倒立調整を施すものがほとんどを占めており、これらの調整を施すという基準があったと考えられる。そのため4類のものについては、基底部倒立調整を施せない状況が推測でき、倒立させることのできない形象埴輪であった可能性が考えられる。(35-17・40-35)

手法的特徴

・外面調整

基本的にはハケ目により調整が施されている。一部には明瞭なハケ目が観察できないものもあり、(6T-1)比較的平滑な板状工具を用いたナデ調整などの調整も考えられるが、外面調整においてはその施し方に画一性はない。2次調整を行なわないもの、2次調整を行なっても縦・斜めハケ目のものが非常に多く、2次調整における横ハケ目は主流にはならないようである。

胴部外面調整に横ハケ目が認められるものは、1Tは2点(20-1・2) 2Tは1点(24-9) 3Tは9点(27-11・13・14・28-15・19・22・23・29-24・28) 4Tは2点(32-1・9) 5Tは5点(34-1・5・35-9・11・14) 6Tは9点(37-1・38-14・15・39-16・17・18・22・24・26) 7Tは1点(43-18)の合計29点である。

ただし、この中には斜め方向から横方向へ方向を変えてハケ目を施す例も多々確認できる。このことからは、2次調整でハケ目を施す際に基本的には斜めもしくは縦方向のハケ目を志向するが、タガに近い部分はそれに沿わせた結果であり、いわゆる横ハケ目と捉えることは難しいかもしれない。これらを排除すれば、いわゆる横ハケ目を持つ埴輪は16点となろうか。横ハケ目が一周回るもの(もし

口縁端部の形態

	a	b
1類	/	/
2類	/	/

タガの形態

	a	b	c
1類	フ	フ	フ
2類	フ	フ	フ
3類	フ	フ	フ

基底端部の形態

1類	2類	3類	4類
U	U	U	U

図50 円筒埴輪形態分類図

くは回ると思われるもの)は非常に稀少であり9点が認められる。

27-13・34-1は上下胴部に明瞭な横ハケ目が残存しているが、これにはいわゆる静止痕が認められず、連続横ハケ(C種横ハケ)と考えられるものである。34-5は上下胴部に横ハケ目が認められるが、全面ではない上に上段では横ハケ目の上から縦ハケ目を施している。20-1・2・35-11は静止痕が認められ、いわゆる継続横ハケ(B種横ハケ)と考えられるものである。27-11・39-17・18は横及び斜めハケ目が混在しており、明確ではないが断続横ハケ(A種横ハケ)と考えられる。

・内面調整

口縁部のみに横及び斜めハケ目を施すものが大半を占める。胴部以下については指頭圧痕、ナデ及び棒状(角材状)工具痕の残るもののがほとんどである。これらの調整の間に縦ハケ目が残存していることもあり、ハケ目調整の後に再整形したことがうかがえる。

(3)まとめ

ここまで上塩治塗山古墳出土の円筒埴輪の形態及び手法的特徴(特に胴部外面横ハケ目の手法について)みてきたが、これまでの研究の中には、形態的な特徴は胎土の色調と相関関係が認められるとの指摘もある。この点について考えてみたい。

上塩治塗山古墳より出土した円筒埴輪を観察すると、色調は赤色・明橙色・暗褐色・黄褐色・淡褐色の5色が認められる。これらの色の違いは、胎土・焼成具合の違いなどから生じていると考えられる。

色調別円筒埴輪の特徴

赤色の円筒埴輪

口縁端部とタガが同一個体で残存しているものはそれほど多くなく確証に欠ける点はあるが、同一個体における口縁端部とタガの形態及び色調との間には強い関連性が認められ、口縁端部1類、タガ1類でほぼ統一される。また、胴部外面の2次調整として横ハケ目を施す例がほとんどであることも特徴的である。

埴 輪		口 縁 端 部			タ ガ 形 状			基 底 部		胴 部 外 面	
トレンチ	圓 面	番 号	形 状	引 出	形 状	向 き	条 数	形	状	調 整	
1 T		20	1	1	a	1	b	3	2	横	
			2	I	b	1	b	2	2	横	
3 T		26	1	2	b	1	a	2	1	縦・斜	
		28	19	-	-	1	b	-	-	横	
		29	28	-	-	1	b	-	-	横	
			34	-	--	-	-	-	2	-	
4 T		32	35	-	-	-	-	-	1	-	
			5	1	a	-	-	-	-	-	
			9	-	-	1	b	-	-	横	
5 T		34	1	1	a	1	b	3	-	横	
			3	1	a	-	-	?	-	-	
			35	9	-	-	1	a	?	-	
6 T		38	14	-	-	1	b	-	-	横	
			23	-	-	1	b	-	-	-	
			24	-	-	1	b	-	-	横	
			40	32	-	-	-	-	1	-	
7 T		43	22	-	-	-	-	-	2	-	

表3 赤色円筒埴輪一覧表

明橙色の円筒埴輪

I口縁端部が1類で統一されるが、タガ形状に統一性を欠く一群である。この色調の基底部は2点しか認められないが、どちらも1類である。胴部外面の調整は縦又は斜めハケ目がほとんどである。

埴輪		口縁端部		タガ形状		基底部 形狀	胴部外面 調整
トレンチ	図面番号	形状	引出	形状	向き		
2 T	24	6	1	b	—	—	—
		7	1	b	—	—	—
		8	—	—	2	c	—
		9	—	—	1	b	—
3 T	25	2	1	b	—	—	—
		5	1	b	—	—	—
		8	1	b	—	—	—
	28	18	—	—	2	c	—
		20	—	—	3	c	—
		23	—	—	2	a	—
4 T	32	1	—	—	1	a	2+
5 T	34	6	—	—	3	a	?
	35	—	—	1	c	?	
	10	—	—	3	c	?	
6 T	38	3	1	a	—	—	—
		7	2	a	—	—	—
	39	20	—	—	2	c	—
		14	—	—	2	c	—
7 T	20	—	—	—	—	—	—
	45	28	—	—	—	—	1

表4 明橙色円筒埴輪一覧表

暗褐色・黄褐色・淡褐色の円筒埴輪

暗褐色の円筒埴輪は圧倒的多数を占めるが、各形状や手法に全く統一性を見出すことができない。黄褐色・淡褐色の円筒埴輪も同様に統一性がなく、同じ一群であると考えられる。胎土も類似しており、この色調の違いは焼成の違いであると考えられる。

形態・色調からみるグループ分け

赤色円筒埴輪については画一性がみられることから、埴輪製作時において同一の工人（たち）により製作されたものと考えられ、1グループを形成していると考えられる。また、明橙色円筒埴輪も口縁端部形状に画一性が認められたため、1グループを形成していると推定したい。一方、暗褐色・黄褐色・淡褐色円筒埴輪については統一性が乏しく、グループ性を指摘するのは難しい。つまり、色調と形態の関係からみると赤色・明橙色・それ以外といった3グループを指摘することができよう。また、出土数からみると赤色・橙色はほぼ同数で少数派であるが、企画性をもたない円筒埴輪グループは圧倒的な数量を誇っている。このことからは、企画性の高い円筒埴輪を製作した少数派の技術者（たち）とそれらの技術を真似した地元の土器製作者（？）等の多数派の製作者（たち）が存在したことを示している。

なお、どの色調の埴輪もほとんどのトレンチから出土し、区域ごとに担当グループがあったという訳ではないようである。埴輪の製作にあたって複数の工人グループの存在は考えられるものの、これらの独立性は高くないことがうかがえる。

(4) 今後の課題

工人集団

上塩治築山古墳単体の資料ではその検討には限りがあると考えられるものの、形態的・手法的に分類するといいくつかのグループが指摘できることで、上塩治築山古墳の造営にあたって埴輪を製造した工人には複数の集団が存在していたことがうかがえる。ただし、この点については出雲西部において今市大念寺古墳・妙蓮寺山古墳・天神山古墳など、円筒埴輪を出土した古墳が次々に発見されており、これらを総合的に捉えた整理・比較が必要となろう。なお、出雲西部において埴輪製造遺構が検出されていないことから、現段階では出雲西部における埴輪の供給元について明らかにすることは難しい。一方、出雲東部においては時期が異なるものの松江市平所遺跡などで埴輪製造遺構が確認されており、その後の古墳における埴輪の展開をからみても古墳時代後期に埴輪製造が岡山東部において行なわれていたことは想像に難くない。画一性を持つ赤色円筒埴輪が少数派であることからみても、岡山東部から搬入された可能性も考えておくべきであり、岡山東部地域の円筒埴輪との比較・検討も工人集団を考えるアプローチの一側面となると考えられる。

他地域との関連

山陰地域における古墳時代後期後半の円筒埴輪はタガの突出度が著しいなど、しっかりととした地域性がみられる地域である。上塩治築山古墳もその例に漏れず、山陰の特徴が顕著に認められる埴輪を持っておりそのほとんどが山陰独自に製作されたものと考えられる。しかし、45~30は形象埴輪としているが円筒埴輪の可能性もないわけではなく、円筒埴輪とすればタガが平たく潰れた形状のものとなる。時期は異なるものの宍道町上野1号墳では畿内の鋪付円筒埴輪（棺としての使用）の出土が知られていることもあり、その時期における円筒埴輪が畿内との交流がないとは決して言えない。上塩治築山古墳の属する時期（古墳時代後期後半）における畿内の円筒埴輪のタガは潰れて平たいものが普通であり、畿内の埴輪との関連性も考えることが課題となろう。

ここまで、上塩治築山古墳より出土した円筒埴輪について、思いつくまま述べてきた。資料の少なさや筆者の勉強不足から他遺跡との比較ができなかったことにより、充分な検討・論証ができたとは言いがたいが、今後の課題を見出すことで、今後の山陰地域における円筒埴輪研究の一助となることを期待したい。

参考文献

1. 川西宏幸「円筒埴輪総論」（『考古学雑誌』第64巻第2号 1978）
2. 井上寛光「出雲の円筒埴輪」（『松江考古』第5号 1983）
3. 藤永照隆「出雲の円筒埴輪編年と地域性」（『島根考古学会誌』第14号 1997）
4. 藤永照隆「第5章 墳丘出土遺物」（『上塩治築山古墳の研究』島根県古代文化センター 1999）
5. 大谷晃二「円筒埴輪基底部再調整の技法復元」（『宮山古墳群の研究』島根県古代文化センター・島根県埋蔵文化財センター 2003）
6. 山内英樹「埴輪研究の現状と課題～「基底部調整」をめぐる諸問題について～」（『宮山古墳群の研究』島根県古代文化センター・島根県埋蔵文化財センター 2003）
7. 『埴輪－円筒埴輪製作技法の観察・認識・分析－』第52回埋蔵文化財研究集会発表要旨 埋蔵文化財研究会 2003

第3節 上塩冶築山古墳出土の須恵器子持壺について

上塩冶築山古墳の須恵器子持壺は、これまで、1985年に出雲市教育委員会が実施したトレンチ調査で出土したもの(1)、1970年頃と1980年頃に石室入口の南の畠で採取されたもの(2・3)の計3個体が知られていた。今回の調査では多数の須恵器子持壺片が出土し、接合した結果、これらは少なく見積もっても7個体は数えられる。したがって、上塩冶築山古墳の須恵器子持壺の出土数は最低でも10個体は確認できていることとなる。最近、池淵俊一氏によって、出雲型子持壺の形式分類・編年について再検討が行われている。ここでは、最新資料である今回の発掘調査で出土したものを含めた上塩冶築山古墳出土の須恵器子持壺について、以下の通り池淵氏の属性分類に従い分類を行うことで、成果の報告をしたい。

本書 掲載番号	採取・出土地点	口縁部形態	親口胴部形態	鏡蓋スカシ	蓋の右折・形状	脚部の形態	脚部区分帶の位置
1	85・第1T	単純口縁(單)	脚部張弱	スカシ無	円盤状	円筒形	区画無し
2	70頃・石室入口南の畠	段状口縁	脚部張中(推定)	—	—	—	—
3	80頃・石室入口南の畠	—	脚部張中(推定)	—	—	—	—
21-4	第1T・SD03	単純口縁(單)	脚部張弱	1段スカシ(推定)	円盤状	円筒形	区画無し
25-14	第2T・E3gr	単純口縁(單)	脚部張弱	1段スカシ	円盤状	円筒形	区画無し
30-37	第3T・G2gr	単純口縁(單)	脚部張弱	スカシ無	円盤状	円筒形	区画無し
30-38	第3T・G2gr	—	—	—	—	円筒形(推定)	—
41-36	第6T-3gr	—	—	—	—	—	—
41-37	第6T-3gr	—	—	—	—	—	—
41-38	第6T-3gr	—	—	—	—	—	—
41-39	第6T-1gr	—	—	—	—	円筒形(推定)	—
46-31	第7T-5gr	—	脚部張中(推定)	1段スカシ(推定)	—	—	—
46-32	第7T-1gr	—	脚部張弱(推定)	—	円盤状	円筒形(推定)	—
46-33	第7T-2gr	—	—	—	—	—	—
46-34	第7T-4gr	—	—	—	—	—	—
48-1	第8T-2gr	—	—	—	—	円筒形	—

本書 掲載番号	脚部スカシ の配 置	脚部スカシ 形 状	脚部の文様	子壺の数	子壺の向き	丁刺繡	子壺接合法	脚部と親壺 の接合法	焼成
1	脚上・中段	正三角形	文様なし	16個	横向き指向	筒状	底無子壺(孔無)	内傾接合	良
2	—	—	—	8個(推定)	斜向き指向	筒状	底無子壺(孔無)	—	—
3	—	—	—	—	横向き指向	筒状	底無子壺(孔無)	—	—
21-4	脚上・中段	正三角形	文様なし	8個(推定)	斜向き指向	筒状	底無子壺(孔無)	内傾接合	不良
25-14	脚上・中段	長三角形	文様なし	6~8個	斜向き指向	筒状	底無子壺(孔無)	内傾接合	良
30-37	脚上・中段	正三角形	文様なし	10個(推定)	横向き指向	筒状	底無子壺(孔無)	内傾接合	不良
30-38	—	—	—	—	—	—	—	—	良
41-36	—	—	—	—	—	筒状	底無子壺	—	良
41-37	—	—	—	—	—	筒状	底無子壺	—	良
41-38	—	—	—	—	—	筒状	底無子壺	—	良
41-39	—	—	—	—	—	—	—	—	不良
46-31	—	—	—	—	斜向き指向	—	—	—	良
46-32	—	—	—	—	—	—	—	内傾接合	良
46-33	—	—	—	—	—	筒状	底無子壺	—	良
46-34	—	—	—	—	—	筒状	底無子壺	—	良
48-1	—	—	—	—	—	—	—	—	良

表5 上塩冶築山古墳出土須恵器子持壺属性分類表

参考文献

- 池淵俊一 「出雲型子持壺の変遷とその背景」『考古論集（川瀬正利先生退官記念論文集）』 2004
藤永照隆 「第5章 墳丘出土遺物」『上塙治築山古墳の研究』島根県古代文化センター 1999

埴輪遺物観察表

序 番 号	幕 種	並 土位	成 形	内 面 上段/内面 下段/外面	前 土	法 英 (en)	法値 (cm) 岩国調査 (上段: 内面 下段: 外面)			備 考	
							基 底 高	第 1 段 高	第 2 段 高		
1.T高士輪輪											
20-1	四脚輪輪 (3段)	1T C3gr SD03	良好	褐色 無色	3mm 以下の砂粒 を含む	②29.6 ②17.0 ③54.0	・円錐状で タクタク無ナ ・円柱状ナ ・底ハラキニ ・開口部ハク	・同形状工具で タクタク無ナ ・タクタク無ナ ・底ハラキニ ・開口部ハク	・軽ハケ ・鋸めハケ	上方の円形スカシを上段・下段で直交するように 斜面の横には斜めにする(田舎唐ハケ)。 円柱部の内外面を強く削除ナシし、凹凸状を呈する。	
20-2	四脚輪輪 (2段)	1T C3gr SD03	良好	褐色 無色	3mm 以下の砂粒 を含む	②24.5 ③16.5 ③46.8	・円柱工具で タクタク無ナ ・円柱工具で タクタク無ナ	・円柱工具でタクタク無ナ ・底ハラキニ ・開口部ハク	・軽ハケ ・鋸めハケ	側面に2方の円形スカシを残す。 斜面の横には斜めにする(田舎唐ハケ)。 円柱部の内外面を強く削除ナシし、凹凸状を呈する。	
20-3	四脚輪輪 (3段)	1T C3gr SD03	良好	褐色 無色	3mm 以下の砂粒 を含む	②(8.4)	-	-	-	・軽ハケ ・鋸めハケ	山形端面が壁。
2.T高士輪輪											
24-1	四脚輪輪 11層	2T E3gr 11層	良好	褐色 無色	2mm 以下の砂粒 を含む	②(29.8) ③(12.7)	-	-	-	・軽ハケ ・鋸めハケ	斜面して開口する。 反転復元。
24-2	四脚輪輪 11層	2T K3gr 11層	良好	に赤い褐色 無色	2.3mm 以下の砂粒 を含む	②(30.4)	-	-	-	・軽ハケ ・鋸めハケ	斜面して開口する。
24-3	四脚輪輪 11層	2T E3gr 11層	良好	褐色 無色	3mm 以下の砂粒 を含む	②(16.8)	-	-	-	・軽ハケ ・鋸めハケ	斜面して開口する。
24-4	四脚輪輪 11層	2T K3gr 11層	良好	褐色 無色	1mm 以下の砂粒 を含む	②(6.4)	-	-	-	・軽ハケ ・鋸めハケ	斜面して開口する。
24-5	四脚輪輪 11層	2T E3gr 11層	良好	褐色 無色	1mm 以下の砂粒 を含む	②(4.3)	-	-	-	・軽ハケ ・鋸めハケ	斜面して開口する。
24-6	四脚輪輪 2層	2T F3gr 2層	良好	褐色 無色	1.5mm 以下の砂粒 を含む	②(8.7)	-	-	-	・軽ハケ ・鋸めハケ	山形端面の外側を強く削除ナシし、凹凸状を呈する。 斜面して削りまくる。
24-7	四脚輪輪 Eゴムツレ	2T E2gr Eゴムツレ	良好	褐色 無色	1mm 以下の砂粒 を含む	②(7.5)	-	-	-	・軽ハケ ・鋸めハケ	山形端面の外側を強く削除ナシし、凹凸状を呈する。 直角で削りまくる。
24-8	四脚輪輪 11層	2T E3gr 11層	良好	に赤い褐色 無色	1.5mm 以下の砂粒 を含む	②(13.3)	-	-	-	・軽ハケ ・鋸めハケ	タガと円形スカシを残す。
24-9	四脚輪輪 11層	2T E3gr 11層	良好	に赤い褐色 無色	2.5mm 以下の砂粒 を含む	②(8.3)	-	-	-	・オフホルナ ・底ハラキニ ・開口部ハク	タガと円形スカシを残す。
24-10	四脚輪輪 11層	2T E3gr 11層	良	に赤い褐色 無色	1.5mm 以下の砂粒 を含む	②(17.0)	・円柱工具で タクタク無ナ	-	-	-	再現の過程は先端りを付する。 反転復元。
24-11	四脚輪輪 4層	2T E3gr 4層	良好	に赤い褐色 無色	1.5mm 以下の砂粒 を含む	②(16.1)	・円柱工具で タクタク無ナ	-	-	-	再現の過程は先端りを付する。 反転復元。
24-12	四脚輪輪 11層	2T K3gr 11層	良好	褐色 無色	1.5mm 以下の砂粒 を含む	②(12.5)	・円柱工具で タクタク無ナ ・円柱工具で タクタク無ナ	-	-	-	端部の断面は先端りを呈する。
24-13	四脚輪輪 4層	2T E2gr 4層	良好	褐色 無色	2mm 以下の砂粒 を含む	②(7.3)	・円柱工具で タクタク無ナ ・円柱工具で タクタク無ナ	-	-	-	端部の断面は先端りを呈する。
3.T高士輪輪											
26-1	四脚輪輪 (2段)	3T G1-G2gr 3層	良	褐色 無色	3mm 以下の砂粒 を含む	②26.8 ③(16.6) ④43.5	・円柱工具で タクタク無ナ ・円柱工具で タクタク無ナ	・円柱工具でタクタク無ナ ・鋸めハケ	・鋸めハケ ・鋸めハケ	断面に2方の円形スカシを残す。 円柱端部の内外面を削除ナシする。 基礎盤根復元。	
26-2	四脚輪輪 3層	3T G2gr 3層	良好	褐色 無色	2mm 以上の砂粒 を含む	②(7.1)	-	-	-	・軽ハケ ・鋸めハケ	斜面して開口する。
26-3	四脚輪輪 2層	3T G6gr 2層	良	に赤い褐色 無色	1.5mm 以下の砂粒 を含む	②(7.7)	-	-	-	・軽ハケ ・鋸めハケ	斜面して削りまくる。
26-4	四脚輪輪 3層	3T G4gr 3層	良	に赤い褐色 無色	1mm 以下の砂粒 を含む	②(4.0)	-	-	-	・軽ハケ ・鋸めハケ	斜面して削りまくる。
26-5	四脚輪輪 3層	3T G2gr 3層	良好	褐色 無色	1mm 以下の砂粒 を含む	②(12.6)	-	-	-	・軽ハケ ・鋸めハケ	斜面して削りまくる。
26-6	四脚輪輪 3層	3T G4gr 3層	良	褐色 無色	1.5mm 以下の砂粒 を含む	②(8.5)	-	-	-	・軽ハケ ・鋸めハケ	斜面して削りまくる。
26-7	四脚輪輪 1層	3T G8gr 1層	良好	に赤い褐色 無色	1mm 以下の砂粒 を含む	②(3.7)	-	-	-	・軽ハケ ・鋸めハケ	斜面して削りまくる。
26-8	四脚輪輪 3層	3T G2gr 3層	良好	褐色 無色	1.5mm 以下の砂粒 を含む	②(9.1)	-	-	-	・軽ハケ ・鋸めハケ	斜面が直角して削りまくる。
27-9	四脚輪輪 (2段)	3T G2gr 3層	良好	褐色 無色	3mm 以下の砂粒 を含む	②(22.7)	・円柱工具で タクタク無ナ ・鋸めハケ	・円柱工具でタクタク無ナ ・鋸めハケ	-	上方の円形スカシを上段・下段で直交するように 斜面が直角して削りまくる。	
27-10	四脚輪輪 (2段)	3T G2gr 3層	良好	褐色 無色	4mm 以下の砂粒 を含む	②(16.9)	-	-	-	・オフホルナ ・鋸めハケ	上方の円形スカシを上段・下段で直交するように 斜面が直角して削りまくる。
27-11	四脚輪輪 (2段)	3T G2gr 3層	良	褐色 無色	5mm 以下の砂粒 を含む	②(15.7)	-	-	-	・軽ハケ ・鋸めハケ	上方の円形スカシを上段・下段で直交するように 斜面が直角して削りまくる。
27-12	四脚輪輪 (2段)	3T G2gr 3層	良	褐色 無色	4.5mm 以下の砂 粒を含む	②(14.6)	-	-	-	・オフホルナ ・鋸めハケ	上方の円形スカシを上段・下段で直交するように 斜面が直角して削りまくる。
27-13	四脚輪輪 3層	3T G2gr 3層	良好	褐色 無色	2mm 以下の砂粒 を含む	②(22.3)	-	-	-	・オフホルナ ・鋸めハケ	断面に2方の円形スカシを残す。
27-14	四脚輪輪 3層	3T G2gr 3層	に赤い褐色 無色	1mm 以下の砂粒 を含む	②(14.0)	-	-	-	-	・オフホルナ ・鋸めハケ	断面に2方の円形スカシを施す。
28-15	四脚輪輪 3層	3T G2gr 3層	良好	褐色 無色	1.5mm 以下の砂粒 を含む	②(10.0)	-	-	-	・オフホルナ ・鋸めハケ	断面に2方の円形スカシを施す。
28-16	四脚輪輪 3層	3T G7gr 3層	良好	褐色 無色	2mm 以下の砂粒 を含む	②(10.1)	-	-	-	・軽ハケ ・鋸めハケ	断面に2方の円形スカシを施す。
28-17	四脚輪輪 3層	3T G2gr 3層	良好	褐色 無色	5mm 以下の砂粒 を含む	②(13.0)	-	-	-	・軽ハケ ・鋸めハケ	断面に2方の円形スカシを施す。
28-18	四脚輪輪 3層	3T G2gr 3層	良好	褐色 無色	2mm 以下の砂粒 を含む	②(11.0)	-	-	-	・ナメ ・鋸めハケ	断面に2方の円形スカシを施す。
28-19	四脚輪輪 3層	3T G6gr 3層	良好	褐色 無色	2.5mm 以下の砂粒 を含む	②(6.0)	-	-	-	・オフホルナ ・鋸めハケ	断面に2方の円形スカシを施す。

① 四脚輪輪
 () : 直接確認
 () : 認定確認基準
 * : 既存種及び既存品
 ** : 2次品
 - : 存在しない部位

機器名	器種	出土位置	地盤	測定上寸法(表面下限)	測定下限	法量	測定(m) 円形スカリ(上段:内面 下段:外側)			備考
							基底高	第1段目	第2段目	
28-20 円筒埴輪 3脚	3T G2gr	良好	褐色 黒色	2mm 以下の砂粒 を含む	② (7.8)	—	- オサエ後ナゲ - 削めハケ後ナゲ	—	側部に2方の円形スカリを施す。 反転復元。	
28-21 円筒埴輪 2-3脚	3T G2gr	良	褐色 黒色	2mm 以下の砂粒 を含む	① (8.0)	門形状工具で タキヤシナゲ	- オサエ後ナゲ - 削めハケ後ナゲ	—	側部に2方の円形スカリを施す。 反転復元。	
28-22 円筒埴輪 3脚	3T G6gr	良好	褐色 黒色 明るい褐色	2mm 以下の砂粒 を含む	② (7.9)	—	- オサエ後ナゲ - 削めハケ	—	側部に2方の円形スカリを施す。	
28-23 円筒埴輪 3脚	3T G4gr	良	褐色 黒色	1mm 以下の砂粒 を含む	② (7.9)	—	- ナゲ - 次回整備ハケ?	—	側部に2方の円形スカリを施す。	
29-24 円筒埴輪 3脚	3T G2gr	良	明るい褐色 黒色	1.5mm 以下の砂粒 を含む	② (12.8)	—	- オサエ後ナゲ - 削めハケ	—	反転復元。	
29-25 円筒埴輪 3脚	3T G2gr	良	褐色 黒色	2mm 以下の砂粒 を含む	② (13.0)	門形状工具で タキヤシナゲ	- 円筒状工具で タキヤシナゲ	—	反転復元。	
29-26 円筒埴輪 3脚	3T G2gr	良	褐色 黒色	2mm 以下の砂粒 を含む	② (14.7)	門形状工具で タキヤシナゲ	- ナゲ - 削めハケ	—	反転復元。	
29-27 円筒埴輪 3T G6gr	良好	明るい褐色 黒色	1mm 以下の砂粒 を含む	② (12.6)	—	門形状工具で タキヤシナゲ	- オサエ後ナゲ - 削めハケ	—	反転復元。	
29-28 円筒埴輪 3脚	3T G6gr	良好	褐色 明るい褐色	1mm 以下の砂粒 を含む	② (7.4)	—	- ナゲ - 一次清整ハケ	—	側部の側ハケは誤認する(田植側ハケ)。	
29-29 円筒埴輪 3脚	3T G6gr	良	褐色 明るい褐色	2.5mm 以下の砂粒 を含む	② (15.4)	門形状工具で タキヤシナゲ	—	—	端部を丸くおさめる。 反転復元。	
29-30 円筒埴輪 3脚	3T G2gr	良好	褐色 黒色	2mm 以下の砂粒 を含む	② (11.0)	門形状工具で タキヤシナゲ - オサエ後削め ハケ?	—	—	端部の前面は丸削りを呈する。 反転復元。	
29-31 円筒埴輪 3T G5gr	良好	明るい褐色 黒色	1mm 以下の砂粒 を含む	② (11.9)	門形状工具で タキヤシナゲ - オサエ後ナゲ	—	—	—	端部の断面は丸削りを呈する。	
29-32 円筒埴輪 3脚	3T G2gr	良好	明るい褐色 黒色	2.5mm 以下の砂粒 を含む	② (8.4)	門形状工具で タキヤシナゲ - オサエ後ナゲ	—	—	端部を丸くおさめる。	
29-33 円筒埴輪 3脚	3T G5gr	良	褐色 黒色	3mm 以下の砂粒 を含む	② (7.4)	オサエ後ナゲ - タキヤシナゲ	—	—	端部に丁字頭を持つ。	
29-34 円筒埴輪 3脚	3T G7gr	良	明るい褐色 黒色	3mm 以下の砂粒 を含む	② (5.3)	—	オサエ後ナゲ - タキヤシナゲ	—	端部を丸くおさめる。	
29-35 円筒埴輪 3脚	3T G5gr	良好	褐色 黒色	0.5mm 以下の砂粒 を含む	② (4.3)	—	- オサエ後ナゲ - タキヤシナゲ	—	端部に半圓形を持つ。	
29-36 円筒埴輪 3脚	3T G2gr	良好	褐色 黒色	2mm 以下の砂粒 を含む	② (12.2)	門形状工具で タキヤシナゲ - 円筒状工具で タキヤシナゲ	—	—	端部の断面は丸削りを呈する。	
4T付土器類										
32-1 円筒地輪 2脚	4T 12gr	良	褐色 黒色	1mm 以下の砂 粒を含む	② (2.0)	門形状工具で タキヤシナゲ	- オサエ後ナゲ - 削めハケ後ナゲ - 削めハケ	—	側部に2方の円形スカリを施す。ナゲが2段階められたと見られる。	
32-2 円筒地輪 2脚	4T 13gr	やや不良	黒褐色 に多い褐色	5mm 以下の砂粒 を含む	② (1.8)	—	- ナゲ - 削めハケ	—	側部に2方の円形スカリを施す。ナゲが2段階められたと見られる。	
32-3 円筒地輪 2脚	4T 13gr	良	黒褐色 に多い褐色	1mm 以下の砂粒 を含む	② (7.8)	—	—	—	側部に2方の円形スカリを施す。	
32-4 円筒地輪 2脚	4T 13gr	良好	黒褐色 に多い褐色	1mm 以下の砂粒 を含む	② (7.2)	—	—	—	側部に2方の円形スカリを施す。	
32-5 円筒地輪 2脚	4T 15gr	良好	黒褐色 に多い褐色	1mm 以下の砂粒 を含む	② (5.9)	—	—	—	側部に2方の円形スカリを施す。	
32-6 円筒地輪 SD02 2脚	4T 13gr	良好	黒褐色 に多い褐色	1mm 以下の砂粒 を含む	② (4.0)	—	—	—	側部に2方の円形スカリを施す。	
32-7 円筒地輪 1脚	4T 14gr	良好	黒褐色 に多い褐色	1mm 以下の砂粒 を含む	② (3.7)	—	—	—	側部に2方の円形スカリを施す。	
32-8 円筒車輪 2脚	4T 15gr	良好	黒褐色 に多い褐色	1mm 以下の砂粒 を含む	② (4.1)	—	—	—	側部に2方の円形スカリを施す。	
32-9 円筒車輪 SD02 1脚	4T 13gr	良好	黒褐色 に多い褐色	2mm 以下の砂粒 を含む	② (5.6)	—	- オサエ後ナゲ - 一次清整ハケ	—	タキヤシナゲスカリが認められる。	
32-10 円筒車輪 2脚	4T 13gr	良好	明るい褐色 黒色	3.5mm 以下の砂 粒を含む	② (6.2)	門形状工具で タキヤシナゲ	—	—	端部に面をくる。	
32-11 円筒車輪 2脚	4T 13gr	良	褐色 黒色	1mm 以下の砂粒 を含む	② (2.8)	—	- ナゲ? - ナゲ?	—	端部の断面は丸削りを呈する。	
5T付土器類										
34-1 円筒埴輪 (3脚)	5T	良好	赤褐色 黒色	1mm 以下の砂 粒を含む	② (3.8) ② (2.7)	—	- ナゲ - 削めハケ日系 - 削めハケ日系	—	側部の断面は丸削りを呈する。(4脚目付) 側部の側ハケは誤認する(田植側ハケ) 山根溶接箇所にて金の油墨が認められる。	
34-2 円筒埴輪	5T 2Gr	良好	明るい褐色 黒色	2mm 以下の砂粒 を含む	② (12.2) ② (11.5)	—	- 脱式工具でのナゲ - 削めハケ	—	側部工具での ナゲ - 削めハケ	
34-3 円筒埴輪	5T 2Gr	良好	明るい褐色 黒色	2mm 以下の砂粒 を含む	② (12.2) ② (10.7)	—	—	—	側部工具での ナゲ - 削めハケ	
34-4 円筒埴輪	5T 2Gr	良好	明るい褐色 黒色	1mm 以下の砂粒 を含む	② (5.1)	—	—	—	側部工具での ナゲ - 削めハケ	
34-5 円筒埴輪 (3脚)	5T 2Gr	良好	赤褐色 黒色	1mm 以下の砂粒 を含む	② (10.0)	—	- 佛状工具 - 削めハケ - 削めハケ	—	2方向の円形通孔を上段・下段で直交するように配置。 側部の上段。	

①: 田植側付 (中: 田植側面面) ②: 面高または残存高
—: 未測定及び既往記述
■: 2次測定
□: 併存しない部位

編 番 号	器 種	自付装置	被 成	色 下地 上地 下地 下地	調 理 方 法 下地 下地 下地	施 工	法 量 (cm)	仕事 (cm) 調理器具 (上段: 内深 下段: 外側)				備 考	
								高 度 部	割 配		口 袋 部		
									第 1 段 頁	第 2 段 頁			
34-6 内筒端輪 5T 3Gr	良好	軽 度	2mm 以下の砂粒 を多く含む	③(142)	—	—	—	—	・ナメ ・縫ハケ目	・ナメ ・縫ハケ目	—	墨を吸収した状態は、白細胞の可塑性もある。 タグに吸収及びタグを工具後の痕跡あり。 白細胞の痕跡が認められる。	
34-7 内筒端輪 5T	やや不良	軽 度	2mm 以下の砂粒 を多く含む	③(131)	—	—	—	・不明	・縫ハケ目	・縫ハケ目	—	内筒端輪の工具部がある。 34-8 と同一形状の可能性がある。 反転使用。	
34-8 内筒端輪 5T 2Gr	やや良好	軽 度	2mm 以下の砂粒 を多く含む	③(137)	—	—	—	・ナメ ・縫ハケ目	・縫ハケ目	・縫ハケ目	—	内筒端輪の工具部あり。 34-7 と同 5T の可塑性がある。 反転使用。	
34-9 内筒端輪 5T 3Gr	良好	軽 度	1mm 程度の砂粒 を多く含む	③(112)	—	—	—	・縫ハケ目	・縫ハケ目	・縫ハケ目	—	内筒端輪の工具部は、 脱脂外側には 1mm 程度の縫ハケ目が認められる。	
35-10 内筒端輪 5T 3Gr	良好	軽 度	2mm 以下の砂粒 を多く含む	③(12)	—	—	—	・ナメ ・ナメ	・縫ハケ目	・縫ハケ目	—	白筒端輪による工具部の可塑性もある。 工具部は、工具部にタグで形成した他の痕跡か。 タグは工具部にタグで形成した他の痕跡か。	
35-11 内筒端輪 5T 3Gr	良好	軽 度	1mm 程度の砂粒 を多く含む	③(98)	—	—	—	・縫ハケ目	・縫ハケ目	・縫ハケ目	—	内筒端輪の工具部は、 脱脂外側には 1mm 程度の縫ハケ目が認められる。	
35-12 内筒端輪 5T 2Gr	良好	軽 度	2mm 以下の砂粒 を多く含む	③(11)	—	—	—	・縫ハケ目	・縫ハケ目	・縫ハケ目	—	内筒端輪の工具部は、 脱脂外側には 1mm 程度の縫ハケ目が認められる。	
35-13 内筒端輪 5T 2Gr	良好	軽 度	2mm 以下の砂粒 を多く含む	③(1K3)	—	—	—	・ナメ ・縫ハケ目	・ナメ ・縫ハケ目	・ナメ ・縫ハケ目	—	内筒端輪の工具部は、 脱脂外側には 1mm 程度の縫ハケ目が認められる。	
35-14 内筒端輪 5T 3Gr	良好	軽 度	1mm 程度の砂粒 を多く含む	③(152)	—	—	—	・ナメ ・縫ハケ目	・ナメ ・縫ハケ目	・ナメ ・縫ハケ目	—	内筒端輪の工具部は、 脱脂外側には 1mm 程度の縫ハケ目が認められる。 内筒端輪の工具部は、 脱脂外側には 1mm 程度の縫ハケ目が認められる。	
35-15 内筒端輪 5T 3Gr	良好	軽 度	2mm 以下の砂粒 を多く含む	③(11)	—	—	—	・縫ハケ目	・縫ハケ目	・縫ハケ目	—	内筒端輪の工具部は、 脱脂外側には 1mm 程度の縫ハケ目が認められる。	
35-16 内筒端輪 5T 3Gr	良好	軽 度	1mm 程度の砂粒 を多く含む	③(76)	—	—	—	・ナメ ・縫ハケ目	・ナメ ・縫ハケ目	・ナメ ・縫ハケ目	—	内筒端輪の工具部は、 脱脂外側には 1mm 程度の縫ハケ目が認められる。	
35-17 形象端輪 (?)	良好	浅 度	3mm 以下の砂粒 をやや含む	③(21)	—	—	—	・縫ハケ目	・縫ハケ目	・縫ハケ目	—	形象端輪は半球型。 底面第 2 段めに何らかの取付痕が認められる。 底面端輪がタグまでの中間が内筒端輪にてて長い。 反転使用。	
5T 周辺端												—	
37-1 内筒端輪 6T 3Gr	やや不良	軽 度	1mm 以下の砂粒 をややすに含む	③(31.3)	—	—	—	・板柱工具 ・板柱工具 ・板柱工具	・板柱工具 ・板柱工具 ・板柱工具	・ユビオキ ・板柱工具 ・板柱工具	—	2 方角の内筒端輪と工具部、下段で直角するように配置。 板柱工具は吸収工具でのナメによって溶けている。 工具部は、工具部にタグで形成した他の痕跡か。	
37-2 内筒端輪 6T 3Gr	良好	軽 度	1mm 以下の砂粒 を多く含む	③(31.3)	—	—	—	・ナメ ・縫ハケ目	・ナメ ・縫ハケ目	・ナメ ・縫ハケ目	—	内筒端輪の工具部は、 脱脂外側にはタグで形成した他の痕跡か。	
38-3 内筒端輪 6T 3Gr	良好	軽 度	1mm 以下の砂粒 をややすに含む	③(32.6)	—	—	—	・ナメ ・縫ハケ目	・ナメ ・縫ハケ目	・ナメ ・縫ハケ目	—	内筒端輪の工具部は、 脱脂外側にはタグで形成した他の痕跡か。	
38-4 内筒端輪 6T 4Gr	良好	軽 度	2mm 以下の砂粒 を多く含む	③(26.7)	—	—	—	・ナメ ・縫ハケ目	・ナメ ・縫ハケ目	・ナメ ・縫ハケ目	—	内筒端輪は板柱工具によるナメが認められる。 反転使用。	
38-5 内筒端輪 6T 3Gr	良好	軽 度	2mm 以下の砂粒 を多く含む	③(32)	—	—	—	・ナメ ・縫ハケ目	・ナメ ・縫ハケ目	・ナメ ・縫ハケ目	—	内筒端輪は板柱工具によるナメが認められる。 反転使用。	
38-6 内筒端輪 6T 3Gr	良好	軽 度	1.5mm 以下の砂粒 をやや含む	③(36.9)	—	—	—	・ナメ ・縫ハケ目	・ナメ ・縫ハケ目	・ナメ ・縫ハケ目	—	内筒端輪は板柱工具によるナメが認められる。 反転使用。	
38-7 内筒端輪 6T 3Gr	良好	軽 度	2mm 以下の砂粒 を多く含む	③(36.4)	—	—	—	・不明	・縫ハケ目	・縫ハケ目	—	内筒端輪は板柱工具によるナメが認められる。 反転使用。	
38-8 内筒端輪 6T 3Gr	良好	軽 度	1.5mm 以下の砂粒 を多く含む	③(36.0)	—	—	—	・ナメ ・縫ハケ目	・ナメ ・縫ハケ目	・ナメ ・縫ハケ目	—	内筒端輪は板柱工具によるナメが認められる。 反転使用。	
38-9 内筒端輪 6T 3Gr	良好	軽 度	1.5mm 以下の砂粒 を多く含む	③(6.9)	—	—	—	・ナメ ・縫ハケ目	・ナメ ・縫ハケ目	・ナメ ・縫ハケ目	—	内筒端輪は板柱工具によるナメが認められる。 反転使用。	
38-10 内筒端輪 6T 3Gr	良好	軽 度	1.5mm 以下の砂粒 を多く含む	③(6.2)	—	—	—	・ナメ ・縫ハケ目	・ナメ ・縫ハケ目	・ナメ ・縫ハケ目	—	内筒端輪は板柱工具によるナメが認められる。 反転使用。	
38-11 内筒端輪 6T 3Gr	良好	軽 度	3mm 以下の砂粒 をややすに含む	③(6.4)	—	—	—	・ナメ ・縫ハケ目	・ナメ ・縫ハケ目	・ナメ ・縫ハケ目	—	内筒端輪は板柱工具によるナメが認められる。	
38-12 内筒端輪 6T 3Gr	良好	軽 度	1.5mm 以下の砂粒 を多く含む	③(n.0)	—	—	—	・ナメ ・縫ハケ目	・ナメ ・縫ハケ目	・ナメ ・縫ハケ目	—	内筒端輪は板柱工具によるナメが認められる。	
38-13 内筒端輪 6T 3Gr	良好	軽 度	1.5mm 以下の砂粒 を多く含む	③(7.0)	—	—	—	・ナメ ・縫ハケ目	・ナメ ・縫ハケ目	・ナメ ・縫ハケ目	—	内筒端輪は板柱工具によるナメが認められる。	
38-14 内筒端輪 6T 3Gr	良好	軽 度	3mm 以下の砂粒 を多く含む	③(19.2)	—	—	—	・縫ハケ目 ・縫ハケ目	・縫ハケ目 ・縫ハケ目	・縫ハケ目 ・縫ハケ目	—	内筒端輪は板柱工具によるナメが認められる。 工具部が溶けている。	
38-15 内筒端輪 6T 3Gr	良好	軽 度	3mm 以下の砂粒 を多く含む	③(14.2)	—	—	—	・縫ハケ目 ・縫ハケ目	・縫ハケ目 ・縫ハケ目	・縫ハケ目 ・縫ハケ目	—	内筒端輪は板柱工具によるナメが認められる。 タグは吸い取るより下方に溶けている。	
38-16 内筒端輪 6T 3Gr	良好	軽 度	3mm 以下の砂粒 を多く含む	③(12.1)	—	—	—	・ナメ ・縫ハケ目	・ナメ ・縫ハケ目	・ナメ ・縫ハケ目	—	内筒端輪は板柱工具によるナメが認められる。 工具部が溶けている。	
38-17 内筒端輪 6T 3Gr	良好	軽 度	3mm 以下の砂粒 を多く含む	③(14.8)	—	—	—	・ナメ ・縫ハケ目	・ナメ ・縫ハケ目	・ナメ ・縫ハケ目	—	内筒端輪は板柱工具によるナメが認められる。	
38-18 内筒端輪 6T 3Gr	良好	軽 度	3mm 以下の砂粒 を多く含む	③(10.5)	—	—	—	・ナメ ・縫ハケ目 ・縫ハケ目	・ナメ ・縫ハケ目 ・縫ハケ目	・ナメ ・縫ハケ目 ・縫ハケ目	—	内筒端輪は板柱工具によるナメが認められる。	
38-19 内筒端輪 6T 3Gr	良好	軽 度	1.5mm 以下の砂 粒を含む	③(16.2)	—	—	—	・ナメ ・縫ハケ目	・ナメ ・縫ハケ目	・ナメ ・縫ハケ目	—	3 段の内筒端輪底面が認められる。 タグ下の外筒ハケ目はタグ剥離時にナメが剥落する。 上下剥離とも内筒端輪が認められる。	

(1) 口縫端輪 (2) 無端端輪 (3) 伸縮端輪 (4) 伸縮端輪

— 伸縮端輪

— 伸縮端輪

番 号	種 類	出上位置	周 波	色 上段:西面 下段:外露	調 整 部	法 量 (cm)	法量 (cm) 蝶卸式 (上段: 内面 下段: 外露)			備 考
							基 本 高	第 一 段	第 二 段	
39-20	円筒端輪	6T 3Gr	良好	褐色 褐色	1mm 程度の移動 を多く含む	③(38.8)	-	・ヘラケタリ後 ・削めハサツ	・ヘラケタリ後 ・削めハサツ ・不明	山側にした場合は剥離の可能性もある。 円筒孔が認められる。 反転鏡式。
39-21	円筒端輪	6T 3Gr	良好	褐色 褐色	1mm 程度の移動 を多く含む	③(7.4)	-	・被状工具類 ・被状工具類	-	タガ下方にヘラ形状工具が見られる。 反転鏡式。
39-22	円筒端輪	6T 3Gr	良好	褐色 褐色	2mm 以下の移動 を多く含む	③(6.6)	-	・ナシ ・削めハサツ	・削めハサツ ・削めハサツ	内面は表面が美しい。 指紋跡はタガ端付近。 反転鏡式。
39-23	円筒端輪	6T 3Gr	良好	小明 褐色	1mm 以下の移動 を多く含む	③(4.6)	-	・不明 ・ナシ ・深削形	-	-
39-24	円筒端輪	6T 3Gr	良好	褐色 褐色	1.5mm 以下の移動 を多く含む	③(38.0)	-	・削めハサツ ・削めハサツ	・削めハサツ ・削めハサツ ・削めハサツ	反転鏡式。
39-25	円筒端輪	6T 3Gr	良好	褐色 褐色	1.5mm 程度の移動 を多く含む	④(38.7)	-	・削めハサツ ・削めハサツ	・削めハサツ ・削めハサツ	透孔の痕跡が認められる。
39-26	円筒端輪	6T 3Gr	良好	褐色 褐色	1mm 程度の移動 を多く含む	③(44.8)	-	・削めハサツ ・削めハサツ	・削めハサツ ・削めハサツ ・削めハサツ	タガが欠損。 落、落、落。
39-27	円筒端輪	6T 3Gr	良好	褐色 褐色	1mm 程度の移動 を多く含む	③(7.7)	-	・ヘラケタリ ・削めハサツ	・ヘラケタリ ・削めハサツ	2段目端部とした場合は山側部の可能性もある。
40-28	円筒端輪	6T 3Gr	良好	褐色 褐色	1mm 程度の移動 を多く含む	③(11.1)	-	・被状工具類 ・DC鏡	-	円筒端部が認める。 斜削端部が認められる。
40-29	円筒端輪	6T 3Gr	良好	褐色 褐色	2mm 以下の移動 を多く含む	③(21.3)	-	・被状工具類 ・DC鏡	・削めハサツ ・削めハサツ	島底層では底面底面側のハサツが残存している。 鋼管内部のハサツは外側のものに比べ非常に濃い。 内形跡が認められる。
40-30	円筒端輪	6T 3Gr	良好	褐色 褐色	1mm 程度の移動 を多く含む	③(7.5)	-	・被状工具類 ・DC鏡 ・削めハサツ ・削めハサツ	-	底端部が比較的の平らになる。 反転鏡式。
40-31	円筒端輪	6T 3Gr	良好	褐色 褐色	1mm 程度の移動 を多く含む	③(36.9) ⑤(15.7)	-	・ヘラケタリ後 ・削めハサツ ・削めハサツ ・削めハサツ	-	底端部はアラで底端になる。 反転鏡式。
40-32	円筒端輪	6T 3Gr	良好	褐色 褐色	2mm 以下の移動 を多く含む	③(26.0) ⑤(12.6)	-	-	-	底端部端部はナシで底端になる。 反転鏡式。
40-33	円筒端輪	6T 3Gr	良好	褐色 褐色	1mm 程度の移動 を多く含む	③(8.8)	-	・被状工具類 ・DC鏡	-	斜削工具上部が認める。
40-34	円筒端輪	6T 3Gr	良好	褐色 褐色	1mm 程度の移動 を多く含む	③(1.6)	-	・被状工具類 ・DC鏡	-	斜削工具上部が認める。
40-35	円筒端輪	6T 3Gr	良好	褐色 褐色	1mm 程度の移動 を多く含む	③(8.1)	-	・ナシ ・削めハサツ ・削めハサツ	-	底端部は平らであり、底端が残る。
???:上端部										
42-1	円筒端輪	7T 2Gr	良好	褐色 褐色	1.5mm 以下の移動 を多く含む	③(30.1) ⑤(17.1)	-	-	・削めハサツ ・削めハサツ	山側部にヒラマツは底面が認められる。 反転鏡式。
42-2	円筒端輪	7T 2Gr	良好	褐色 褐色	3mm 以下の移動 を多く含む	③(25.5) ⑤(8.9)	-	-	・小明 ・削めハサツ	山側部は底面が外観する。 全体的に底面が美しい。 反転鏡式。
42-3	円筒端輪	7T 5Gr	良好	褐色 褐色	1mm 程度の移動 を多く含む	③(14.5)	-	-	・削めハサツ ・削めハサツ	底端部端部はナシで底端になる。 反転鏡式。
42-4	円筒端輪	7T 2Gr	良好	褐色 褐色	2mm 以下の移動 を多く含む	③(7.1)	-	-	・削めハサツ ・削めハサツ	斜削工具上部が認める。
42-5	円筒端輪	7T 2Gr	良好	明赤褐色 褐色	1mm 以下の移動 を多く含む	③(1.9)	-	-	・削めハサツ ・削めハサツ ・削めハサツ	斜削工具上部が認める。
42-6	円筒端輪	7T	良好	に赤い跡 に赤い跡	2mm 以下の移動 を多く含む	③(4.9)	-	-	・削めハサツ ・削めハサツ ・削めハサツ	円筒端部外端を西取りしている。
42-7	円筒端輪	7T 2Gr	良好	褐色 褐色	1mm 程度の移動 を多く含む	③(2.7)	-	-	・削めハサツ ・削めハサツ ・削めハサツ	圓筒端部が認める。
42-8	円筒端輪	7T 4Gr	良好	褐色 褐色	1mm 程度の移動 を多く含む	③(2.1)	-	-	・削めハサツ ・削めハサツ	内筒の底ハサツは被削する (即接縫ハサツ)。
42-9	円筒端輪	7T 2Gs	良好	褐色 褐色	2mm 以下の移動 を多く含む	③(8.0)	-	・ヘラケタリ ・削めハサツ	・ナシ ・削めハサツ?	-
42-10	円筒端輪	7T 2Gr	良好	明赤褐色 褐色	1mm 程度の移動 を多く含む	③(9.1)	-	-	・削めハサツ ・削めハサツ ・削めハサツ	第2段目端部とした場合は内筒部の可塑性もある。 円筒端部の底面が認められる。 底面が美しい。 反転鏡式。
42-11	円筒端輪	7T 2Gr	良好	明赤褐色 褐色	1mm 以下の移動 を多く含む	③(2.6)	-	・被状工具類 ・不明	・ナシ ・削めハサツ	第2段目端部とした場合は内筒部の可塑性もある。 円筒端部の底面が認められる。 底面が美しい。 反転鏡式。
42-12	円筒端輪	7T 2Gr	良好	褐色 褐色	2mm 以下の移動 を多く含む	③(7.9)	-	-	・ナシ ・削めハサツ	内筒端部の底面が認められる。 反転鏡式。
42-13	円筒端輪	7T 2Gr	良好	褐色 褐色	1mm 程度の移動 を多く含む	③(18.9)	-	-	・ナシ ・削めハサツ ・削めハサツ	第1段目端部とした場合は内筒部の可塑性もある。 円筒端部の底面が認められる。 底面が美しい。 反転鏡式。
42-14	円筒端輪	7T 2Gr	良好	に赤い跡 褐色	1mm 程度の移動 を多く含む	③(2.8)	-	・削めハサツ ・削めハサツ	・削めハサツ ・削めハサツ	内形端部の底面が認められる。 斜削工具上部が認める。
42-15	円筒端輪	7T 2Gr	良好	褐色 褐色	1mm 程度の移動 を多く含む	③(1.4)	-	・被状工具類 ・削めハサツ	・被状工具類 ・削めハサツ	底端部にした場合は剥離の可塑性もある。 底面が美しい。 反転鏡式。
42-16	円筒端輪	7T 2Gr	良好	明赤褐色 褐色	2mm 以下の移動 を多く含む	③(11.9)	-	-	・ナシ ・削めハサツ	内筒端部が認められる。 反転鏡式。
42-17	円筒端輪	7T 2Gr	良好	明赤褐色 明赤褐色	1mm 程度の移動 を多く含む	③(8.7)	-	・ナシ ・削めハサツ	・ナシ ・削めハサツ ・削めハサツ	内筒端部が剥離した場合は剥離の可塑性もある。 反転鏡式。
42-18	円筒端輪	7T 2Gr	良好	明赤褐色 明赤褐色	1mm 程度の移動 を多く含む	③(10.8)	-	・被状工具類 ・被状工具類	・被状工具類 ・削めハサツ ・削めハサツ	内形端部の底面が認められる。
42-19	円筒端輪	7T 2Gr	良好	明赤褐色 褐色	1mm 程度の移動 を多く含む	③(9.9)	-	-	・ナシ ・削めハサツ	内形端部の底面が認められる。

①: 1回転
 ②: 2回転
 ③: 3回転
 ④: 4回転
 ⑤: 5回転
 ■: 1回転以上
 ▲: 2回転以上
 ▲▲: 3回転以上
 ▲▲▲: 4回転以上
 ▲▲▲▲: 5回転以上

標 番 号	基 材	出 土 位 置	後 成	色 調 上段：内面 下段：外面	砂 粒 上	法 量 (cm)	法量 (cm) 器面清拭 (上段：内面、下段：外周)			備 考
							明 部		暗 部	
							第1段目	第2段目	口縁部	
43-20	円筒埴輪	7T 2Gr	良好	青灰色 明褐色	2mm 以下の砂粒 を多く含む	③(20.7)	・建設工具類 ・建設工具類 ・建設工具類	—	—	網孔に円形透孔の痕跡認められる。 側部外周にまで建設工具類が残っている。 反転復元。
43-21	円筒埴輪	7T 2Gr	良好	青灰色 明褐色	2mm 以下の砂粒 を多く含む	③(17.2)	・建設工具類 ・建設工具類	—	—	円形透孔の痕跡認められる。 反転復元。
43-22	円筒埴輪	7T 2Gr	良好	青灰色 明褐色	1mm 程度の砂粒 を多く含む	②(21.0) ③(18.1)	・ナガ ・植物山雀 ・植物のハケ目	—	—	品成透孔は半らにしようとする意図はない。 反転復元。
44-23	円筒埴輪	7T 2Gr	良好	青灰色 明褐色	1mm 程度の砂粒 を多く含む	②(21.0) ③(18.0)	・建設工具類 ・建設工具類 ・建設工具類	—	—	円形透孔認められる。 反転復元。
44-24	円筒埴輪	7T 2Gr	良好	青灰色 明褐色	1mm 程度の砂粒 を多く含む	②(18.0) ③(18.2)	・建設工具類 ・建設工具類 ・建設工具類	—	—	網孔に円形透孔が2方向認められる。 底端部にはユビオサニで調査。 反転復元。
44-25	円筒埴輪 (3段)	7T 2Gr	良好	青灰色 明褐色	1mm 程度の砂粒 を含む	②(26.1) ③(42.0)	・建設工具類 ・建設工具類 ・建設工具類 ・建設工具類	—	—	円形透孔を上段・下段で直交するように配置。 底端部にはユビオサニで調査。 反転復元。
44-26	円筒埴輪	7T 2Gr	良好	青灰色 明褐色	1mm 以下の砂粒 を含む	②(22.0) ③(28.5)	・建設工具類 ・建設工具類 ・建設工具類 ・建設工具類	—	—	円形透孔の痕跡認められる。 品成透孔はユビオサニで調査。 反転復元。
45-27	円筒埴輪	7T 4Gr	良好	青灰色 明褐色	2mm 以下の砂粒 を多く含む	②(18.0) ③(17.8)	・植物山雀 ・工具類	—	—	品成透孔は指でつまんで調査をおこなう。 反転復元。
45-28	円筒埴輪	7T 2Gr	良好	青灰色 明褐色	2mm 以下の砂粒 を多く含む	③(10.0)	・建設工具類 ・ナガ ・建設工具類 ・ナガ	—	—	—
45-29	円筒埴輪	7T 2Gr	良好	青灰色 明褐色	1mm 程度の砂粒 を含む	③(5.3)	・建設工具類 ・建設工具類	—	—	品成透孔を半らにする意図はない。
45-30	形象埴輪 (?)	7T 掘土中	良好	小腹色 赤褐色	1mm 程度の砂粒 を含む	③(18.0) ①: 口縁部 ②: 沈没または残存高 —: 2次焼物 —: 存在しない部位	・植物山雀 ・ナガ ・建設工具類 ・建設工具類 —	—	—	埴輪山雀は内面にならんと被削されるが、塗んだものの 可能性も考慮される。 本器は手でつまみ、底端の片側追跡のカギによる。

須恵器・土師器 遺物観察表

番号	器種	出土位置	施成	色 上段：内面 下段：外面	施土	重量 (kg)	形態・手法の特徴	備考
1 T出土遺物								
21-4	須恵器 子母取	TTC3 gr SD03	不真	灰白色 灰黑色	3mm以下の砂粒を少 し含む	①(24.9) ②(17.6) ③(60.0)	壺體 内外面ナメ 脚部足下 内面施ナメ 外側脚部足下 ハケ	裏面に8箇の穴が付く。 脚部上半に4方の三角形スカリを2段施す。 脚部の溝蓋は無孔。
22-5	須恵器 蓋	TTC3 gr SD03	不真	灰黄色 灰黑色	砂粒をあまり含まない。	①(10.5) ②(12.0) ③(66.0)	「T」字型 脚部 外側ハケ施ナメ 内面ナメナメ 外側脚部足下	反射鏡面
23-6	中土十輪器 耳	TTC6 gr SD01	良好	灰黄色 灰黑色	1mm以下の砂粒を少 し含む	②(5.4) ③(25.5)	壺體 内外面施ナメ 脚部 内面ナメ 外側脚部足下	体部の部分は舟形に向いて立ち上がる。 13世紀の削除と思われる。
2 T出土遺物								
25-14	須恵器 子母取	2TG3 gr	良	灰黑色 灰黑色	7mm以下の砂粒を合 む	①(10.5) ②(16.2) ③(63.0)	壺體 内外面ナメ 外側脚部足下 ハケ 脚部 内面ナメ	裏面に9箇の穴が付く。 脚部上半に6方の三角形スカリを施す。 脚部の溝蓋は無孔。
3 T出土遺物								
30-37	須恵器 F口付	3TG2 gr 3号	小良	灰白色 灰黑色	7mm以下の砂粒を少 し含む	①(17.0) ②(14.5) ③(56.2)	壺體 内外面ナメ 外側脚部足下 内面施ナメ 脚部足下 内面施ナメ	第3-10期の子宝が付く。 脚部下部と中央にそれぞれ4方の「舟形ス カリ」がある。
30-38	須恵器 子母取	3TG2 gr 3号	良	灰白色 灰黑色	7mm以下の砂粒を少 し含む	①(10.0)	壺體 足下 内外側タキ足ナメ	脚部の斜筋は無孔。
31-39	中土上輪器 耳	3TG3 gr 脚付	良	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	0.5mm以下の砂粒を少 し含む	①(14.9) ②(5.0) ③(2.7)	「L」字型 脚部 脚部足下 内面施ナメ	脚部横筋付近に溝蓋が付加して倒伏す る。赤色施色の痕跡ある。
31-40	中土上輪器 耳	3TG5 gr 脚付	良	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	0.5mm以下の砂粒を少 し含む	①(12.0) ②(2.6)	「L」字型 脚部 体部 内外面施ナメ	脚部全体から外側して立ち上がり倒伏す る。反射鏡面。
31-41	中土上輪器 耳	3TG5 gr 2号	良	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	0.5mm以下の砂粒を合 む	①(11.7) ②(1.9)*	口縁部 体部 内外側施ナメ	脚部全体から外側して立ち上がり倒伏す る。反射鏡面。
31-42	中土上輪器 耳	3TG5 gr 2号	良	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	0.5mm以下の砂粒を合 む	①(12.0) ②(2.7)	口縁部 体部 内外面施ナメ	脚部全体から外側して立ち上がり倒伏す る。反射鏡面。
31-43	中土上輪器 耳	3TG3 gr 2号	良	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	2mm以上の砂粒を少 し含む	②(8.0) ③(2.6)	体部 内外面施ナメ 外側脚部足下	豊富な施色で内赤外する。
31-44	中土上輪器 耳	3TG3 gr 2号	不真	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	0.5mm以下の砂粒を合 む	②(5.8) ③(1.9)	体部 内外面施ナメ 外側脚部足下	豊富な施色で内赤外する。
31-45	中土上輪器 耳	3TG5 gr SD012号	良	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	0.5mm以上の砂粒を少 し含む	②(6.9) ③(2.0)	体部 内外面施ナメ 外側脚部足下	豊富な施色で内赤外する。
31-46	中土上輪器 耳	3TG5 gr 2号	良	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	1mm以下の砂粒を合 む	②(6.0) ③(1.6)	体部 内外面施ナメ 外側脚部足下	豊富な施色で内赤外して立ち上がり倒伏す る。反射鏡面。
31-47	中土上輪器 耳	3TG4 gr 2号	良好	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	0.5mm以下の砂粒を合 む	②(5.1) ③(1.3)	体部 内外面施ナメ 外側脚部足下	豊富な施色から体部にかけて内赤して立ち 上がり倒伏する。
31-48	中土上輪器 耳	3TG3 gr 2号	良	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	0.5mm以下の砂粒を合 む	②(4.6) ③(1.7)	体部 内外面施ナメ 外側脚部足下	豊富な施色で内赤して立ち上がり倒伏する。
31-49	中土上輪器 耳	3TG5 gr 脚付	良	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	0.5mm以下の砂粒を少 し含む	②(5.1) ③(1.9)	体部 内外面施ナメ 外側脚部足下	豊富な施色で内赤して立ち上がり倒伏する。
31-50	中土上輪器 耳	3TG3 gr 2号	良	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	0.5mm以下の砂粒を合 む	②(5.9) ③(1.4)	「L」字型 脚部 脚部足下 内面施ナメ	豊富な施色から体部にかけて内赤して立ち 上がり倒伏する。
31-51	中土上輪器 耳	3TG3 gr 小瓶	良	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	0.5mm以下の砂粒を合 む	②(5.4) ③(2.1)	「L」字型 脚部 脚部足下 内面施ナメ	豊富な施色から体部にかけて内赤して立ち 上がり倒伏する。
31-52	中土上輪器 耳	3TG6 gr サブトレス	普通	灰褐色 灰褐色	1mm以下の砂粒を合 む	①(7.2) ②(4.4) ③(1.9)	「L」字型 脚部 脚部足下 内面施ナメ	豊富な施色から内赤して立ち上がり倒伏す る。底部深緑かに變化する。
31-53	中土上輪器 耳	3TG5 gr 2号	良	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	0.5mm以下の砂粒を合 む	②(5.1) ③(1.3)	「L」字型 脚部 脚部足下 内面施ナメ	豊富な施色から内赤して立ち上がり倒伏す る。底部深緑かに變化する。
31-54	中土上輪器 耳	3TG4 gr 2号	良	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	0.5mm以下の砂粒を少 し含む	②(7.7) ③(1.7)	「L」字型 脚部 脚部足下 内面施ナメ	豊富な施色で内赤して倒伏する。
31-55	中土上輪器 耳	3TG5 gr 2号	良	灰褐色 灰褐色	0.5mm以下の砂粒を合 む	②(7.5) ③(1.4)	「L」字型 脚部 脚部足下 内面施ナメ	豊富な施色で内赤して倒伏する。
31-56	中土上輪器 耳	3TG5 gr 2号	良	灰褐色 灰褐色	0.5mm以下の砂粒を合 む	②(7.5) ③(1.7)	「L」字型 脚部 脚部足下 内面施ナメ	豊富な施色で内赤して倒伏する。
31-57	中土上輪器 耳	3TG5 gr 2号	良	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	0.5mm以下の砂粒を合 む	②(5.2) ③(1.3)	口縁部 壺體 内外面施ナメ	豊富な施色で外側して倒伏する。
31-58	中土上輪器 耳	3TG4 gr 2号	良	灰褐色 灰褐色	1mm以下の砂粒を合 む	②(7.5) ③(1.8)	口縁部 壺體 内外面施ナメ 外側脚部足下	豊富な施色で内赤して倒伏する。
31-59	中土上輪器 耳	3TG5 gr 2号	良	灰褐色 灰褐色	0.5mm以下の砂粒を合 む	②(7.0) ③(1.1)	口縁部 壺體 内外面施ナメ 外側脚部足下	西壁に体部や内面内赤して立ち上がり倒伏す る。底部深緑かに變化する。
31-60	中土上輪器 耳	3TG3 gr 2号	良	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	1mm以下の砂粒を少 し含む	②(5.5) ③(1.6)	口縁部 壺體 内外面施ナメ	豊富な施色で内赤して倒伏する。
31-61	中土上輪器 耳	3TG5 gr 2号	良	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	0.5mm以下の砂粒を合 む	②(4.0) ③(1.1)	口縁部 壺體 内外面施ナメ	豊富な施色で内赤して倒伏する。
31-62	中土上輪器 耳	3TG5 gr 良	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	1mm以下の砂粒を少 し含む	②(5.9) ③(1.9)	口縁部 壺體 内外面施ナメ	豊富な施色は内赤して立ち上がり倒伏する。 底部深緑かに變化する。	
31-63	中土上輪器 耳	3TG4 gr	良	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	0.5mm以下の砂粒を少 し含む	②(4.6) ③(1.7)	口縁部 壺體 内外面施ナメ	高台は軽く寛容している。

番号	年 代	出 土 位 置	地 域	色 調	質 感	基 本 方 法	注 意 (cm)	形 態 ・手 法 の 特 徴	備 考
4T・5T出土遺物									
33 1	新石器 大変	4T・5T	良好	黑色 褐色	1mm以下の砂粒をわ ずかに含む	糊 糊(15.1) 糊(16.2)	内面 背面 外面	背晩文 タキナヌ具頭 直線文タクナ	追底部の変形がみられる。
5T6T出土遺物									
36 16	小輪器 縦・口縫部	5T 表面	良好	淡青褐色 淡青褐色	1mm以下の砂粒をわ ずかに含む	糊 糊(14.8)	内外面 横ナデ 強烈なヘラケズリ	外側にスカが付着。 空洞内へ7層。	
36 19	小輪器 縦・口縫部 縫隙内	5T 縫隙内	良好	青緑色 青緑色	1mm以上の砂粒をわ ずかに含む	糊 糊(13.0)	内外両面 横ナデ 強烈なヘラケズリ	全体的に変形なし。 内壁は直角形状。	
36-20	上輪器 縫	5T 中央部	やや不良	黄褐色 黄褐色(粘土)	0.5～1mm程度の砂 粒をわずかに含む	糊 糊(15.5)	内面 外側 横ナデ 横ナデ	舟底が認められる。 4G・4G・4Gと同一層相と考えられる。	
36-21	上輪器 縫	5T 縫隙内	やや不良	黃褐色 黃褐色(粘土)	1mm以下の砂粒を若 干含む	糊 糊(14.2) 糊(17.7)	内面 外側 横ナデ 底部外側 底部外側	16世紀代。	
36-22	上輪器 縫	5T 縫隙内	良好	黑色 褐色	1.5mm以下の砂粒を多 く含む	糊 糊(13.9) 糊(12.4)	内面 外側 横ナデ 横ナデ 底部外側 底部外側	15～16世紀代。	
36-23	埴輪器 大型	5T 縫隙内	良好	褐色 褐色	1mm以下の砂粒をわ ずかに含む	糊 糊	内面 外側 横ナデ 横ナデ ヘラ括き或底凹4柔 糊削除	内面に底を認める。	
6T出土遺物									
41-36	埴輪器 子供像	6T 3Gr	良好	暗褐色 暗褐色	2mm以下の砂粒を含 む	糊 糊(19.6) 糊(13.5)	内面 外側 横ナデ 横ナデ	小窓のみ残存。 底を削る。	
41-37	埴輪器 子供像	6T 3Gr	良好	暗褐色 暗褐色	2.5mm以下の砂粒を含 む	糊 糊(16.2) 糊(14.9)	内面 外側 横ナデ 横ナデ	内窓の窓枠。 底を削る。	
41-38	埴輪器 子供像	6T 3Gr	良好	暗褐色 暗褐色	2mm以下の砂粒を含 む	糊 糊(16.2) 糊(15.1)	内面 外側 横ナデ 横ナデ	小窓のみ残存。 底を削る。	
41-39	埴輪器 子供像	6T 1Gr	やや不良	淡褐色 淡褐色	2～3mm程度の小石 を含む	糊 糊(13.7)	内面 外側 横ナデ 底部外側 底部外側	底窓のみ残存。	
41-40	埴輪器 丸輪子供像	6T 3Gr	良好	黑色 黑色	1mm以下の砂粒をわ ずかに含む	糊 糊(11.2) 糊(13.6)	内面 横ナデ 横ナデ 底部外側	糊窓に黒色油がかかる。	
41-41	上輪器 縫・口縫部	6T 4Gr	良好	褐色 褐色	1mm以下の砂粒をや すいに含む。	糊 糊(14.4)	内面 外側 横ナデ 横ナデ	糊窓不規則。 反転現象。	
41-42	上輪器 縫・口縫部	6T 4Gr	良好	褐色 褐色	1mm以下の砂粒を含 む	糊 糊(11.2) 糊(14.1)	内面 外側 横ナデ 横ナデ	糊窓不規則。 反転現象。	
41-43	上輪器 縫	6T 3Gr	良好	褐色 褐色	2mm以下の砂粒を多く 含む	糊 糊(5.7) 糊(2.1)	内面 外側 横ナデ 底部外側 底部外側	15世紀代。 一部底部へ複数。	
41-44	上輪器 縫	6T 上中	やや不良	淡褐色 淡褐色	1mm以下の砂粒をわ ずかに含む	糊 糊(7.2) 糊(4.3) 糊(2.8)	内面 外側 横ナデ 底部外側 底部外側 底部外側	糊窓等。 底切り壁、底張りが行なっている。	
41-45	下輪器 縫	6T 3Gr	良好	淡褐色 淡褐色	1mm程度の砂粒を多 く含む	糊 糊(8.0) 糊(1.3)	内面 外側 横ナデ 底部外側 底部外側	17世紀中期以前。 反転現象。	
41-46	下輪器 縫	6T 3Gr	良好	淡褐色 淡褐色	1mm以下の砂粒を含 む	糊 糊(3.0) 糊(1.1)	内面 外側 横ナデ 底部外側 底部外側	17世紀中期以前。 反転現象。	
41-47	下輪器 縫	6T 3Gr	やや不良	褐色 褐色	1mm以下の砂粒を含 む	糊 糊(5.1) 糊(1.7)	内面 外側 横ナデ 底部外側 底部外側	17世紀中期以前。	
41-48	上輪器 縫	6T 3Gr	良好	褐色 褐色	2mm以下の砂粒を含 む	糊 糊(7.8) 糊(5.1) 糊(2.9)	内面 外側 横ナデ 底部外側 底部外側 底部外側	14世紀後半～15世紀。	
41-49	上輪器 縫	6T 4Gr	良好	褐色 褐色	1mm以下の砂粒を含 む	糊 糊(11.4) 糊(3.6)	内面 外側 横ナデ 横ナデ	15世紀代。 反転現象。	
41-50	閉器 不規	6T 3Gr	良好	淡褐色 淡褐色	1mm以下の砂粒を含 む	糊 糊(2.8)	内面 ヨビミサエ 外側 ナデ	器蓋・時間とともに不明。 ヒドの様相もないが、裏起部の調節がせい 一座を下としている。	
7T出土遺物									
46-31	埴輪器 子供像	7T 5Gr	やや不良	淡褐色 淡褐色	1mm以下の砂粒をわ ずかに含む	糊 糊(22.3) 糊(18.6)	内面 横ナデ		
46-32	埴輪器 子供像	7T 1Gr	良好	墨灰色 墨灰色	1mm程度の砂粒をわ ずかに含む	糊 糊(16.7) 糊(10.6)	内面 強引ナデ タキナヌ具頭 タキナヌ具頭	少出長合子頂上が残存。 内面へ灰土下傾上部剥落。 底部外側。	
46-33	埴輪器 子供像	7T 2Gr	良好	褐色 褐色	1mm以下の砂粒をわ ずかに含む	糊 糊(9.0) 糊(4.3)	内面 外側 横ナデ 横ナデ	小窓の「風呂白目」。 窓はかなり大きくなっている。 反転現象。	
46-34	埴輪器 子供像	7T 4Gr	良好	褐色 褐色	1mm以下の砂粒を含 む	糊 糊(7.0) 糊(3.2)	内面 外側 横ナデ 横ナデ	内面へ自然剥離が付着。 内面へ自然剥離が付着。 底部外側が剥離し、あまりない形態である。 反転現象。	
46-35	埴輪器 脚部	7T 2Gr	良好	褐色 褐色	1mm程度の砂粒を含 むや含む	糊 糊(10.9) 糊(3.3)	内面 糊ナデ 底に込み崩 外側 不明	内面へ自然剥離が付着。 内面へ自然剥離が付着。 底部外側が剥離し、子房形で底である可能性もある。 反転現象。	
46-36	埴輪器 高片	7T 3Gr	不良	褐色 褐色	1mm以下の砂粒を含 む	糊 糊(2.3)	内面 糊ナデ 底部外側 底部外側	糊窓の「風呂白目」。 糊窓は底部へ剥離をうけている。 反転現象。	
46-37	埴輪器 脚部	7T 2Gr	良好	淡褐色 淡褐色	1mm以下の砂粒をわ ずかに含む	糊 糊(2.7)	内面 糊ナデ 底に込み崩 外側 不明	内面へ自然剥離が付着。 内面へ自然剥離が付着。 底部外側が剥離し、へき端を含む	
46-38	埴輪器 脚部	7T 1Gr	良好	褐色 褐色	1mm以下の砂粒を含 むや含む	糊 糊(11.0) 糊(4.4)	内面 糊ナデ 外側	糊窓下に底板「M」字状突起を造らせる。 全体底へ丁寧な造りである。 反転現象。	
46-39	埴輪器 大型	7T 2Gr	良好	褐色 褐色	1mm以下の砂粒をわ ずかに含む	糊 糊(17.3) 糊(9.2)	内面 糊ナデ 底部外側 底部外側 直線文タクナ	底部外側へ直線文タクナ。	

神 器 番 号	器 種	坐 上位質	焼 成	色 上質：内面 外質：外面	底 上質：内面 外質：外面	底 上	法量 (cm)	形態・手法の特徴	備 考
46-40	土器 蓋 口被器	7T 2Gr	良好	灰褐色 灰褐色	灰褐色 灰褐色	1mm以下の砂粒を多 く含む	① (30.4) ② (34.4)	内面 外質 底ハケ目	46-41とよく似るが焼き度 口被内面に1条の沈線。 反転度。
46-41	土器蓋 口被器 白縁、腹部 白縁、腹部	7T 2Gr	良好	灰褐色 灰褐色	灰褐色 灰褐色	1mm程度の砂粒を多 く含む	① (28.6) ② (6.8)	LH縁内面 底ハケ目 頂部内面 底ハケズリ 頂部外面 底ハケ目 側ハケ目	46-40とよく似るが焼き度 口被内面に1条の沈線。 外質にスグ有る。 反転度。
46-42	土器蓋 口被器	7T 2Gr	良好	灰褐色 灰褐色	灰褐色 灰褐色	2mm以下の砂粒を 含む	① (19.9) ② (5.1)	横ハケ目 頂部内面 底ハケズリ 口被外面 底ハケ目 側ハケ目	外質にスグ有る。 反転度。
46-43	土器蓋 口被器	7T 2Gr	やや良好	灰褐色 灰褐色	灰褐色 灰褐色	1mm以下の砂粒を少 々含む	② (5.2)	頂部内面 底ハケズリ 頂部外面 底ハケズリ 側ハケ目	外質にスグ有る。
46-44	土器蓋 口被器	7T	良好	灰褐色 灰褐色	灰褐色 灰褐色	1mm程度の砂粒を少 々含む	② (3.6)	内面 底ハケ目 底ハケズリ 底ハケ目	外質にスグ有る。
46-45	土器蓋 口被器 LH縁、腹部	7T 1Gr	良好	灰褐色 灰褐色	灰褐色 灰褐色	1mm以下の砂粒を少 々含む	② (5.1)	内面 底ハケ目 底ハケズリ 底ハケ目	内外面とも升井。 36-20-96-16と同器種。
46-46	土器蓋 口被器	7T 2Gr	やや良好	灰褐色 灰褐色	灰褐色 灰褐色	1mm程度の砂粒を少 々含む	通常 (15.5) ② (3.3)	内面 底ハケズリ 底ハケ目 底ハケズリ 底ハケ目	内外面とも升井。(内面は蓋部の上のもの)。 ハケ目後方に残り後片を市中する。 反転度。
47-47	土器蓋 口被器	7T 2Gr	良好	灰褐色 灰褐色	灰褐色 灰褐色	1mm以下の砂粒を少 々含む	② (19.0) ② (3.5)	内面 底ハケ目 底ハケズリ 底ハケ目	14-15世紀。 反転度。
47-48	土器蓋 口被器	7T 2Gr	良好	灰褐色 灰褐色	灰褐色 灰褐色	1.5mm以下の砂粒を 含む	② (12.6) ② (4.6)	内面 底ハケズリ 底ハケ目 底ハケズリ 底ハケ目	14-15世紀。 反転度。
47-49	土器蓋 口被器	7T 3Gr	良好	深褐色 深褐色	深褐色 深褐色	1mm程度の砂粒を含 む	② (13.0) ② (4.8)	内面 底ハケズリ 底ハケ目 底ハケズリ 底ハケ目	14世紀後半？。 鉢型。反転度。
47-50	土器蓋 口被器	7T 4Gr	良好	灰褐色 灰褐色	灰褐色 灰褐色	1mm程度の砂粒を多 く含む	② (16.6) ② (5.2) ② (3.4)	内面 底ハケズリ 底ハケ目 底ハケズリ 底ハケ目	15-16世紀。 反転度。
47-51	土器蓋 口被器	7T 3Gr	良好	灰褐色 灰褐色	灰褐色 灰褐色	1mm以下の砂粒を少 々含む	② (5.6) ② (1.9)	内面 底ハケズリ 底ハケ目 底ハケズリ 底ハケ目	14世紀後半以降。 外質にスグ有る。 反転度。
47-52	土器蓋 口被器	7T 2Gr	不良	灰褐色 灰褐色	灰褐色 灰褐色	1mm以下の砂粒を多 く含む	② (13.0) ② (11.1)	内面 底ハケズリ 底ハケ目 底ハケズリ 底ハケ目	時間不明。 反転度。
47-53	土器蓋 口被器	7T 3Gr	良好	灰褐色 灰褐色	灰褐色 灰褐色	1mm以下の砂粒を多 く含む	② (7.6) ② (1.9)	内面 底ハケズリ 底ハケ目 底ハケズリ 底ハケ目	17世紀中盤以降。 反転度。
47-54	土器蓋 口被器	7T 5Gr	良好	灰褐色 灰褐色	灰褐色 灰褐色	1mm以下の砂粒を食 む	② (6.2) ② (2.6)	内面 底ハケズリ 底ハケ目 底ハケズリ 底ハケ目	14世紀後半？。 反転度。
47-55	土器蓋 口被器	7T 4Gr	良好	灰褐色 灰褐色	灰褐色 灰褐色	1mm程度の砂粒を含 む	② (7.2) ② (2.9)	内面 底ハケズリ 底ハケ目 底ハケズリ 底ハケ目	15-16世紀。 反転度。
47-56	土器蓋 口被器	7T 5Gr	良好	灰褐色 灰褐色	灰褐色 灰褐色	1mm以下の砂粒を少 々含む	② (7.0) ② (4.5) ② (1.7)	内面 底ハケズリ 底ハケ目 底ハケズリ 底ハケ目	14世紀後半以降。
47-57	土器蓋 口被器	7T 接土中	良好	灰褐色 灰褐色	灰褐色 灰褐色	1mm以下の砂粒を少 々含む	② (7.4) ② (4.7) ② (1.7)	内面 底ハケズリ 底ハケ目 底ハケズリ 底ハケ目	14世紀後半以降。
47-58	土器蓋 口被器	7T 5Gr	良好	灰褐色 灰褐色	灰褐色 灰褐色	1mm以下の砂粒を含 む	② (7.6) ② (4.8) ② (1.5)	内面 底ハケズリ 底ハケ目 底ハケズリ 底ハケ目	17世紀中盤以降。 反転度。
47-59	土器蓋 口被器	7T 5Gr	良好	深褐色 深褐色	深褐色 深褐色	1mm以下の砂粒を多 く含む	② (4.6) ② (0.9)	内面 底ハケズリ 底ハケ目 底ハケズリ 底ハケ目	底面外壁は完全凹凸。
47-60	土器蓋 口被器	7T 4Gr	良好	棕色 棕色	棕色 棕色	1mm以下の砂粒を多 く含む	② (3.7) ② (1.1)	内面 底ハケズリ 底ハケ目 底ハケズリ 底ハケ目	一觸即上覆元。
47-61	土器蓋 口被器	7T 5Gr	不良	灰褐色 灰褐色	灰褐色 灰褐色	1mm以下の砂粒を少 々含む	② (4.4) ② (1.2)	内面 底ハケズリ 底ハケ目 底ハケズリ 底ハケ目	一觸即上覆元。
47-62	土器蓋 口被器	7T 2Gr	良好	灰褐色 灰褐色	灰褐色 灰褐色	1mm以下の砂粒を少 々含む	② (1.7)	内面 底ハケズリ 底ハケ目 底ハケズリ 底ハケ目	高台部・腰乳頭。 内外面にスグ有る。
47-63	土器蓋 口被器	7T 3Gr	良好	灰褐色 灰褐色	灰褐色 灰褐色	1mm以下の砂粒を多 く含む	② (20.6) ② (3.0)	内面 底ハケズリ 底ハケ目 底ハケズリ 底ハケ目	高台部の一部にスグ有る。 反転度。
47-64	土器蓋 口被器	7T 4Gr	良好	灰褐色 灰褐色	灰褐色 灰褐色	1mm以下の砂粒を多 く含む	② (14.0) ② (1.6)	内面 底ハケズリ 底ハケ目 底ハケズリ 底ハケ目	底面外壁にヘア記号。 反転度。
S.T.出土遺物									
48-1	陶器蓋 子母器	8T 2Gr	良好	灰色 灰褐色	灰色 灰褐色	1~2mmの砂わざか に含む	② (20.0) ② (14.0)	内面 底ハケズリ 底ハケ目 底ハケズリ 底ハケ目	外質に灰を拭り、一部熟化。 15世紀後半による墨みが有る。 稍十種出目。 反転度。

(1) 口被部
(2) 底部
(3) 種類または焼成度
(4) 保光度及び焼成度

写 真 図 版



第1T調査状況（南西から）



第1T調査完了状況（南から）



第1TSD 02 完掘状況（北から）

図版2



第1TSD03遺物出土状況①
(南から)



第1TSD03遺物出土状況②
(南から)



第1TSD03土層堆積状況
(東から)



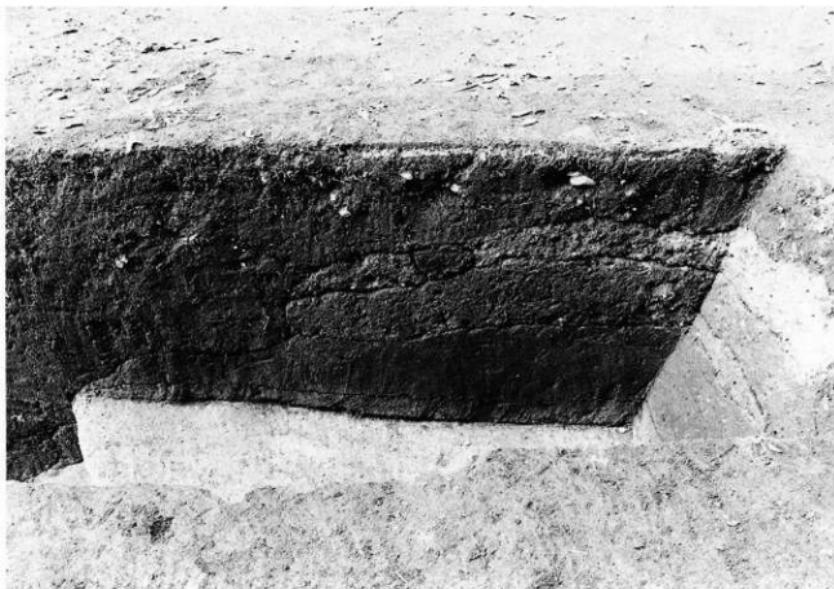
第2T調査前状況（南西から）



第2T調査完了状況（南西から）



第2T北東壁土層堆積状況（南西から）



第2T北西壁埴丘寄り土層堆積状況（南東から）



第3T調査前状況（西から）



第3T調査状況（西から）



第3TG2gr遺物出土状況
(西から)

図版6



第3 TG 8 gr調査完了状況
(西から)



第3 TSE 01 完掘状況
(南から)



第3 TSB 01 検出状況
(西から)



第4T調査完了状況（南から）

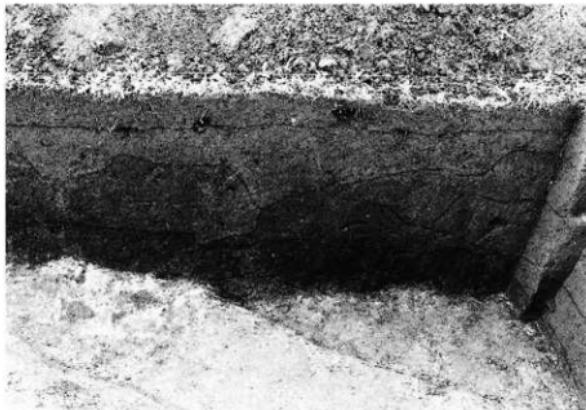


第4T調査完了状況（北から）



第4TSD 02完掘状況（南から）

図版8



第4 TSD 02 土層堆積状況
(東から)



第4 TSD 02 土層堆積状況
(南から)



第4 TI 1・12 gr調査完了状況
(北から)